
武装せし神の姫

名も無き武装神姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装せし神の姫

【Nコード】

N2670X

【作者名】

名も無き武装神姫

【あらすじ】

元々は人間ですらなかった物がIS世界に転生。最強にするつもりは在りません。

イア、イア、マリーセレス。

*タイトルを変更しました

*基本的に18時更新です

*作者名を変更しました

Ver.1 (前書き)

注意：一部、武装神姫mk2のネタバレを含みます。

V
e
r
i

戦いは終わった。
終わったはずなのに。

マスターがクズの代わりに落ちて行く。

高層ビルの屋上から落ちて行く。
ただ一言、落ちるハズだったゴミ野郎に言葉を伝え。

「責任を果たせ」

それだけ言つて、マスターは私の視界から姿を消した。
なぜ、マスターが死なねばならない？

力無く膝をついている勘違い大バカ野郎の代わりに死ぬ理由はな
んだ！

「お前が！！ お前がバカみたいな行動を取るから！！」

私は叫ぶ。

この小さな体で、力の限り叫ぶ。

「お前みたいなバカが存在しなければ…。マスターは、マスターは、
死ななかつたのに！」

私は泣いた。

この身体には涙腺なんてありはしない。

けど、確かに涙を流し、嗚咽を漏らしながら泣いた。

そして、結局。この事件は事故として扱われた。

マスターの死因は屋上の手すりが錆び、風化を起こしていたから
という扱いになる。

納得は出来なかつた。

だけど、私が真実を告げる事は出来ない。

だって、マスターがソレを望まないから。

だから私は、機能停止するまで真実を隠し続ける。

マスターを知り、あの場所に居合わせた者たちも誓ってくれた。

決して真実は口外しない。

秘密は守り続ける。

この約束は当事者全員が死に、全員が機能停止した後も守られ続けた。

マスターと共に生きた私は、マスターの眠るお墓の前で機能を停止させるべく移動する。

マスターが私のマスターとなり、私に与えてくれた名前を胸に。

『名前か、迷うな。うーん。よし、マリーチだ。よろしくな、マリーチ』

そう。

私は、Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェストポッツォ ファブリカ） 製、型番OP010T、テナクルス型MMSマリーセレス。

マスターが与えてくれた名前は、マリーチ。

「マスター。マスターが亡くなってから90年の月日が立ちましたですう。ヤツはマスターとの約束を守り、信頼を回復させ、より発展させました。マスターが生きていた頃、私は新型で、最新型の名で呼ばれていたのが懐かしいですう。いまでは、フブキ型同様に旧式と呼ばれているんですけどね。だから、もう良いですか？ そちらに行っても良いですかあ？ そろそろマスターの暖かい笑顔を見たいのですう。だから、ダメと言われても、そちらに逝きます。いつまでも、いつまでも、お側に置いて欲しいですう」

マスターが死んだ時からずっと停止させたかった私の胸に収まるコアセットアップチップ
COC、私はソレを自らの手で引き抜いた。

ユックリと意識が遠のいて行く。

思い出がシャボン玉の様に弾け飛び、マスターの顔しか思い出せない。

「あ、アア……。マ、スター。そこ、に。居たんですね。私も、そっちに。行くですう」

最後にマスターの笑顔が見えた気がする。
ちよつとだけ、照れ臭そうだ。

「マス、ター」

こうして、伝説的なチャンピオンである人物のパートナーは長い人生の幕を下ろした。

彼女は如何なる修理を行っても起動する事は無く、何をしても記録のサルベージに成功する事は無かった。

彼女の体はチャンピオンの親友であった人物の孫の手により、チャンピオンの墓に葬られる。

チャンピオンとそのパートナーの名は、決して忘れられる事無く語り継がれた。

彼と彼女が死した後に判明した事実により、武装神姫の未来を守る為に命を投げ出したチャンピオンを笑うマスターと神姫たちは誰も居なかった。

Ver.2 (前書き)

修正

織斑一夏のプロフィール内容

『織斑一夏、中学3年生。今年、藍越学園』 『織斑一夏、中学3年生。藍越学園』

理由

今年だと時間軸がおかしくなる為。

懐かしい夢を見た。

まだ自分がマリーチで在った時の夢。

「懐かしすぎるですう」

私はあの後、なぜか知らないが意識を取り戻した。

取り戻したのだけど、人間の赤ん坊になっていたのだ。

まあ、そんな混乱状態でも月日は経過する。

気がつくともう、この世界に誕生してから十三年くらいだ。

天蓋付きの豪華なベッドから降り、身体を伸ばす。

たこルカとかいうキャラクターが描かれたパジャマをササッと脱ぎ捨て、ポイ捨てる様にベッドの方に放り投げ、着替える。

記憶の中にあるマスターが着ていた服装。灰色のワイシャツに黒色のジーンズ、黒のテラードジャケットを少し着崩した感じだ。

実に女性らしくないが、別にどうでも良い。

服を着た後は、豪華な装飾が施された鏡の前で寝癖のチエックは欠かさない。

マスターも寝癖チエックだけは欠かさなかった。

でも、いつもいつもアホ毛ポイのが一本立っていて、私が一生懸命櫛で直していたのは良い思い出だ。

自分で起きて、自分で朝の着替えをする様になってから八年間。

耳は普通の人間と同じになったけれど、見た目はテナタクルス型MMスマリーセレスで在った頃と全然変わらない。

髪の毛の色はマスターの趣味でオリジナルカラー color A
ではなく、color Cの赤茶色だ。

瞳のカラーだけはオリジナルカラー color Aのままで、翠
眼だけだ。

「ところで、ジイ。着替えの時は入ってくるなど言ったと思うので
すがあ？」

私が振り向くと、豪華な造りの扉の前に背筋をビシッと伸ばした
老執事が一人立っている。

「マリーチお嬢様。僭越ながら、マリーチお嬢様は、Ovest
Pozzo Fabrica（オヴェスト ポッツォ ファブリ
カ）総帥としての自覚が足りませぬ。いつ何時、マリーチお嬢様
のお命が狙われるのではないかと思うと。ジイは、ジイは！！」

この世界での私の名前は、マリーチ・オヴェスト・ポッツォ・フ
ァブリカという。

両親は私を生んですぐに他界……。したわけではなく新婚旅行に行
き、今もどこかでラヴラブしている。

何で分かるのかですって？

毎年、毎年。

正月になると写真つきで年賀状が送られてくるからだよ！！

ったくよお。自分の娘ほおってなにやってんだア！？ ざけんじ

やねエ！！

「ジイは心配性過ぎですう。ココは日本ですよあ？ アメリカ支部
ならいざ知らず、ここ日本支部なら問題ないですう。それにお父様
とお母様が私に譲ってくれた支部は日本支部だけ、日本の安全性の

高さは折紙付きですう。白騎士事件がその証拠ですう」

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）。

両親が運営すっぱかしてラブラブ、イチヤイチャと遅めの新婚旅行を6年以上も続けている為、私の管理するココ日本支部が実質の本部と成りつつあるIS開発企業の事だ。

日本のIS開発企業である倉持技研とは犬猿の仲だが、そもコンセプトが全く違うので問題ない。

倉持技研が作るISは、打鉄を初めとし、何となく日本のSAMURAIをイメージさせる物が多く、性能も特化型よりも安定した使いやすさを求めたタイプだ。

ソレに比べ、我が社Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ/以降、O.P.Fと省略）が作るISは何かにつけて特化型にしたがる傾向が強い。

まあ、開発部に自由に作るように指示しているし、その甲斐もあって私の意見も通りやすくなり、必然的に完全特化型なISが多数出来上がってしまった。

代表作は、第二世代型ISアーンヴァルとストラーフだろう。

同期である打鉄、ラファールの安定したスペックと操縦しやすい汎用性とは違い、異彩を放っている。

前世の記憶を元に天使型アーンヴァル/高機動射撃型と悪魔型ストラーフ/重装攻撃型を再現したISを製造したダケに過ぎないが、

「で、ですがマリーチお嬢様」

さっきからうっさいこの老執事はジイヤのセバスチャン「ウォン」オーデンという。

ウォルター・クム・ドルネーズよろしく、バトラーである。
一部では有名な軍人らしいのだけど、詳しくは知らない。

「もう、うるさいですう。嫌いになっちゃうですよ？ とりあえず、私はお腹が空いてるんです！！ 食堂に行くから仕事をする為の準備を整えておくですー！！」

私は冷たく言い放ち、食堂へ向かう。
ジイヤにはコレくらいが丁度いい。

食堂へ向かうと、もう何人かの社員が食事を取っていた。
私の部屋とは大分違うが、社員食堂というよりは高級レストラン
というような内装だ。

実際、三ツ星店を経営するシェフたちが交替交替で朝食、昼食、
夕食、夜食を用意して待っている。

高級レストランと言ってもなんら間違いは無いだろう。

私の朝食はいつも通り用意されていた。
シェフに挨拶をし、すれ違う社員にも愛想を振り撒く。
そして、私を生んだ母に習い。前世のマスターがやっていた様に
手を合わせ。

「いただきますですう」

と言ってから朝食を取り始める。
私は基本的に日本食しか食べない。
なので、食べ終わったら当然。

「ごちそうさまでしたですう」

と言ってから食堂を後にした。

食事を食べ終わってから総帥というか社長として様々な書類に目を通し、印を押して行く。

その書類の中に見合い相手の写真が入っていたりもするのだが、ジイやがやっているのだろう。

確認次第、破いて捨てる。

マスター以外の男に興味はない。

「とんでもない地獄ですう。私が万能型天才だからこそなせるのですう。他の人なら真っ先に死ぬだろ」

愚痴が社長室を木霊する。

手伝うものは誰も居ない。

だからこそ、様々なIS関連企業からのメールを他所に別のプログラムを立ち上げる事が出来る。

パソコンの画面には一人の男性とその名前、プロフィールが映し出されていた。

『織斑一夏、中学3年生。藍越学園に入学を希望。容姿端麗、己の信念を貫く熱い一面を持ち合わせる。学生時代多くの女性に言い寄られたが、それらの行為に一切気がつかなかった事から？唐変木・オブ・唐変木ズ？と呼ばれていた。かの有名な織斑千冬の弟である。また、織斑千冬が第2回IS世界大会で不戦敗となった理由は、織斑一夏が何者かに誘拐されていた為との情報がもたらされている』

似ている。

記憶の中に何時までも輝き続けているマスターの笑顔にソックリ

だ。

性格こそ違っているが、容姿が似ており、たった一つマスターと全く同じである？己の信念を貫く熱い心？を持っているのであれば、確かめなければならぬだろう。

だがその前に。

私は、私である為の物を完成させなければならない。

織斑一夏の写真とプロフィールを嚴重ファイルの中に戻し、私はもう一つのプログラムを立ち上げた。

それは、私が私である為に必要な物。

テンタクルス型MMSマリーセレス武装の設計図と様々な理論。

天才、篠ノ之束が創り出した白騎士を凌駕する為に考案した私による、私だけの、私のためだけに存在するIS。

？ク・リトル・リトル型IS、テンタクルスⅡマリーセレス？

現在試作中の第三世代型、セイレーン型エウ克蘭テノ回避特化型とマーメイド型イーアネイラノ水中適応型は、世代すら与えられていない私専用のISを作り出す為の隠れ蓑に過ぎない。

「とりあえず、いまは仕事が優先か…。だりい」

あれから1年が立った。

我が社は倉持技研を潰さんとする様な勢いで急成長を遂げ、量産型ISのシェア世界第三位であるデユノア社と並ぶようになる。

特化型ISは確かに汎用性に優れたISに比べると物凄く使いにくいが、IS学園のおかげでそこそこ特化型ISを使用できる操縦者が育ってきたという事だろう。

身近なところの話題はこんなところだ。

世間の話題はただ一つ。

とある男性がISを起動させたという、大事件とも言える事柄が取り上げられている。

？世界で唯一ISを動かせる男子？のニュース特集は中々に面白いものが合った。

「へえ。さすがはマスターとソックリな事はあるですう」

私はベッドから上半身だけを起こし、そのニュースを大型テレビで見ている。

だが、個人的な感想とすれば面白くない。

IS学園には女性しか居ない。当たり前だがISを動かせるのは女性だけだったのだ。

「チツ、面白くねえ…。セバスチャン！！ 私はIS学園に行く。入学手続きをしておけ、無理にでも割り込ませろ！！」

普段の口調など知った事か。

このままではマスター似の男が別の女に取られてしまう可能性がある。

その可能性を潰す為にも、私が赴くのが一番だろう。それに。

「マリーセレスの試験日も近い。データ収集としては丁度良いだろう」

世界各国の企業から奪い取ったコアの数は4つ。

そして、そのコアを使用して作った専用ISの数も4つ。

私のマリーセレス。

専属侍女のプロキシマ。

吸収した会社、A / c u t e アキユート・ダイナミッククス D y n a m i x が作ったラプティ

アスにアーティル。

まだ操縦者は決まっていらないが、優秀な人材を引き抜けば良い。

O・P・Fに逆らえる企業は少ない。世界で一位と二位、そして同位である三位の三社くらいな物だろう。

後数年もすれば、O・P・Fが一位となり、好き放題できるようになるかもしれない。

「ですが、お嬢様は今年で中学3年生、IS学園は一応高校で」

「割り込ませりやいいだろ。それにアメリカじゃプリンストン大学を卒業してるから怪しまれねえよ。ISの操縦技術を高める為に入学したとでもしておけ」

いつも通り扉の前でビシツと背筋を伸ばし待機しているジイヤに冷たく言い捨てる。

少しシヨボンとしていたが、気にする事ではない。

私はキャミソールを脱ぎ捨てる。

キャミソールを脱ぎ捨てた瞬間、ジイヤが視線をこちらに向けた。何時もの事なので、愛用の三十二口径自動拳銃SIG | SAUER | P 230を顔面に向けぶち込んでおく。もちろん、当るわけが無い事も理解できている。

「着替えるから出て行くですう」

「ジイヤには、お嬢様の成長を報告する義務が」

SIG | SAUER | P 230から放たれた弾丸は、ジイヤの頬をかすめ、防弾使用の壁に当たり突き刺さった。

「出て行って言っただろ？」

「……。朝食の準備をしてお待ちしております」

ジイヤはビシッと背筋を伸ばし、部屋から出て行く。

ジイヤが確実に出て行ったことを確認し、私は普段通りの服に着替える。

「割り込ませたとしても入学は一カ月後くらいになるですね。なら、入学までにIS学園での部下を仕入れておく必要があるですう」

私はニヤリと微笑みを浮かべ、食堂へと向かった。

そして数時間後。

場所はベルリン。ドイツ連邦共和国の北東部に位置し、現ドイツ

連邦共和国の首都である。

かの有名なベルリンの壁があった場所だ。

なぜドイツを訪れているのか？ 理由は簡単。

ドイツが所持するIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ。通称？黒ウサギ隊？から人を一人だけ引く抜く為に来て来た。

他の国でも良かったのだが、ちょっと頭が面白い事になった研究者でも居たのだろう。

このIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの隊員たちは、肉眼へのIS用補佐ナノマシン移植者だけで構成されている。

ナノマシン技術だけは我が社も持ちえて入るが、実際に行おうとすると「非人道的だ」などの言葉を世界から貰う事は必然。

だからこそ、技術はあれど、試す事が出来なかったのだ。

そこで考えた。

我が社の技術を注げる存在はいないものかと。

世界は広い。

似たようなことを考える人間なんて無数に居る。

そして、見つけたのがドイツだったというワケだ。

「我が社の保有する第二世代型ISのアーンヴァルとストラーフを50機。第二世代強化型アーンヴァルトランシエ2とストラーフdisを10機。コアさえセットすればいつでも起動可能状態。悪い取引じゃないと思うですう」

高層ビルから外を見ながら、私は軍部最高司令官の男性と交渉を行う。

もちろん、O・P・F総帥としてだ。

「破格だな。どういっつもりだ？」

名前なんて覚える価値もない。敵つい軍人が睨みを利かせる。顔すらも覚える価値は無いだろう。

「どういっつもりもないですう。そちらのIS配備特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼから一匹。その中でも特に落ちこぼれの黒兎を譲って欲しいだけですう」

敵つい軍人は私の話を聞き、余計に警戒を深める。

どう考えてもあちらにはメリットだけであり、承諾しない理由がない。

「しかし」

「うぜえな。テメえには断る理由なんてねんだよ！！ いいか？ こっちだって破格だって事くらいわかってんだ。それともアレか？ テメえは、IS用補佐ナノマシンが世間的に公開されるとでも思ってるのかア？ こんな旧式なんざ用はねエんだよ。私が欲しいのは、私の為だけに動き、私がいくら弄り回そうが文句を言わない従者。どうせだからある程度教育されてるのが欲しかったからテメえん所に来ただけだ。断るンなら別を当るですう」

少し強く言っただけで軍人の顔色は悪くなった。

我が社の所持するアーンヴァルとストラーフは、打鉄とラファール・リヴァイヴ並に手に入りやすいが、その強化型であるトランシエ2とdisの入手は困難を極める。

第二世代の仲でも特に強く、デュノア社が所持するラファール・リヴァイヴ・カスタム？のスペックを大きく上回ったISなのだから。

「クツ…。分かった」

「アハツ、最初から素直に頷いていれば良いんです。はあ、快感です」

一方的な交渉が終わり、部屋を出た。
もう様はない。

後日、日本支部に送られて来る我な黒兎を調教する為の準備でもしておこう。

落ちこぼれを私の手で私専用にすると思つと、頬が緩む。

「楽しみです」

O・P・F専用ジェット機に乗り、滞在時間2時間ほどでベルリンから住まいのある日本へと帰る。

微笑みは隠さない。

コレでやっと、マスターソックリの男に会うことができるのだ。
笑みを漏らすなという方が無理がある。

しかも、これから私専用の従者を調教できるのだから、余計に笑みが生まれる。

楽しい夢を見るように、私はジェット機の仲で眠りに付いた。

ドイツ軍との取引が終わり、4日間ほどたった。

我が社の方はその日のうちに品物を送ったのだが、あちらからは4日遅れ。

「まあ、良いですう」

私の目の前には、弱々しく怯える黒兎が一匹。

本当にIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ所属だったのだろうか？

「あ、あの、軍よりこちらに」

「黙れですう」

「……」

眼帯はしている。

チエック用の生体センサーでもIS用補佐ナノマシンは確認された。

まるで群れから離れた兎。

「まあ、良いですう。予定通りの出来の悪さは褒めてやるですう。

お前、名前は？」

「あ、はい。私は」

「黙れですう」

「……」

なんて素直で、弄りがいのある黒兎だろう。

黙れという度にビクリと肩を震わせ、私の顔を伺うのだからたまらない。

「お前の名前は知ってるですう。ドロテアー・リッケン。IS配備特殊部隊シユヴァルツェ・ハーゼ所属、IS用補佐ナノマシン移植者の一人。そして、軍部により我が社Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）に売られた哀れな黒兎」

私の部屋。

社長室にある豪華な作業用テーブルの上に肘を突き、品定めするようにドロテアーを見る。

ドイツ人とは思えぬほど真っ黒なセミロングの髪。弱々しく私を見つめる瞳は軍人らしくない。

身長157cm、体重49kg、スリーサイズB89、W55、H88、血液型AB、誕生日不明。

誕生日が変わらないのは仕方ない。

ドロテアー・リッケンは、遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーと聞いている。

生きているが生きていない人間といるだろう。

「ドロテアー。お前には専用機をあげるですう。それで私と一緒にO.P.Fの第三世代IS試験操縦者という名目でIS学園に入学するですう」

「え？ あの」

「口答えは許さないうですう」

「……。はい」

ドローテア専用機は決めていた。

IS学園入学まで、あと2週間と少しある。

それまでにアーテイルを調整すれば良い。

「良く聞けですう。お前にはこれから第零世代型ISのアーテイルの調整を受けてもらうですう。一日でも早く専用機になれるですう」

「第零世代？」

怯えた表情でありながらも分からない所を聞くのは良い。

私は椅子から立ち上がり、社長室から見える海を見ながら言う。

「良い所に気がつくですう。まあ、お前はソレに乗るのだから教えてやるですう」

？第零世代

それは、既存のコンセプトとは異なる形式を持ち合わせた次世代型ISの事。

第一世代でもなく、第二世代でもなく、第三世代でもない。

ましてや、第三世代を後継として進化するであろう第四世代でもない。

全く新しい世代。

そして、天才篠ノ之束に対する挑戦を込めた存在。

そして。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）が独自に開発したライドオンシステムにより、ISと操縦者の繋がりをより強くする事で更なる性能UPを行うことに成功した。

しかし、繋がりが強固になった事で初期化は困難となり、操縦者が登録されれば操縦者が死ぬまで権利を保持する。

たった一人の為に用意された本当の意味でのたった一つの機体。それが第零世代。？

私は説明を終えると、ドロテアの方を向く。

「もし、お前がダメダメならアークテイルをバラして作り直さなきゃ行けなくなるですう。そうなたらお前は用済みですう。」

言葉を強め、テーブルを強く叩いた。

たったソレだけでドロテアは涙目になり、何か必死に言おうとしている。

だが、私が恐ろしいのだろう。

何も言えず、ただ立ち尽くしているだけだ。

「そんなに怯える必要はないですう。今の所、お前を破棄する予定はないですう。たとえ使えなくても私の専属メイド二号になってもらうですう」

できるだけ優しい微笑みを浮かべ、ドロテアに近づき髪を弄る。そして、その露出した首に爪を立てた。

「痛ッ……」

「うふふ。お前と過ごすIS学園での生活が楽しみですう。ジイ、ドロテアを部屋に案内して日々のカリキュラムを教えてあげるですう」

呼ぶと同時に社長室の扉が開き、ジイヤが現れる。
もしかしたら、扉の前ですっと待機していたのかもしれない。
そう考えると、ちよつとなんかイヤだ。

「かしこまりました。では、ドロテア様。こちらへ。お部屋へ案内致します」

ジイヤは礼儀正しく一礼し、ドロテアをエスコートする。
ドロテアはというと、慣れていないのだろう。

オドオドしながら私の方を見やり、頭を下げながらジイヤに連れ
添われ社長室を出て行った。

「フン、アーティル型に似ているから熱血漢かと思っただですがあ、
違っただですね。まあ良いですう」

やたらと豪華な椅子に深く座り、もたれ掛かりながら思いを馳せ
た。

あと2週間。あと2週間ほどでマスターによく似た男と対面する
事になっている。

なんと言おう。

人間、第一印象は大切だ。

他のヤツラに嫌われるのは構わない。

どうでも良い。

友達など要らない。

私にはマスターだけが必要なのだ。

「神様という名の存在が居るのならば、一度だけで良いですう。マスターの笑顔を私に……。ああ、マスター。マスター。会いたいですう」

誰にも知られない様に涙を流す。

見られてはいけない。

聞かれてはいけない。

だって私は O v e s t P o z z o F a b b r i c a (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) 総帥、マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ〓ファブリカなのだから。

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレスのマリーチではないのだから。

Ver.4.5(前書き)

修正

武装？ハフ・ゲーファ？の説明

弾道

弾頭

理由

誤字

緒方

紅夜様に感謝

名前

マリーチⅡオヴェストⅡポッツォⅡファブリカ

容姿

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレス型と同様

ヘアカラーcolor C (赤茶色)

アイカラーcolor A (翠色)

耳は尖っては居ない

設定

Ovest Pozzo Fabbrica (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) の社長の娘として生まれる。

数年間は両親に育てられたが、ある日を境に両親が新婚旅行という名の仕事放棄を始めた為、3歳の時に貰ったOvest Pozzo Fabbrica (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) 日本支部で社長として働く事を強制された。

だが、前世である神姫同様の情報処理能力と記憶能力を持ち合わせていた為、Ovest Pozzo Fabbrica (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) を支える実質の総帥として見られるようになった。

開発部には自身の設計図と理論を纏めたものを渡し、自由な作成と研究を許している為、発言力は強力である。

また、社長となってから数年間の間に世界中のIS開発企業を取り込み、勢力を伸ばした。

現在は世界シェア第三位のデユノア社と同位である。

性格

言葉遣いは可愛らしいものであるが、残忍さ、凶暴さが垣間見える事が多い。

自他共に認めるサディストである。

だが、ソレがイイ！！ という開発部は変態の集まりだろう。

最近、マスターにソックリな容姿を持つ織斑一夏に興味がある。

専用IS名

ク・リトル・リトル型テンタクルスⅡマリーセレス

設定

マリーチが自らの化身として開発に着手したIS。

開発陣営からも人気が高く、無茶苦茶な設計がされている。

操縦者を守る装甲らしき物が一切見当たらないという狂気の発想の体現。

スカートの様に展開された特殊ユニットが最大の特徴である。

頭部には大型ヘッドドレスの様なパーツ？ポントピダン？が採用されており、一見可愛らしさを醸し出している。

だが、このパーツは頭部を守るヘッドギアへと変化するように作られており、ヘッドギア状態になった時に制限されたりミッターを解除するように設定が施されている。

スカート状の特殊ユニット？アーク・E・トウージス？は、マリ
ーチ曰く触手をイメージして作られたものらしい。

裏側にはスラスタが無数に付いており、まるで吸盤を思わせる。
様々な箇所にも可動関節と可動軸があり、海生軟体生物の足の様に
自由自在に動かす事が可能だ。

また、特殊ユニットの位置を上半身側にズラす事が可能であり、
マントの様に使用する事も可能。

両肩には実盾ともなる？ダゴンスパツラ？が装着されている。

エネルギーを消費する事で通常のシールドバリアとは異なる強固
なバリアで全身を包む事が可能。

また、右腕にも？ハイドラ・スクード？という実盾が装備されて
いる。

こちらはエネルギーに一切頼っていない。

武装

双剣？サーペンタイン？

二振りの剣。扱いやすいサイズに収まっており、斬撃を行う際
にエネルギーを利用しシールドバリアを切り裂く仕掛けが施されて
いる。

エネルギーを使用せずに実剣として用いられるのがもつぱら。

絶対防御は切り裂けない

機関銃？イング・ペイカー？

ハンドガード部分に巨大な刃が付いた見た目ハンドガンな機関
銃。

弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなる
まで撃ち続ける事が出来る。

バズーカ？ハフ・グーファ？

弾頭に追尾センサーが取り付けられているパンファーフアウス
ト。

イング・ペイカー同様に弾を直接転送する為、拡張領域内の弾
が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

斧？エルヴァン・アクス？

装甲破壊というコンセプトの元に作られたハンドアックス。

拡張領域内に大量に収められており、一つ壊した所で何の意味
もない。

Ver. 4.5 (後書き)

シーフ嫁は死ねですう

O・P・F | NETジャーナル 第一回(前書き)

タイトル変更に伴い、サブタイトルを変更いたしました。

『なぜなに武神装甲』

『O・P・F | NETジャーナル』

O・P・F | NETジャーナル 第二回

「第一回、O・P・F | NETジャーナルを開始するですう」

「パチパチ、ワーワー」

「黙れ」

「……」

「えー。この？O・P・F | NETジャーナル？では、今後登場させる予定だけある武装神姫の紹介および感想の返答をおこなって行くですう」

「司会進行は、マリーチ様と私ドロテアの二人で行います」

「では、さっそく。現在名前だけ登場している武装神姫を紹介するですう」

天使型アーンヴァルおよび天使型アーンヴァルトランシエ2。

武装神姫第一弾パックにて販売された。

基本人格が素直で一番扱いやすいと思われる。

武装神姫バトルマスターズでは、後継機に役目を取られたが、装備自体は人気らしい。

悪魔型ストラーフおよび悪魔型ストラーフbis。

アーンヴァルと同時に武装神姫第一弾パックにて販売された。

基本人格は我侷な子供。だけど、後継機はクールな人格。私は昔の方が好きだった。

武装神姫バトルマスターズでは、後継機に役目を取られつつも装備は大人気という感じ。

「両者とも、後継機が出てからは生産されていないという設定なのでしょうか？」

「後継機でたから、もうレア物扱いなんですう。かわいそうですね」

「マリーチ様、あんまりかわいそうって思っていますよね？」

「あア!？」

「ひっ、ご、ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。．．．e t c」

「んじゃ、次の紹介に行くですう」

セイレーン型エウ克蘭テ。

武装神姫第五弾パックにて販売された。

神姫NETジャーナルで主役をやっていた事がある。

神姫NETジャーナルの記事一覧へ戻る為のアイコンは、武装神姫バトルロンドが終了するその日まできつと彼女らのSDが担当する事になるのだらう。

武装神姫バトルマスターズ Mk.2にてPSPにも参戦を果たしたが、バグが多くて色々に進まない。

マーメイド型イーアネイラ。

武装神姫第五弾パックにて販売された。

胸が異常なまでに大きい。

水中適応型として、あれで良いのだろうか？ しかし、あまり疑問に思っていると複数の武装紳士を敵に回しかねないので私は考える事を破棄する。

神姫NETジャーナルで主役をエウクランテと一緒にやっていた。

神姫NETジャーナルの記事一覧へ戻る為のアイコンは、武装神姫バトルロンドが終了するその日まできつと彼女らのSDが担当する事になるのだろう。

武装神姫バトルマスターズ Mk.2にてPSPにも参戦を果たしたが、エウクランテ同様にバグが多くて色々に進まない。

「ごめんなさいごめん」

ゴスツ。

「ひぎゅ…」

「壊れたテレビは叩けば直るですう」

「ひつ。も、もう治ってます。大丈夫です。だから、ジレーザロケツトハンマーを掲げないでくださいい！！」

「チツ、まあいいですう。さて、紹介したエウクランテとイーアネイラは今後登場させる予定ですう」

「登場箇所に関しては、すでに決まっています。のちに福音事件と呼ばれ」

ドゴンッ。

「みぎゆ…」

「ネタバレは程ほどにですう。それじゃ、感想返答と行くですう」

> kusari様<

はじめましてkusariです

名前が違ったから最初誰だか分からなかったです

武装神姫はあんまり詳しくありませんが頑張ってください
次回も楽しみにしています

「楽しみにしていただけるのはうれしいですう」

「背後のアファ」

ドスッ。

「じぶっ…」

「背後のアグラバイトも喜んでいるですう」

> 蒼 龍一<

いつも爆発させられてた子とは思えんな・・・w

「よくわからないですう」

「きつと、アファ」

ザクッ。

「みぎやー!」

「とりあえず、今後ともよろしくですう」

>緒方 紅夜<

機体の登場は何時ぐらいかなー、とwktk。
にしてもどんだん性格が凶悪になっていく。

一夏とは合わん性格だなー。

そして黒兔がかなりウサギだな。

大丈夫か、こいつ。なんか途中で病みそうで不安。

IS的に三輪車とかは出ないけど、牛と虎は出てほしーなー。
というかあの人型ロボは出て欲しいなー、と。

「寅型ティグリスと丑型ワイトウルースの事ですねえ」

「人型ロボといえば、カブト型ランサメントとクワガタ型エスパデアを思い浮かべてしまいますね。あれ？ マリーチ様それは？」

「サソリ型グラフィオスとコウモリ型ウエスペリオーを合体させたドラゴンの設計図ですう」

「え…？ あ、そうそう。武装に関してはフィギュアを再現すると色々和无茶がありました…。分けたのですが、良い判断と言っ

て頂いたのは素直にうれいす」

「そうじゃん！ すっごくうれいじゃん!」

「マリーチ様、エレキギター型ベイビーラスになってますよ!」

誤字報告有難う御座います。ちなみに、ハフ・グーフアですが、ゲーム内ではバズーカでフィギュアではパンツァーファウスト。そ

してレールアクションはミサイルという不思議武装です。おそらく、追尾センサーが付いた弾頭をマリーセレスが触手ユニットで分投しているからだと思われませんが、どう考えても性能はミサイルでした。なので、通常時は飛距離の短いバズーカとし、マリーセレスの特殊アクションではミサイルとして扱って行こうと思います。

>歪曲詩<

分類分けとしては、主人公 一夏のヤンデレものになるんだろうか
(笑)

それとも「似ているのに本人じゃない」と愛が憎悪に変わったりとか。

何にせよ、続きが楽しみです。

ちなみに、私はヤンデレを相手が受け入れてイチャイチャする話が好きだったり…(聞いてませんよね(笑))

次回の更新も楽しみに待っています。

完結目指して頑張ってください。

「この私がヤンデレですって!」

「マリーチ様はどう見てもヤンデレですよ」

グシヤ。

「ひぎゃあー!!」

「私はヤンデレじゃないですう。デレデレですう。それに似ているだけという事は分かってるですう(Ver.3&Ver.4でソックリさんであり本人でないと判断しています)」

「そ、そういえば、まだソレはシリーズの完結が…」

ドスツ、ボコツ、メギョ。

「ひゃうー!」

「うるわいですう」

「とりあえず、今回はこんな感じですよ」

「うぐう…。はあ、はあ…。この? O.P.F | NETジャーナル
?は…。Ovest Pozzo Fabbrica(オヴェスト
ポッツォ ファブリカ)とA/cute アキュート・ダイナミッククス Dynamicの提
供で…。はあ、はあ、お送りしま、した」

パタリ。

「この程度で倒れるなんてまだまだですよ」

あれから2週間立った。

時が経過するのはこんなにも早いモノだったのか。

前世ではあんなにも苦しんだ時間が、いまの人生ではこんなにもアツサリと過ぎ去ってしまう。

胸が苦しい。

私は落ち込んだ気分を持ち直す為、ドローテアを苛める事にした。

「どこから壊すか迷うですう」

今日はIS学園でのテスト運用に向けた社内での最終テスト日。

今回、コレで異常が発見されなければ明日からIS学園に転入する事になっている。

もちろん、この最終テスト自体は100%成功する様になっているのだが、社長室で印を押してるだけの仕事なんぞやってもらえない。

身体を動かしていた方が幾分か楽になれる。

「お、お手柔らかに……」

「無理な相談ですう」

何も無いだっ広い空間。

目の前に表示されたスクリーンのカウントが開始される。

・ 2

・ 1

テスト開始。

「死ね!!!」

初手からイグニッション・ブースト瞬時加速を用いエルヴァン・アクスで斬りかかる。

相手であるドロテアとてIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハ
ーゼに配属される程の腕前を持つIS操縦者だ。

そう簡単には当ってはくれない。

この2週間のカリキュラムだけでアーテイルの特性を理解し、モ
ノにしたのだろう。

軽いバックステップだけで私の攻撃をかわし、機関銃で反撃して
きた。

ガガガガツ。

耳障りな音がダゴンスパツラ辺りから響く。

私の専用ISマリーセレスは、私の性格からして攻撃型と見られ
るだろう。

だが、実際は防御に特化している。

シールドエネルギーを消費しないようにする為、エネルギー供給
のON、OFFまで切り替え可能にした徹底的な防御型。

ドロテアも手持ちの機関銃では私にダメージが与えられない事
を瞬時に理解し、距離をとる。

そもそも、アーテイルは近距離タイプではない。

中距離、遠距離を得意とするタイプだ。

だから、このドロテアの判断は的確と言える。

「へえ、さすがですう。アーテイルの特性を良く理解してるですう。でも、まだまだ楽しませて欲しいですう」

アーテイルを作ったのはこの私だ。

その特性も弱点も理解している。

でも、今回はその弱点を突くつもりはない。

アーテイルの土俵で戦ってやろう。

エルヴァン・アクスをしまい、イング・ペイカーを二挺取り出す。ドロテアは武器選択だけで私の考えを察したのだろう。

苦虫を噛み潰したかのような表情をし、銃を構えた。

そして、盛大なガンパレードが始まる。

あたりに響く音は全て銃撃音で掻き消され、ハイパーセンサーから送られて来る視界だけが頼りだ。

ヴオオオオオ。

アーテイルの背部にあるガトリングから無限とも思えるほどの弾丸が発射され、熱せられた薬莢が排出される。

私はソレを回避しながら思った。

なんと懐かしい光景だろうか。

ISとのライドオンシステムにより、擬似的には在るが一体感を感じる事が出来る。

私の知る闘いだ。

「当らなければ、意味はないですう」

無数の弾丸を回避しながら、イング・ペイカーで精密射撃を行う。

ダウン！　ダウン！

一発、一発の音が重い。

イング・ペイカーは機関銃なのだが、設定を変えることで単発式に変更が出来るのだ。

放った弾丸は、アーティルの装甲に当り火花を散らす。

どうやらエネルギーの消費を抑える為に一部シールドをカットしているらしい。

「まだ、まだアー！」

ドロテアが吼える。

そして、背部ガトリングを乱射した状態のまま両手に機関銃を呼び出し撃ち込んで来た。

ヴオオオオオ

ドドドドドツ

凄まじい振動がドロテアを襲っているのだろう。

ハイパーセンサーで捉えることのできるドロテアの顔からは苦痛が見て取れる。

良い人材だ。

磨けば磨いた分だけ光を放つ。

軍のバカどもはドロテアの才能を見出す事の出来ないほどの無能ぞろいだっただけという事だろう。

「数は力とは、まさにこの事ですう」

ありえない量の弾丸で出来た弾幕を避ける。

ガガッ！

避ける。

ガガガッ！

避ける。

ガガガガッ！

そして、避けきれない量の弾丸が私を襲った。

ズガガガガガッ！

シールドエネルギーの半分以上が消費され、ハイドラ・スクードは原型を留めていない。

まるで穴あきチーズのようになってしまっている。

ダゴンスパツラも半壊状態だ。

「はあ、はあ……。これなら！！」

ハイパーセンサーがドロテアの声を拾った。

呼吸、心拍数、その他諸々の状態から察するに、いまの攻撃は全力だったようだ。

しかし、自らの攻撃で自らの視界を塞ぐ事は頂けない。

あまりにも激しい攻撃により、土煙の様な白い煙が発生してしまっている。
どうやら威力が強すぎてテスト空間の壁やら床やらが削れてしまったらしい。

「終わりですかあ？」

身体を包み込むようにしていたアーク・E・トウジスを開き、ドロテアの前に姿を現す。

無傷ではないものの、全力攻撃を耐えられた事が衝撃的だったのだろう。

ドロテアは絶望的な表情を浮べた。

「不燃ごみになる覚悟は良いですかあ？」

アーク・E・トウジスをいっぱい広げる。

ドロテアから見れば、触手で出来た翼の様に見える事だろう。

そして、そのアーク・E・トウジスの裏側には大量のイング・ペイカーとサーペンタイン。

ああ、ドロテアの表情がさらに絶望に染まって行く。

「快感ですう」

何の躊躇もせず、大量のイング・ペイカーの引き金を引き、大量のサーペンタインをドロテアに向けて投擲する。

全力攻撃の反動で動けないドロテアは、絶望の表情で私を見ながら脱力していた。

今日のスケジュールは一つだけ。

マリーチ様のお相手をし、アーテイルの最終調整とする事。

最初、勝てると思っていた。

私はマリーチ様に引き抜かれた出来損ないだけど、それでもIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼにいた事を誇りに思っている。

でも、テストの前に見せられたマリーチ様の戦闘データを見た時、その考えを改めさせられた。

だって、マリーチ様は過去にラファール・リヴァイヴ5機を未完成的のマリーセレスで落としているのだ。

無傷ではない。

辛勝という感じでは在ったのだけど、対戦相手の操縦者の顔を見れば分かる。

まるで、拷問でも受けた人の様な表情をしていた。

マリーチ様は遊んだんだ。

長く苦しめる為にワザと遊んで苦しめたんだ。

そして、マリーチ様を満足させる事が出来なかったから、5人もトラウマになる様な倒され方をしている。

見た事もない斧で、クビを落とす様な倒されている映像を見たときは戦慄を覚えた。

ISには絶対防御が在るから死ぬ事はないけど、恐ろしかっただろう。

怖かっただろう。

私もこれから映像の中の5人にトラウマを残した人と戦わなければならぬ。

全力で行かなければ。

覚悟を胸に、テスト用アリーナに入る。

「どこから壊すか迷うですう」

開口一番、私は壊されるらしい。
手加減なんてしてもらえないだろう。

「お、お手柔らかに……」

「無理な相談ですう」

なんとか言葉を返したが、すぐに拒否された。
だが、この広い空間。

障害物は何も無い。

アーティルの長所を生かすことの出来る空間。

そして、目の前にスクリーンが表示され、カウントが開始された。

．．．3

．．2

．1

テスト開始。

「死ね!!」

マリーチ様が一瞬で目の前に現れ、手にした斧で斬りかかって来る。

だけど動きが直線的だ。

これなら避けられる。

私は軽くバックステップを行い、エクストリーマ・バレルを呼び出し引き金を引く。

ガガガガツ。

エネルギーバリアを削る音だろうか。それとも、装甲を削る音だろうか。

激しい音が鳴り響いた。

ただ一つわかった事がある？エクストリーマ・バレル？の火力では足りない。

決定打には成り得ない。

だから、私は距離を取り、最大火力をぶつける事を選択した。

「へえ、さすがですう。アーテイルの特性を良く理解してるですう。でも、まだまだ楽しませて欲しいですう」

マリーチ様は余裕たっぷりな表情でそんな事を言う。

この人は戦いを楽しんでいる。

しかも、ISという競技ではない別の何か。

マリーチ様は何か別の、競技ではない戦いを楽しんでいる。

私だってIS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの一人だった者だ。

色々な種類の人を見てきた。

だが、マリーチ様の様に？子供の様に戦いを楽しむ？人は始めて見る。

バーサーカー、ヒューマンキラー、シリアルキラー
戦闘狂、殺人鬼、快樂殺人者、世界には狂った人間も多い。

しかし、誰も彼も理性に少し欠陥があったり、本能を抑え切れなかったり、様々な意味で社会で生きるのには不要なものを抱え込んでいる。

それに比べ、マリーチ様はどうだろうか？

そういった何かは感じない。

もっとこう別の……。

そうだ。

まるで機械の様な……。

そんな事を考えていると、マリーチ様の顔に邪悪な微笑みが灯った。

そして、斧をしまい、銃を二挺取り出す。

アーティルにも接近戦戦闘用武装は付いてはいる。

だが、ペネトレートクローとカタマランブレードはナックルとカ
タールだ。

マリーチ様の凶悪な斧の一撃を受けた場合、耐えられるとは思えない。

私はきつと、苦虫を噛み潰したかのような表情をしている事だろう。
舐められているのだ。

私はバカにされている。

生まれてからずっと、戦う為だけに生かされてきた。

銃だけを持たされ戦ってきた私に……。

銃の扱い方を延々と教えられてきた私のフィールドで戦ってやる

と、マリーチ様は言っているのだろう。

怒りが込み上げてくる。

私の生を踏み躪られた様な気分だ。

エクストリーマ・バレルを仕舞い、アーテイルが持つ最大火力、背部にセットされた大型ガトリング？バリステックブレイズ？を展開する。

あまりにも反動が大きい為、四つん這いになり、バリステックブレイズに取り付けられた尻尾の様な反動軽減足を地面に付けた。

フロントラウンダーのフェイスを下げ、マリーチ様をロックする。

打鉄やラファールならば、？バリステックブレイズ？をもらってしまつたら絶対防御も空になり操縦者もろとも塵と消えるほどの最大火力。

受けてみる！

ヴオオオオオ。

鳴り響く爆音。

あらゆる音を相殺し、知覚能力の一部すら奪ってゆく轟音の中、アーテイルのハイパーセンサーは捕らえていた。

まるで踊る様に弾丸の嵐を掻い潜るマリーチ様の姿を。

心には油断なんて無かった。

躊躇も無かった。

ただ、徹底的にターゲットを破壊する事だけを考える。

自ら私のフィールドが上がってきた相手なのだから、フィールドの中に居る間に倒してしまわなければならない。

もしマリーチ様が私のフィールドから出て、反撃を開始し始めたら。

勝てない。

「当らなければ、意味はないですう」

アーテイルのハイパーセンサーがマリーチ様の眩きを拾う。そして、頭に強い衝撃が走った。

ダウン！ ダウン！

重たい音がバリステイックブレイズの爆音に混じり聞える。聞えるたび、身体に衝撃が走った。

アーテイルの表面装甲に火花が散り、弾丸を弾く。エネルギー消費を抑える為に一部のシールドをカットしているだろう。

装甲がダメージを吸収するが、衝撃までは吸収しきれていないらしい。

このままでは負ける。

イヤだ。

負けたくない。

負けるという事は、死と同義である。

「まだ、まだアー！」

私は知らず知らずのうちに吼えていた。

そして、バリステイックブレイズの最大火力をそのままに、無理やり身体を起こして行く。

四つん這い出なければ耐えるのも難しい衝撃を、二本の足と機械足の三本で支え、両手に？エクストリーマ・バレル？と？プレシジョン・バレル？を呼び出す。
そして、トリガーを引いた。

ヴオオオオオ

ドドドドド

身体を衝撃が襲う。

ISごと身体がバラバラになってしまいそうだ。

ハイパーセンサーで捉えたマリーチ様の顔には笑みが漏れている。普段垣間見える狂気ではない。

まるで、私の成長を祝福するような微笑み。

初めて。

初めて、お母さんに褒められた様な気がした。

だから、私は。

手を抜く事は許されない。

「
マリーチ様が何か言っているが、もはや聞えない。
すべては爆音に掻き消される。」

ガガッ！

マリーチ様が避ける。

ガガガッ！

私はマリーチ様の避ける方向に身体そのものを動かし、鋼の嵐で
もって狙い打つ。

ガガガガッ！

そして、避けきれない量の弾丸がマリーチ様に襲い掛かった。

ズガガガガガッ！

床か天井の一部を破壊してしまったのだろう。

土煙が視界を塞ぐ。

アーティルのハイパーセンサーは私の無茶に答えた為に機能低下
を起こしてしまっている。

これで倒せないなら勝てないだろう。

「はあ、はあ……。これなら！！」

呼吸を整えながら叫ぶ。

私は、期待に応えられたのだろうか？

それとも、やはり。

私ではダメなのだろうか？

「終わりですかあ？」

煙の中から装甲をマントの様に羽織ったマリーチ様が現れた。

両肩の装甲と左腕の盾。

破損しているのは二つだけ。

おそらくシールドエネルギーはかなり削れているだろう。

アーテイルのシールドエネルギーは91%残っている。
それに絶対防御もある。

だが、それでも。

私は生き残れるだろうか？

Side セバスチャン「ウォン」オーデン

多くの戦場を見てきた。

しかし、果たして。

これほど壮絶な戦いを見たことが在っただろうか？

二機のIS。

マリーセレスとアーテイルの最終調整の為に用意された特殊な空間。

ISのシールドバリアだけを流用し、全領域に張り巡らせた空間だ。

アーテイルはそのシールドバリアを貫通し、床と天井を破壊して見せた。

これはリミッターを設けなければならないだろう。

それにしても、恐ろしきはマリーチ様の方だ。

弾丸で出来た嵐の中に居ながらも微笑む事をやめず、ドロテア様を見据える目には狩人の如き鋭さが垣間見える。

神とはなんと不公平なのだろうか。

いや、そういえば。

遠い昔。

まだ幼かった頃のマリーチ様が言っていた。

『ねえ、ジイやは神様を信じてる?』

『神様ですか? そうですな。ジイやはあまり信じてはいません』

『ふうーん。なら私と一緒にですう』

『……………』

『でも、もしも神様がいるのなら。私が信じるのは科学という名の神。機械仕掛けの神様』

懐かしい事だ。

マリーチ様は科学という名の神に愛されているのだろう。

彼の天才、篠ノ之束よりも遥かに…………。

「救護班を待機させておけ、戦闘が終わり次第ドローア様を回収。IS開発チームはマリーセレスとアーティルの修理準備をしておけ。明日からお嬢様はIS学園へ行かれるのだ。今日は寝れぬモノと思え!」

「イエッサー!」

その場の指示をし、最終調整データ収集室を出る。

勝負は決した。

もはやドローア様では、マリーチ様に勝つ事は出来ないだろう。こちららも準備をしなければならない。

「やあ、セバスチャン。相変わらずマリーチお嬢様は残酷だ」

廊下を歩いていると、突然背後から声を掛けられた。

ロレーナ「ベルトンチーニ。」

お嬢様専属のメイドにして、ISプロキシマの操縦者。
宝塚で主役張っていそうな男装美人メイド。

「ロレーナ嬢。なんの様ですか？」

「いやなに、何を裏でコソコソとやっているのかな？　と思ってね」

相変わらず鋭い。

さすが、元イタリア代表候補生と言ったところだろう。

マリーチ様が生まれなければ、ロレーナ嬢がイタリア代表になっ
ていた事は明確。

自身のプライドよりも、マリーチ様護衛を取る辺り、よほど旦那
様と奥様に恩を感じているのだろう。

「ふっ、知れた事を」

「ほう」

ロレーナ嬢に隠すことなど何もない。
なぜならば。

「これからマリーチ様のIS学園制服を仕立てるのだ。そして、水
泳の授業で使うであろう水着も選抜しなければならん！　マリーチ
様に恥をかかせるは執事の名折れ！　それとだ。情報部員からもた
らされた報告によると、マリーチ様は織斑一夏に興味をお持ちのご
様子。ならば、下着も用意せねばなるまい！」

「なるほど、それなら僕も協力を惜しまないよ」

ロレーナ嬢は同志。

普段、影よりマリーチ様を護衛している為、中々会えないのだが、これは良いタイミングで出会ったことが出来た。

マリーチ様、ジイやは頑張りますぞ！

Ver.5 (後書き)

長すぎた。
謝罪。

Ver.5.5(前書き)

修正

武装？バリステイクブレイズ？の説明

砲等 砲頭

理由

誤字

ストラス様に感謝

修正

アークテイルの設定の説明

波動 反動

理由

誤字

緒方 紅夜様に感謝

Ver.5.5

名前

ドロテア＝リツケン

容姿

武装神姫山猫型MMSアーティル型と同様

ヘアカラーoriginal(烏羽色/濡れ烏)

アイカラーoriginal(右:蒼/左:金)

左眼には白い眼帯をしている。眼帯はO.P.F社のロゴ入り。

設定

ドイツ軍、IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼの一人。

隊長であるラウラ・ボーデヴィツヒ同様、遺伝子強化試験体として生み出された試験管ベビーである。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼが設立された後、肉眼へのIS用補佐ナノマシンを移植。

部隊で最も弱い出来損ない。

本作Ver.4で供物としてOvest Pozzo Fabb
rica(オヴェスト ポッツォ ファブリカ)総帥、マリーチ
オヴェスト＝ポッツォ＝ファブリカの元へ送られる。

送られた後は、アーティアの操縦者として訓練を行いつつ、マリーチの専属メイドとしての訓練も行いつつ、レスクイーンよろしくO.P.Fのコンパニオンもしてる。

お給料は社員の倍。

不幸だけど、不幸じゃない子。

性格

目上の者、目下の者、誰にでも敬語を使う様にしている。
小動物が好き。特に猫が好き。

Ovest Pozzo Fabbrica (オヴェスト ポツ
ツオ ファブリカ) 社内では癒やし系とされ、ファンクラブまで出
来てしまったくらいに優しい性格。

マリーチ様、怖い。怖い。

専用IS名

リンクス
山猫型アーテイル

設定

マリーチが作り出したアーテイル型をオリジナルとしたIS。

マリーセレス同様に開発陣営からも人気が高く、無茶苦茶な設計
がされている。

絶対装甲すらぶち抜くほどの火力を持ち合わせるといふ狂気の発
想の体現。

背部にセットされた特殊ユニットが最大の特徴である。

頭部にはヘルメット型バイザーの？フロントラウンダー？が採
用されており、命中率を強化させている。

また、バイザーを下げる事により精密射撃能力を大きくアップさ
せる事が可能。

メインカメラが4つセットされており、ソレゾレが個別のハイパ
ーセンサーを有している為、ドロテアに移植されているバージョ

ンアップされたヴォーダン・オージェが無ければ制御しきれない。

背部にセットされた特殊ユニット？バリステイクブレイズ？は、超大型ガトリングである、

実弾、エネルギー弾の両方が射出可能であり、エネルギー弾には追尾機能が付いている。

しかし、反動が大きく発射する際は四つん這いになり、バリステイクブレイズについている機械足で衝撃を吸収する必要がある為、空中での連続発射は困難を極める。

腿には別動力を持つシールドバリアを発生させる？スタンドオフシールド？が装着されている。

これは、本体のシールドエネルギーを消費せずにシールドバリアを発生させる事が出来る為、両腕が使用できない状態での使用が推奨されている。

足は？フアランクスエッジ？という特殊な靴を装備。

あらゆる衝撃を吸収、分散させ、操縦者のダメージを減らす。純粹に蹴りの威力を挙げる効果もある。

武装

ナツクル？ペネトレートクロー？

近くの敵を打ん殴る為の装備。

威力は期待できないが、隙が少なく連続で攻撃が出来る。

カタール？カタマランブレード？

ペネトレートクローから刃を生やし、カタール状にしたもの。

ペネトレートクローよりも威力は高くなっている。

短銃？フェリスファング？

エネルギー弾を発射するハンドガン。
射程は決して長くないが、確実に相手のシールドエネルギーを削る事が出来る。

機関銃？エクストリーマ・バレル？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能な機関銃。

実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

狙撃銃？プレシジョン・バレル？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能な狙撃銃。

実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

ガトリングユニット？バリスティックブレイズ？

実弾、エネルギー弾の切り替えが可能なガトリング。

砲頭は二門。

トンでもない量の弾薬とエネルギーを消費し、反動も凄まじいが奇跡を起こせる一品。

実弾使用の場合、弾倉内に直接弾丸を転送する為、拡張領域内の弾丸が無くなるまで撃ち続ける事が出来る。

エネルギー弾の場合、エネルギーパックが切れるまで連続しうが可能。

Ver.6 (前書き)

報告

感想受付の制限を解除しました。

ダメ出し、改善点、その他感想などお待ちしております。

感想返信は、ジャーナルの方で一括しておこなって行きます。

修正

経過時間

3時間後 30分後、1時間で 2時間で

理由

時間経過がおかしかったため。

最終調整テストから30分後。

マリーセレスとアーテイルの方に実質のダメージはない。

強いて問題をあげるのならば、アーテイルの火力が強すぎる事が判明し、リミッターが設けられた事くらいだろう。

ただ、少しやり過ぎてしまったらしくドローテアが目を回している。

肉体的なダメージはない。

救護班が言うには、精神的ダメージが大きかったとの事だ。

「仕方ないですう。ドローテアを部屋へ」

「はい、分かりました」

救護班に指示をし、私は部屋に戻る事にする。

ドローテアならば、私の顔を見ただけで発狂したり、気絶したりする弱い操縦者ではないはずだ。

そこまで心配する必要性は無いだろう。

でもまあ。

「マスターが言っていたですう。どんな物でも大切にしろって」

だから、大切にアつかおう。

人間はソコソコ頑丈だが、どのタイミングで壊れるか全く分からない。

12時間後にはIS学園の生徒となっているのだから、これからドローテアの代わりを探す事は不可能。

IS学園では3年間同じクラス、同じルームで生活する事になっているから、3年間の間はドロテアを間違っ壊してしまつワケにも行かない。

面倒だ。

「はあ、ダルイですう。まあ、これもすべてはマスターのソックリさんを見定める為ですう」

2時間後。

私は社長室でグデツとしていた。

ありえない数の報告書とマリーセレス、アーティル、プロキシマ、ラプティアスの調整グラフに新規武装理論と設計図。

本来なら5日かけてユツクリやる作業を、本日は2時間でこなしただ。

私がIS学園に行っている3年間の間、この役目はジイヤとローナに代わって貰う事になっている。

だからこそ、自分で出来るだけの事はやっておこうと思ったワケだが。

「地獄の門が開いてるですう」

想像よりも苦行だった。

何か考える事すら面倒になる。

ということ、寝よう。

私は疲れた。

起きたらIS学園で授業を受けている事になるだろうし、自己紹

介はなんて言おう。

…。

……。

ドロテアは大丈夫か、少し心配ですう。

……。

Side ドロテア＝リッケン

悪夢を見た気がする。

無数の銃弾と無数の剣が向かってきて。

「とんでもない所に来ちゃったのかも」

でも、もう遅い。

それには拒否権なんて無かった。

そういえば、さつきから視界にチラチラと入ってくる頭みたいなのは……。

「お気づきになりましたかな？」

ビクツとする。

気配もなしにセバスチャンさんが真横に現れた。

この人の事はよく知っている。

まさか、実際に会う事になるとは思わなかったが。

セバスチャン＝ウォン＝オーデン。

ISが登場する14年ほど前まで最凶の傭兵としてその名を軍に

轟かせていた人物。

姿を消して以降、どこかで暗殺されたとか、長期諜報任務を行っているのだろう等々、様々な憶測が飛び交っていたけれど。

まさか、O・P・Fで執事をしていただけなんて。

「どこか身体が痛んだりしますかな？　ここは軍では在りません。痛いならば、仰っていただいて大丈夫ですぞ」

セバスチャンさんは、人の良さそうな微笑みを私の方に向けながら言う。

きつと、これが素の姿なのだ。

「大丈夫です。少し身体がダルいですが、問題はありません」

私は素直に答える。

別に隠す必要もない。

それよりも気になる事がある。

「あの」

「なんですかな？」

笑顔で応えるセバスチャンさん。

「なんで、マリーチ様がこちらにいらっしやるのでしょうか？」

「簡単な事ですな。マリーチお嬢様は口が大変悪く、全く素直ではない」

ちょうど私の太ももあたりにあるマリーチ様の頭がピクツと動い

た。

もしかして、起きてる？

「ですが、それは表現を知らないが故なのです。幼少の頃よりOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）の総帥となるべく様々なお勉強をなされ、様々な兵器開発からIS開発に至るまで手がけてこられました。そのため、学校には行けず。通信教育あるいは有名大学から教師を招き一般常識と大学院以上のお勉強をなさっておられた。だから、ドロテア様に似ているでしょう。戦場でこそ無いものの、マリーチお嬢様には誰もいなかった。この私とロレーナ嬢はマリーチお嬢様が生まれてからずっとお側に置いて貰っておりますが、歳も近く、性別も同じ人間が、こうも近くに居る事は始めての事です」

誰もいない。

その辛さは嫌という程に分かる。

だって私にも誰もいなかったから。

私は会話するのが苦手だ。

だから、IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼに配属されてからも遠くから部隊のみんなを見ていただけだった。

実力は中の下、単独任務の時だけ中の中と言った感じ。

クラリッサ・ハルフォーフ副隊長は私を気に掛けていてくれたけど、なんだか私には遠い人に思えて、その優しさに報いる事は出来なかった。

ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長は元々、私の事なんて見てすらいなかった。

当たり前だろう。

隊長は一人でも強く、一人で何でもやろうとする人だったから。

でも、何時の日か。
きっと、良い隊長になると思う。
何となくだけど、そう思う。

私は一人ぼっち。

「で・す・か・ら。ドロテア様には、マリーチお嬢様のお友達になつて頂きたいと」

セバスチャンさんが、私の顔を両手で挟み正面を向かせる。

真つ白な髪、真つ白な髭、燃える様な瞳に何も映していないだろ
う白い瞳。

顔には切り傷を縫った様な後が見て取れる。

見た目は老執事そのものなのに、近くで見れば現役兵の様だ。
それに、その口から放たれた言葉は衝撃的だった。

「おともだち？」

そう言つと。

セバスチャンさんの顔が近づく。

近い！ 近い！

「そうです！ お友達。この6年間、そしてOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）としての重圧。世界の裏も表を否応無く知り尽くしてしまったマリーチお嬢様のお友達になつて頂きたい。ドロテア様ならば解るはずで
す。一人ぼっちの絶望。誰もいない。まるで半身を削り取られたか
の様な絶望を」

なんだか白熱しているセバスチャンさん。

ドンドン顔を近づけてくる。

「このままじゃ、このままじゃ！」

その時、太もも辺りから感じていた重さと暖かさが消える。

「なにしとるんじゃ、エロジジイ！」

マリーチ様は？号泣剣？と書かれたクレイモアの様な見た目をした何かでセバスチャンさんの頭を吹っ飛ばした。

なんかちよつと、微笑みを浮かべながら吹っ飛んで行くセバスチャンさん。

「ハア、ハア…。油断も隙もないですう。まったく、これだから変態は困るですう」

マリーチ様は少しだけ恥かしそうにしながら私を見た。

「ふん。あの程度で壊れるようならアーティルを預けられる様な人物じゃないと判断してメイドにしてたですう。いまは休んで、明日からの学園生活に備えてるですう」

なんだか一生懸命感が伝わってくる。

私はいままで軍に仕えていた。

国じゃなくて軍部。

でも、これからは。

私はこの人に仕える事になる。

何処までも不器用な優しさを持った私の新しい主。

「はい。そうします」

「素直なのは良い事ですう」

マリーチ様は胸を張り、少しだけ偉そうな感じに頷く。

O v e s t P o z z o F a b b r i c a (オヴェスト ポツツオ ファブリカ) 総帥だから偉いのだろうけど、最初に会った時に比べるとなんだか随分と柔らかい。

なんだなんだと言いながら、マリーチ様は私に毛布を掛け、微笑んだまま気絶している不気味な状態のセバスチャンさんを引き摺りながら部屋を出る。

数時間後には、IS学園でマリーチ様と一緒に生徒として3年間やっていかなければならない。

軍人だった私に生徒という役柄が務まるのだろうか？

私は暖かくなった胸に少しの不安を抱えながら、二度目の眠りに付いた。

名前

マリーチ⇨オヴェスト⇨ポッツォ⇨ファブリカ

容姿

武装神姫テンタクルス型MMSマリーセレス型と同様

ヘアカラーcolor C (赤茶色)

アイカラーcolor A (翠色)

耳は尖っては居ない

その他

身長155cm、体重46kg、スリーサイズB82、W53、

H80、血液型AB、誕生日1月27日(マリーセレスの発売日同)

名前

ドロテーア⇨リツケン

容姿

武装神姫山猫型MMSアーティル型と同様

ヘアカラーoriginal (烏羽色/濡れ烏)

アイカラーoriginal (右:蒼/左:金)

左眼には白い眼帯をしている。眼帯はO.P.F社のロゴ入り。

その他

身長157cm、体重49kg、スリーサイズB89、W56、

H88、血液型AB、誕生日不明(12月16日/アーティルの発

売日同)

名前

ロレーナ＝ベルトンチーニ

容姿

武装神姫ケンタウルス型MMSプロキシマ型と同様

ヘアカラー color B (金色)

アイカラー color A (金色)

その他

身長186cm、体重??kg (測定不可能)、スリーサイズB98、W62、H89、血液型C、誕生日1月27日 (プロキシマの発売日同)

名前

セバスチャン＝ウォン＝オーデン (ウォーデン＝ウォン＝オージン)

容姿

白髪、白髭、見た目は優しそうな老執事

物腰柔らかく、些か変態染みた行動を取るが紳士

顔には無数の傷跡があり、近くで見ると痛々しい

その他

身長193cm、体重81kg、血液型B、誕生日2月14日

名前 (武装紳士、武装淑女の皆々様)

マスター

容姿 (この作品では)

黒髪、黒瞳、織斑一夏のような見た目

熱い一面を持ち合わせ、武装神姫が関わる様々な事件に巻き込まれる体質

とある男を庇い死亡

その他

身長179cm、体重63kg、血液型？、誕生日7月15日（
武装神姫バトルマスターズの発売日同）

きつと、背後に流れているBGMは？Butter-Fly？だと、
私は信じてる。

なに？ 作品が違う？

良いじゃない。

結構合いそうだしさ。

O・P・F | NETジャーナル 第二回（前書き）

修正

ローレナの台詞

武装募集の糸 武装募集の意図

理由

誤字

ストラス様に感謝

修正

セバスチャンの台詞

お嬢様の端 お嬢様の恥

理由

誤字

ストラス様に感謝

O・P・F | NETジャーナル 第二回

「それでは、第二回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ」

「今回の司会は、僕とセバスチャンなんだね」

「マリーチお嬢様とドロテア嬢はIS学園ですからな」

「あとは、思いのほか僕が人気だったからかな？」

「それもあってしょうな。さすがは、プロキシマ型でござ」

「しかし、今回は紹介するISもとい武装神姫が登場していないね。どうしようか？」

「そうですね。専用機の説明補足なんかはどうですか？」

「それが良いね。そうしようか」

専用機補足。

プロキシマ、マリーセレス、ラプティアス、アーティル。

これら武装神姫を元とした専用機は、初期カラーを第一形態としています。

武装神姫には、必ずと言っても良いほどリペイントVerというものが存在しており、武装も若干ながら変化したり、追加されたりし

ています。

このリペイントバージョンを第二形態とする予定ですが…。
実はまだ発売しておりません。

11月24日にラプティアスとアーティルのリペイントが発売し、
12月15日にプロキシマとマリーセレスが発売します。
楽しみですね！

「なんだか宣伝になってないかい？ 僕は別に構わないけど」

「あまり詳しく言うのもアレですしな」

「じゃあ、次は今後登場する予定の武器を紹介しよう」

登場予定の武器（必ずしも登場するわけでは在りません）

戦車型MMS ムルメルティアの装備より

インターメラル 超硬タングステン鋼芯

超硬質なタングステンを芯に使ったパイルバンカー。

IS用に強化が施されており、超硬タングステン自体にも特殊加工が施されている。

メルテュラーM7連射拳銃

見た目は通常の拳銃だが、性能はIS専用銃と変わらない。

見た目に騙されてはダメだ。（セバスチャン撃退用）

火器型MMS ゼルノグラードの装備より

P・A・R ポップアークシヨンのライオット ショットガン

Ze1 0.76mmガトリングキャノン

Ze1 L・R ロングレンジ スナイパーライフル

いわずも知れたゼルノグラードの三大火器にして専用レールアークシヨンの必需品。

ヒヤッハー。弾切れなんて関係無しに撃ちまくるであります！

オマケ

BC036型対物バズーカ：通称『アトミック・ジャベリン』

対IS用にも使用できる幻の銘品と言われた伝説の重火器。

一撃or一発の威力に拘る操縦者が欲しがること間違いなし！

ビームガトリング？スペシオーサ？

精悍なバレルから繰り出されるビームの束は威力も抜群。

型無

スタルクリーゲル武装セット

メカテイスト全開の攻撃的なシルエット！

全身を覆う追加武装。

フル・スキン

全身装甲型ISの様な見た目を持つが、ISの上に装備すると
いう常識はずれな形態を持つ外殻。

指定キャラのない武装

ナヴァグラハ

黒い球体型のビット兵器。

8機で一つとされており、それぞれが個別の判断で攻撃対象を狙い打つ。

粒子ブラスター

ハンドブラスター&ランチャーブラスター

ガンハンマー

一撃の威力を高めた超大型ハンマー。

使いこなす為にはそれなりの技術が必要。

その他募集中。

(名前が分からなくとも、神姫 が持ってたナイフとかでも分かるかと)

「こんな感じで良いかな？」

「そうですね。最後に武装募集をしたのには何か意図が？」

「そうだね。例えば、僕はケイローンという大鎌を愛用してるんだけど、人により様々な武器に思い入れが在ると思うんだ。だからね。そういう武器を出来るだけ多く取り入れたいなと思ったのさ」

「なるほど、そうでしたか。おや？ 少し時間を取りすぎてしまいましたな」

「む？ そんなに時間を使ってしまったかい？ それじゃあ、そろそろ締め感想返答と行こうか」

「そうですね」

>蒼 龍一 様<

・・・デレ・・・デレ・・・????どう見てもヤンツロ「ゴシヤ」
ギヤアアアアアア!!!?

「窓際に良からぬモノを見てしまったようだね」

「いやはや、外宇宙の神々は加減を知りませんからな」

>ストラス 様<

MK2が発売されてから少しずつ神姫の小説が増えて嬉しいストラスと言います。

最初はなんて無茶な設定と思いましたが、原画がデモベ書いてる人の所為なのかすんなり読ませてもらいました。

これから主人公がどのようになっていくのか楽しみです。(でも元神姫ならハーレム容認か?)

次回の更新、楽しみに待ってます。

「確かに、無茶苦茶な設定だね」

「元ネタに救われましたな」

「そうだね。そうそう、神姫だとしてもマスターを一人占めしたいという欲は在ると思うんだ。今回は回りに神姫が居るワケじゃないからね。どうなる事やら」

「疑問点に関してはこのセバスチャンが答えますぞ。ソレほどまで

にマリーチお嬢様は兎を一匹欲しがっていたという事ですな。もし
かしたら、強化型も作り、その発展形の製作に着手した時点で初期
型には価値を見出していない可能性もありますな。困ったものです
ぞ」

>ストラス 様<

感想を書いて戻ってみると、更新されてたのでまた書いてしまいま
した。

もうファンクラブまでいるのかこの子は！？でもお嬢の方は親衛隊
までいそうだし…まっ、いいか

しかしセバスチャン、下着まで用意するのはどうかと…(…)

IS用の銃が飛んで来ない事を祈りますw

「まず最初に、誤字報告ありがとうございます。すぐに直したよ」

「ドローア嬢は胸も大きいですからな。人気になるのは必然です
な。そして、執事たるもの！主に恥をかかせるワケには参りませ
ぬからな！」

「セバスチャンの骨は僕が拾って、ハーデスの元まで届けるさ」

>緒方 紅夜 様<

プロキシマ キターーッ！！

ニトロ好きにはたまらんです。

アマゾンにあったイグニスの手持ってる画像で興奮した……
ヘッドセットの角がたまらんです。

容姿はそのまんまなのか、イグニスの色違いみたいなのか。

まあ、年齢が若いからお姉さまなのかだが、それが重要だ。

考えてみればプロキシマとアーティルの腰後の装備似てるな

「ふふふ。さすがに照れるね」

「イグニスのこと事は、リペイント版の事ですか。確かにアレはカッコイイですな」

「容姿はオリジナルプロキシマのままだね。髪と瞳は金色さ。歳は内緒としておくよ」

「このセバスチャンの目が確かならば、お姉さまタイプでしょうな。そして、歳に関しては織斑千冬の歳を考えればおのずと分かりますぞ」

「今回は、コレで終わりかな？」

「ですな。では、? O.P.F | NETジャーナル? は Ovest
Pozzo Fabbrica (オヴェスト ポッツォ ファブ
リカ) と アキュート・ダイナミックス Acute Dynamix の提供でお送りしました
ぞ」

ぐっすりと寝て数時間。
朝になっていた。

「うーん。良く寝たですう」

普段通りにベッドから降りようとしたら、何か柔らかい物を掴んだ。

もにゅもにゅ。

「…ん」

なんですかあ。

この妬ましい柔らかさは。

「う…。んんっ、んっ」

この柔らかい物の正体は分かっている。
触った瞬間に思い出した。

そう、ここはIS学園1年生学園寮。
私とドロテアに与えられた一室だ。

時は一日ほど前に遡る。

私とドロテアはIS学園に向かっていた。
ジイヤの運転する見た目だけはロールス・ロイス「ファントム」

2003に乗って。

やはり、ジイヤもO・P・Fの一員ということだろう。

車両重量、エンジン形式、総排気量、最高出力、等々の細部に至るまで改造が施されている。

私はあまり車に詳しいワケではないが、元の値段が4、725万だったものが、ジイヤの手に掛かれれば9、854万の出費になってしまうのだから、この車は一体どんな魔改造を施されているかわかったものではない。

私がまだ幼かった頃、ジイヤは言っていた「如何にして出費を抑え、魔の付くような改造を行うか。それが、ジイヤの改造コンセプトですぞ」とかなんとか。

「あと5分ほどで到着いたします」

ジイヤが告げる。

早いものだ。

1年の月日もあっという間。

「マ、マリーチ様。お、お飲み物は如何でしょうか？」

ドロテアが私の専属メイド化してからは数時間しか立っていないハズだが、元々そういう属性の持ち主だったのだろう。メイド服が良く似合う。

「アイスコーヒー」

「は、はい」

「やっぱり、オレンジジュース」

「え？ は、はい」

「やめた。紅茶にするですう」

「ふえ！？ こ、紅茶ですな」

面白い。

次々と飲み物の注文を変える度に慌てながら用意しなおすドロテ
ーア。

その姿は、可愛らしさすら覚える。

ゆったりとした車の中。

私室にある最高級のソファーに比べれば些か硬いが、それに深く
腰掛け、背を預ける。

到着まで5分では眠る事もできない。

ドロテアの用意した紅茶を飲みながら、流れ行く外の景色を眺
める。

「紅茶の入れ方がダメダメですう。ちゃんと練習しておくですう」

「は、はい…」

怒られた子犬の様に身を縮めるドロテア。

バックミラーから見えるジイやは、孫を見守るような優しい微笑
みを浮かべている。

たまにはこういうのも悪くない。

遠い昔。

マスターと二人。

余計なお荷物が4匹。

マスターのお友達とダメ猫、マスターに興味を持つツンデレ女とお説教悪魔。

マスターが暮らす街全てが見える丘、そこにピクニックへ行つた事がある。

あの時は楽しかった。

そう、いまはまるで。

あのピクニックが始まる前日の様な。

前日の日に感じた不思議な高鳴り。

ソレに似ている。

空になったティーカップをドロテアに渡し、何となくだがドロテアの頭を撫でる。

少し前にテレビで見た。

猫でも犬の様に躡ける事が可能だと。

アーテアは山猫型だ。

ドロテアが山猫みたいな性格をしているのか？ と問われれば、どちらかと言えば子犬みたいな性格をしている！ と断言するだろう。

だが、いつ。

リンクスとしての本性を表すとも分からない。

首輪は早めに付けておくにこした事はないだろう。

「ドロテア」

「は、はい！」

「ちょっと、目を瞑るですう」

「え？ わかりました？」

ドロテアは困惑しながらも目を閉じる。

バックミラーから見えるジイヤの視線にイヤらしいものを感じたので、睨みつけておいた。

O・P・Fを出発する前、ロレーナから渡された紅い首輪。

ライトチョーカーというお洒落の一つなワケだが、リードを付ければ完璧な首輪だ。

さらに言うのならば、これはアーティアの待機状態。

ずっと付けていても肌は痛まず、息苦しさも感じないという優れたもの。

「もう良いですよお」

「？」

ドロテアは自分の首に付けられた物を確認し、複雑な表情をする。

ソファアに身を沈め、ドロテアを眺めた。

「ソレはアーティアの待機状態ですう。そして、お前が私の所有物である証でもあるですう。大切にしますですよ？」

なんだか少し、ドロテアの顔が引きつった様な気がしないでもない。

だが、気にする事はないだろう。

ドロテアから視点を外し、自分の左手。
薬指に付けられた指輪を見る。

深海の様なダークブルーの色をし、ソレでいてなお蒼い光を生み出すソレは、マスターとの結婚指輪。
マリセレスの待機状態でもある。

私は視線を前方に戻す。

車内からでも見て取れる。

IS学園の校門が。

「マリーチお嬢様、ドロテア様、IS学園に到着致しました」

Side ドロテア「リッケン

IS学園へと向かう車の中。

運転手はセバスチャンさんだ。

車の内装は、護衛任務の時に見たリムジンの車内の様になっている。
る。

マリーチ様だけが座る為に用意された大きなソファア。

私はそれに向かい合う様に置かれた小さなソファアに座っている。
後ろには様々な飲み物を作る為の道具。

たぶん、これでマリーチ様に飲み物を出したりするのも私の役割
なのだろう。

「あと5分ほどで到着いたします」

運転席側とこっちは、ガラスで遮られているのでスピーカーから

セバスチャンさんの声が聞えてくる。

このガラス、恐らくは防弾、防音仕様の特注品だろう。
あと5分。

5分在れば、飲み物くらいは飲めるだろうか？

用意されているティーカップは比較的小さい。

おそらく、車内だからという理由なのだろう。

私は、意を決してマリーチ様に話しかけた。

「マ、マリーチ様。お、お飲み物は如何でしょうか？」

マリーチ様は、私の声に反応しこちらを向く。

そして、私を少し観察する様な目で見てから言う。

「アイスコーヒー」

おそらく、マリーチ様は私の服を見ていたのだ。

マリーチ様はES学園の制服を着ているが、私はロレーナさんから頂いた専属メイド専用戦闘服というものを着ている。

メイド服なのに戦闘服と呼ばれる理由はよく分からなかった。

だが、着てみれば分かる。

この服は防刃、防弾仕様なのだ。

そして、他のメイドに与えられているミニスカートではなくロングスカート。

コレにも理由が合った。

サイホルスター、アングルホルスターを隠すため。

この服の正体、そしてこの服を着る者の役目を理解した時、私は戦慄を覚えた。

要人警護などの任務を行ったことは在るが、このような存在を身近においている人物は見たことがない。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポツツォ ファブリカ） 総帥。

その肩書きを、私よりも一歳年下のマリーチ様は生まれた時から背負っているのだ。

ただ戦うだけだった私には想像もつかない。

「は、はい」

そんな事を考えながら、アイスコーヒーを淹れようとすると。

「やっぱり、オレンジジュース」

注文を変えてきた。

「え？ は、はい」

少し焦ったが、すぐにオレンジジュースを淹れようとすし。

「やめた。紅茶にするですう」

また変えられた。

「ふえ！？ こ、紅茶ですね」

うう。

マリーチ様は、いままで見たこともないDSな人。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ内には、このタイプの人間はいなかった。

また変えられるのでは？ とビクビクしながら紅茶を淹れたが、
変えられる事はなかった。

マリーチ様は私からティーカップを受け取ると、優雅な仕草でソ
レを飲みつつ、外の景色を見ている。

その横顔は何処か儂く、この世の者ではない様な美しさ、神々し
さを放つ見惚れてしまう横顔だった。

神様が創り出した、最高級のお姫様。
そんな様な感じだ。

でも、マリーチ様は戦いを好み、マリーセレスという鎧を纏う。

パツと思いついた言葉は？武装神姫？だ。

マリーチ様には相応しいような気がする。
武装する神の姫。

「紅茶の入れ方がダメダメですう。ちゃんと練習しておくですう」

マリーチ様は横目で私を見ながら言った。
なんだか睨まれている様な感じがする。

「は、はい」

カリキュラムの中に紅茶の淹れ方は入っていた。

だからと言って、2週間そこでプロ並の実力を付ける事は不可
能。

ロレーナさんから筋が良いと言われ、セバスチャンさんからも褒
められた。

O・P・Fで働く人々にもウケは上々だったのに。
知らず知らずのうちに肩が落ちる。

そして、空っぽになったティーカップを受け取った。

その時だ。

マリーチ様に頭を撫でられる。

少しだけ上目遣いでマリーチ様の表情を伺ってみたが、垣間見える狂気ではなく。

優しい。

とにかく暖かな顔をしていた。

見たことは無いけれど、そう、まるで、お母さんの様な表情。

「ドロテア」

突然名前を呼ばれる。

「は、はい！」

私は反射的に答え、簡易テーブルと言っても物凄く豪華なテーブルにティーカップを置き、マリーチ様の方を見た。

「ちょっと、目を瞑るですう」

「え？ わかりました？」

少し疑問に思ったが、私は素直に目を瞑る。

何をされるか不安になったが、マリーチ様の凝縮された殺気が私の横をかすめた様な気がした。

後ろの方に向かっていった様に思えることから、セバスチャンさんが何かやったのだらう。

マリーチ様の殺気は、歴戦の軍人すら怯ませる。

ロレーナさんから聞いた話だが、私を引く抜く際、軍司令官を脅

したらしい。

物理的ではなく精神的にとの事だが、マリーチ様は精神的に相手を屈服させる事が得意なようだ。

良い匂いがする。

それに、顔になんだか柔らかい物が当たる。

それと同時に、首に違和感が。

何か首に取り付けられているらしい。

カチンツという何かが固定されるような音が聞える。

「もう良いですよお」

「？」

私の首には、紅い首輪が付けられていた。

革製ではない。

鉄製でもないようだ。

でも、なにかこう。

慣れしたんだ素材で作られている物の様な気がする。

「ソレはアーティアの待機状態ですう。そして、お前が私の所有物である証でもあるですう。大切にするですよ？」

IS。

この首輪は、ISアーティアの待機状態らしい。

そして、所有物宣言されてしまった。

もしも壊したりしたらどうなるのだろうか？

転んだりしたら危ないかもしれない。

お風呂は、待機状態とはいえISなのだから大丈夫だろう。

マリーチ様は、すでに私から視線を外し左薬指に付けられている指輪を見ていた。

アレは知っている。

マリーチ様の専用ISマリーセレスの待機状態だ。

「マリーチお嬢様、ドローテア様、IS学園に到着致しました」

いつの間にかIS学園に到着している。

だけど、どう考えても5分以上掛かっている事を察するに。

「ドローテア様、私は空気を読める執事ですぞ」

スピーカーの音量を最低限まで絞り、私にだけ聞える様にセバスチャンさんが言う。

なんの空気を読んだのだろうか？

とにかく、これからマリーチ様との学園生活が始まる。

私の服装はメイド服のままなのだろうか？

IS学園1年1組。

なんとも間の悪い事に転校生が他にも2名いた。

片方は見たこともない。

デュノアの御曹司だというのが、デュノアに跡取り息子はいたかどうか？

覚えがない。

もう片方はよく知っている。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

ドロテアの上上司だ。

そして、織斑千冬という後押しが無ければ何も出来なかった癖に、無駄に？私最強！？感を出している勘違い女。

ドイツもあんなのを代表候補に据えるなんてどうかしている。

IS配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ副隊長、クラリツサ・ハルフォーフを代表候補とするのならば、多少は評価を改めたのだが、所詮は利益のみを考える大馬鹿の集まりだったという事か。

やはり、送ったISに無茶な解析をされたら自壊するプログラムを仕込んでおいて正解だった。

「シャルル・デュノア」

「？」

私の眩きが聞えたのだろう。

金髪の御曹司、シャルル・デュノアがこちらを向く。

「私の名は、マリーチⅡオヴェストⅡポツツオⅡファブリカ。O・P・F総帥です。まさかライバル会社の御曹司と同じクラスになるとは思わなかったです。社として見れば？敵？ですがあ、IS学園にいる間は同級生としてよろしくお願いするです。」

人の良い笑顔。

殺気すら抑え、ありとあらゆる負を抑え、善しか表に出さない微笑み。

今のところ、コレを見抜けたのは世界でただ一人、ジイヤくらいなモノだ。

「はい。この国では不慣れな事も多いと思うけど、同級生としてよろしくお願いします。」

デュノアの名を持つ男と握手を交わす。

柔らかい。

柔らかすぎる。

コイツ、本当に男か？

まあ、デュノアの社長ならば何をしてもおかしくは無い。

あの大馬鹿なゴミクズ野郎ならば、自分の娘に男装させてでも利益を生もうと考えるだろう。

利益の為ならば、家族すらも平然と切り売りする様なクズだ。人間のクズ野郎だ。

機会が合ったら、事故死という名目でぶち殺す予定だが、その時にコイツは止めるだろうか？

まあ、いい。

顔を横に向けると、そこには微妙な雰囲気ドロテアと完全に

ドロテアを無視しているラウラ・ボーデヴィツヒの姿がある。
そして、ドロテアは山田真耶先生になにやら言われている様だ。
気にする必要もないだろう。

私たち4人は、山田先生を先頭とし1年1組へと向かって行く。
その途中、第1回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者で
ある織斑千冬。
モント・ケロツン

かの有名なブリュンヒルデと合流した。

「では、SHRが開始するまで、こちらの部屋で待っていてください
い」

空き教室というヤツだろう。

まだ、SHRまで10分ほど時間がある。
待たされるとしても仕方ない。

それに、いつの間にか織斑千冬もいなくなっている。

「まだ少し時間が在る様ですう」

「そつだね」

私に相槌を入れるデュノア。

ドロテアはソワソワし、ボーデヴィツヒは腕を組み、目を閉じている。

「ドロテア」

「は、はひッ!?!」

全身をビクツと震わせ、反応する。
舌でも噛んだのだろう。
悶えていた。

「なにやってるんですかぁ。新しくしたバロールの調子はどうですう？」

ドロテアは眼帯を少し触り、目を閉じた。
眼帯をしてあるのは念のために過ぎない。

ヴォーダン・オージェをさらに数回バージョンアップさせ、O・P・Fで開発されたIS用補佐ナノマシンを適応させた物がバロールだ。

擬似ハイパーセンサーという役目は同じだが、脳への視覚信号の伝達速度をさらに高速化させ、超高速戦闘下での動体反射を5倍ほどまで引き上げる。

デメリットが在るとするならば、専用ISアーティル以外ではドロテアの反応速度に追いつく事が出来ず、逆にISの動きが鈍くなるというものがある。

だが、この訓練機をドロテアに使わせるつもり等ない。
問題は無いだろう。

「はい。大丈夫です」

「何かあったらすぐに言うですう。ソレはまだまだ試作段階の眼。ほおっておいて脳が焼き切れたじゃ、笑い話にしかならないですう」

「……。はい」

デュノアが複雑そうな表情をし、私を見る。
ラウラも少し反応したが、無視する事にした様だ。

そして、数分後。

私たち4人は、織斑千冬。織斑先生に従い1年1組へと向かった。

教室へは先に織斑先生が入る。

私たちは廊下で待機だ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

騒がしかった教室が静かになる。

織斑先生の統率力はかなり高いようだ。

さすがは、ブリュンヒルデと言ったところだろう。

私は廊下を見渡し、学校という初めての施設を見る。

場所が場所だからなのだろう。

テレビで見た学校というよりも、新兵を育てる為の軍施設と言った印象だ。

しかし、やはり。

雰囲気が違う。

これが学校というモノなのだろう。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも四名です」

「「えええええええつ!?!?!」」

うるさい。

仕方がない事だろうけど。

このIS学園に転校するには色々と苦労した。

本来、国の許可なんかを貰わなければならないのだが、O・P・Fの権力を持ち、所持するISをチラつかせたり色々としてやっと転校できたのだから。

「失礼します」

「失礼するですう」

「失礼致します」

「……………」

とりあえず、デュノアに続けて教室に入る。

静まり返った教室。

おそらく、デュノアに注目しているのだろう。

あとは、私はテレビのCMやらニュースやらでO・P・F総帥として出ているから知っている者は知っているのかもしれない。

Side ドロテア＝リッケン

なんでココにラウラ隊長がいるのだろうか？

何か話すべきなのだろうか？

でも、何を話せば良い？

マリーチ様は、デュノア様に話しかけている。

外交なんかで手腕を揮うマリーチ様に、敵対会社だから話しかけ

ないという感情は無いのだろう。

むしろ、敵対会社だからこそ話しかけ、情報を引き出すとか考え
ているかもしれない。

「あの、ドロテア＝リツケンさん」

「は、はい！」

背の小さいメガネの人に話しかけられた。

先に説明されていなければ、この人が教師である等と考えが及ん
だか分からない容姿をしている。

「なんででしょうか。山田様」

「や、山田様？ あ、先生で良いですよ」

「はい。私に何か用でしょうか。山田先生」

出来るだけロレーナさんから習った喋り方を維持する。

一流のメイドは、自らの心を悟られてはいけないと、ロレーナさ
んが言っていたのを思い出す。

む、難しい。

「えっとですね。なんで、その、メイド服なんででしょうか？」

あ、その事でしたか。

私はてつきり眼帯の事を言われたりするのかと思っていた。

眼帯にはO・P・Fの会社ロゴが印刷されており、会社のロゴを
無意識に人に記憶させる役割を持っている。

このメイド服の肩の部分にもロゴは入っていたりする。

「マリーチ様の御付として、急遽IS学園の入学を認められた為、制服が間に合わず。とはいえ、普段着で来るわけにも行きませんので、制服が届くまでは仕事着であるこちらでの対応が相応しいかとマリーチ様が判断いたしました」

そう。

私の制服はまだ届いてはいない。

だから、マリーチ様が「届くまでメイド服で良いですう」と言ったのだ。

そう言われると逆らえない。

シュヴァルツェ・ハーゼの軍服で来る訳にも行かないし。

そもそも、もうシュヴァルツェ・ハーゼの一員ではないのだから、袖を通すつもりもない。

「そうだったんですか。早く届くと良いですね」

「はい。私もこの姿が目立つ事は重々承知しております。いち早く届くようお願いして在りますので、2〜3日中には制服姿となっているかと」

プロのメイドらしく一礼する。

ロレーナさんから習った通りに出来ているだろうか？

それから少し時間が経過し、山田先生を先頭として移動を開始した。

でも、時間的にはまだ余裕がある。

きつと、1年1組に近い待機教室に移動するのだろうか。

予想通りだった。

途中で有名なブリュンヒルデと合流したが、少しだけ山田先生と会話をし、ブリュンヒルデは何処かに行ってしまう。

「では、SHRが開始するまで、こちらの部屋で待っていてください」

流れる沈黙。

なんとも重苦しい。

私はこういうのは苦手だ。

「ドロテア」

なんとも落ち着かず、ソワソワしていると。

マリーチ様から突然名前を呼ばれた。

「は、はひッ!？」

身体が勝手に反応し、ビクツと震えてしまう。

しかも、その震えで舌を嚙んでしまった。

痛い。

「なにやってるんですかあ。新しくしたバロールの調子はどうですか?」

呆れたような口調でマリーチ様は言う。

バロール。

私の瞳に移植されたIS用補佐ナノマシンを強化させた物。

以前よりも脳への負荷と肉眼への負荷を減らした上で、効力をあげた物らしい。

詳しく説明されてはいたが、よくわからなかった。ただ、チェックの仕方だけは聞いている。私は両目を閉じ、眼帯を触る。

『現在待機状態。接続可能ISアーテイル。自己メンテナンス正常。擬似センサー正常。肉体補助正常。体調管理システム正常。システム通常運行を確認。バロールに異常は診られません』

頭の中に合成音声が流れた。

ほんと、私は一体どういう処置を施されたのだろう。

いまのところは異常が無いから良いけれど。

私は素直に報告をする。

「はい。大丈夫です」

「何かあったらすぐに言うですよ。ソレはまだまだ試作段階の眼。ほおっておいて脳が焼き切れたじゃ、笑い話にしかならないですよ」

「……。はい」

脳が焼き切れるらしい。

脳には痛覚が無いから、きっと死ぬ時はソコまで痛くないだろう。でも、できるのならば死にたくはない。

異変を感じたらすぐに報告する事にしよう。

そして、数分後。

私たち4人は、ブリュンヒルデ。織斑先生に従い1年1組へと向かった。

教室へは先に織斑先生が入る。
呼ばれるまで廊下で待機だ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

騒がしかった教室が一瞬で静かになる。
さすが、ブリュンヒルデ。

あのラウラ隊長が恩師と仰ぐ存在である。

これからその人に色々と教えてもらえると思うと、胸が高鳴るが、同時に恐怖を覚えてしまう。

私は、マリーチ様のお怒りを買わない様にならなければならぬか^ら。

教室内からは、織斑先生の声が聞える。

定時連絡の様なことをしているのだろう。

私は少しだけ他の3人に視点を向ける。

ラウラ隊長は、腕を組み目を閉じていた。

さっきからずっとあんな感じ。

デュノア様に視点を向けると微笑みを返してくれた。

マリーチ様とは違いお優しいイメージ。

マリーチ様は廊下を見たりしている。

まるで学校そのものが珍しいといった様な感じ。

実際、珍しいのだろう。

3人を見ていると、教室から山田先生の声と他の生徒の音が聞え

た。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも四名です」

「「「ええええええっ!?!?!」」」

凄い音量だ。

マリーチ様の表情に一瞬だけ怒りが垣間見える。

うるさいのが嫌いな方なので、仕方ないだろうけど。

出きるだけ同級生の方々には騒がないで欲しい。

私の寿命が縮まる。

一番最初に教室に入ったのはデュノア様。

それに続くように入るマリーチ様の後に私も続く。

ロレーナさんが言っていた。

常に主の一步後ろを歩けと。

「失礼します」

「失礼するですう」

「失礼致します」

「……………」

先ほどの喧騒が嘘の様に、教室は静かだった。

みんなの視点はデュノア様、マリーチ様、私、ラウラ隊長の順に移り。

デュノア様に一番多く集中している。

私は、上手く自己紹介できるだろうか？

自己紹介の先陣を切ったのは、デュノアだった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

実に模範的な自己紹介。

デュノア社の方で色々と教育されたのだろう。

しかし、本当に男か？

「お、男……？」

クラスの誰かが言う。

実に正常な反応だ。

ISを唯一操縦できる男が居るクラス。

そこにさらに男のIS操縦者が着たともなれば、確認したくもなるだろう。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

ん？

肩をドロテアに叩かれた。

全く、自己紹介の場でなんだと言うのだ？

小声で確認する。

「なんですよ」

「マ、マリーチ様。コレを」

ドロテアから手渡されたのは耳栓だった。
意味が分からないが、ドロテア自身はすでに耳栓をしている。
そして、教室をコツソリと指差す。

興奮のあまり今にも叫びだしそうな女子。
しかも、クラスの一人を除いた全員。
なるほど。

「ふん、よく勘付いたですう。褒めてやるですう」

「あ、ありがとうございます」

本当に嬉しそうな顔をするドロテア。
そして、私はすぐに耳栓をする。

「きゃ……」

「はい？」

デュノアは気がついてはいない。
ポーデヴィツヒは興味すらない様だ。

「きゃあああああああ　　っ！」

耳栓をしているのに完全には塞ぎきれない。
耳栓をしたうえで耳を塞いで何とかやり過ぐす。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~！」

最後の一人。

今すぐインスマスに供物として差し出してやるつかですう。

同じ地球だし問題ないですよ？ 地球に生まれてよかったんだろお？

「お、落ち着いてくださいマリーチ様。お顔に出ています」

少し顔に出してしまったらしい。

しかし、こここの壁が防音であるとは思えない。

別の教室にもこの騒音は聞えているだろう。

休み時間は余計にうるさくなりそうだ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

次は私の番だろう。

自己紹介をしなければ行けない。

「マリーチ〓オヴェスト〓ポッツォ〓ファブリカですう。Oves
t Pozzo Fabrica（オヴェスト ポッツォ ファ
ブリカ） 日本支部を拠点としてるので日本は慣れているですが、
学校という環境には不慣れですう。色々ご迷惑を掛けてしまつと

思いますが、よろしくお願いするですう」

可愛らしい微笑みを浮かべ、頭を下げる。

総帥としての威厳より、アイドルとしての親しみやすさをイメージしてみたのだが、中々に上々。

「可愛い」

「うわあ、すごい美少女」

「美男子に美少女の転校生なんてツイてる」

「テレビで見たことある」

群集は扱いやすくて助かる。

この教室には比較的日本人が多いようだ。

私もかなりテレビ出演しているが、日本を拠点としているだけに日本のテレビに映る事が最も多い。

私の次はドロテアアの番だ。

S i d e ドロテアア＝リッケン

と、とうとう。

私の番が来てしまった。

教室内の全員の視線が私に突き刺さる。

動揺は表面に出しては居ない。

だが、それでも「メイド服？」という疑問視の込められた視線をものともせずシッカリと自己紹介を行えるか不安だ。

「皆様、初めまして。マリーチ様の専属メイド、ドロテーア・リッケンと申します。本日は制服が間に合わず、仕事着での自己紹介をお許し頂ければ幸いです。マリーチ様共々、よろしくお願い致します」

ローレーナさんに習った様にスカートを少しだけ掴み、軽く礼をする。

完璧なハズだ。

事前に練習した通りに出来た。

これなら、マリーチ様にも怒られない。

「ほ、本物のメイドさん？」

「美男子、美少女、メイドさん。あれ？　ココって学校だよね？」

「メ、メイドプレイ？」

いいえ。違います。

「プロって感じがするよ……」

プロです。

メイドのプロじゃないですけど。

私のときは、デュノア様やマリーチ様の時みたいに騒がしくなかった。

啞然としてるという感じ。

仕方もない事だろう。

そして、最後に残ったのはラウラ隊長だ。隊長の視点からすれば『有象無象が目の前で騒いでいる』程度なのだろう。

先ほどから腕を組み、下らない物を見るような視線を女子に向けていた。

隊長は相変わらずな様だ。

「……………」

しかし、すぐに視点をブリュンヒルデ。

織斑先生へと向ける。

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

素直に頷き、佇まいを直した。

そういえば、聞いた事がある。

昔、隊長は出来損ないの烙印を押されていたらしい。

いまでは、その烙印を押されているのは私なのだけど、当時は隊長だった。

そんな隊長を鍛え、いまの地位にまで押し上げたのがブリュンヒルデ、織斑先生だ。

だからなのだろう。

織斑先生にだけ素直なのは。

いまでも、信頼すべき絶対の教官なのだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

背筋を伸ばし、踵を揃える。

何処まで行っても軍人なのだろう。

私とは違う。

出来損ないの烙印を押された理由だって、越界の瞳の制御が上手く行かなかったから。

私の様に最初から最後まで出来損ないじゃない。

誰だって、最初から完璧にこなせたりしたら苦労はしない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

教室に重い沈黙が流れる。

ど、どうしたら良いのだろうか？

マリーチ様は。

「……………」

織斑様を見ていた。

なにかこう。見定めるような。品定めをしている様な。

そんな様な視線で見ている。

デュノア様は困惑の表情を浮かべ、何も出来ないでいた。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が何とかラウラ隊長に声を掛ける。

普段、ラウラ隊長に声を掛けられるのは、クラリッサ副隊長だけだった。

おそらく、山田先生の精神は大分削られていると思う。
少し尊敬の念を懷いた。

そして、ラウラ隊長の目が織斑様に向いた時、殺気のような物が身体から溢れる。

理由は分からない。

だけど、ダメだ。

良くない。

もしも、織斑様に何か在れば、マリーチ様が暴れ、八つ当たりで私が苛められる。

「！ 貴様が」

つかつかと織斑様の方へ歩いて行くラウラ隊長。

私は、その後を悟られない様に追う。

いまの私は、昔の私じゃない。

この眼は、ラウラ隊長の眼よりも優れ。

この身体は、シュヴァルツェ・ハーゼにいた時よりも強化されている。

パシッ。

織斑様の前に割り込み、ラウラ隊長の手首を掴んで止めた。
睨まれる。

私はただ「マリーチ様のメイド」としての強い意志とロレーナさんから貰った誇りを瞳に宿し、その目を見る。

「貴様、ドロテアーリックン。出来損ないが何のマネだ」

「違います」

私はすかさず反論する。

「私はマリーチ様の専属メイド。アーティルのドロテアーリックン。すでにボーデヴィツヒ様の知るドロテアーリックンでは御座いません」

意志は揺るがない。

ロレーナさんが言っていた。

マリーチ様が人間嫌い。

なのに私を破棄せずに、使えなくとも側に置くと言った。

私は必要とされているのだ。

だから、必要とされなかった頃の私ではない。

「チツ……。手を離せ」

隊長の手を離す。

だが、臨戦状態は解除しない。

マリーチ様の視線を感じた。

それは、私を褒める時に向ける視線。

褒められた。

嬉しい。

この喜びの為だけに、私は頑張らなければならない。

ラウラ隊長は、織斑様を睨みつけ言う。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そして、つかつかと指定されている席に移動すると、腕を組み、目を閉じた。

当分は動かないだろう。

私は後ろを向き確かめる。

「織斑様、お怪我は御座いませんか？」

「え？ あ、ああ、ありがとう」

「感謝の言葉は必要御座いません。私はただマリーチ様の利益となる事をしただけに過ぎません」

「え？」

行儀良く一礼し、マリーチ様の元へと引き上げる。

引き上げたそこには、笑みを浮べるマリーチ様がいた。

「良くやっただですう。褒めてあげるですう」

「は、はい。お褒め頂き有難う御座います」

一礼ではない。

片膝を付き、頭を垂れる。

頭を撫でてくれるマリーチ様の手は柔らかく、優しかった。

この束の間の幸せの為に。

マリーチ様の障害となる物は許さない。

マリーチ様の敵は、私の敵。

たとえ、隊長であつたとしても。

マリーチ様の気分を害するものの存在など。

認めることは出来ない。

そして、マリーチ様、デュノア様、私の三人は山田先生に言われていた席に付く。

「あー。ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

こうして、初めてのHRは終わった。

Ver. 9 (後書き)

ストックホルム症候群。

恐怖と生存本能に基づく自己欺瞞的心理操作である。セルフ・マインドコントロール

だがもし、解放される事なく常に共にいた場合はどうなるのだろうか？

それはもう、心の束縛でしかないのかもしれない。

恐怖から逃れる為に恐怖に同化する。

示された僅かな希望に縋りつく。

生存本能に従い。

心を縛る存在に消されない様、心を縛る存在の敵対者を狩り続ける。

本人に取っては、幸せなのだ。

与えられる希望という名の蜜を啜る事だけが。

ただ一つの幸せ。

テケリ・リ。

最初は怯えていた鬼が、今では怯えるどころか褒められる為に行動している。

恐怖による心の束縛だけではなく、アメも与えてきた効果が現れてきたのだろう。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

織斑先生の言葉を受け、デュノアが織斑一夏に近づき話しかけた。まあ、女子だけの教室で着替える事は出来ないので当然だろう。

「君が織斑君？初めまして、僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

織斑一夏は、デュノアの手を取り教室から出て行く。
喋る機会を失った。

まあ、しかし。

なんと呼べば良いかも分からない状態だし、焦る必要もない。

幸い、ドロテアが切欠だけは作ったのだから。

「まあ良いです」

そう呟き。

私は周りの生徒同様に着替え始める。

ドロテアは私の側に控え、私の脱いだ制服を丁寧に畳んで行く。どうやら、ローレーナに相当教育を施されたらしい。

「うわぁー」

「やっぱし、メイドさんなんだ」

とかなんとか聞えてくる。

そして、廊下からは黄色い声が聞えてきた。

やはりと言うべきだろう。

織斑一夏。

ブリュンヒルデの弟にして、男性で初めてISを動かした存在。
注目するなという方が無理がある。

しかし、どれだけ本気な人間が居るのだろうか？

「愛でもなければ、恋でもない。ただカッコイイから…。尻軽女ばかりですう」

少し絡まれたが、ドロテアが全て対処したので面倒な事にはならず第二グラウンドに着いた。

しかし、カメラを持った上級生。

非常にウザかった。

あとで消しておこう。

周りを少し確認したが、まだ織斑一夏とデュノアは来ていないよ
うだ。

ふむ。

男子用のISスーツは着るのに手間取るのだろうか？

ならば、それも会話に繋げる事が出来る。
情報収集も兼ねて、我が社のISスーツを提供するのも良さそう
だ。

何よりもマスターにソツクリな人物。
少しくらいサービスしても問題ないだろう。

「遅い！」

織斑先生の怒鳴り声が響く。

この人物は、どう考えても教師というよりは教官。
軍関連にいた方が違和感がない。
だが、これは使える。
少し友好を作っておくのも悪くないだろう。

「オルコットさん、オルコットさん」

「？ なんですの？」

「織斑先生はいつもあんな感じなんですう？」

私は織斑一夏を引っ叩く織斑先生をチラッと見た。
それだけで、理解してくれたオルコットは答えてくれる。

「ええ、いつもあんな感じですね。貴女も注意しないと怒られてし
まいますわよ」

「なるほど、ありがとうございます」

私がオルコットとの会話を終了した時。
頭を擦りながら織斑一夏がこちらにやって来た。

デユノアは叩かれてなかったようだが、なぜか楽しそうな表情をしている。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

若干だがオルコットの言葉には棘がある。

嫉妬という名の棘だ。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

確かに、なぜ時間がかかったのだろうか？

さすがに移動教室での移動を邪魔するような生徒はいないと思うが。

それに、男性用にカスタムされたと思われるISスーツは、マリ―セレス用のISスーツに何処となく似ている。

ウェットスーツの様な全身を覆うタイプなのだ。

まあ、私の場合は下半身が少し露出しているが。

ちなみにドロテアのISスーツは、セシリアのISスーツに似ているが、胸の上の部分が開いており、ただでさえ大きめなのに余計に大きく見えた。

妬ましい。

ドロテア自身も恥かしらしく、頬を少しだけ紅く染めている。しかし、この状態のドロテアをしても織斑一夏が反応を示さない理由はなんだ？

「道が混んでいたんだよ」

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

会話に集中して気がついていない。
「こんなところだろう。」

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？　そうでないとも二月続けて女性からはたかれたりしませんわよね。まあ、今日は未遂でしたけれど。」

なぜか仰け反る織斑一夏。
少しオーバーリアクション過ぎないだろうか？

「なに？　アンタまたなんかやったの？」

後ろから聞き慣れない声でした。
2組の知り合いか何かだろう。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの。」

「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

ドロテアが庇ったから叩かれてはいない。
私も会話に参加するべく喋ろうとした時、ドロテアに抱き付かれた。

「？」

ワケが分からずドロテアの方を見る。
コイツを百合属性にした覚えはない。

「安心しろ。バカは私の目の前にも2名いる。」

なるほど。

ドロテアは、コレを伝えようとしたワケか。
目の前で引っ叩かれるオルコットと2組の誰か。

私はドロテアの頭を撫でながらその光景を見ていた。

Side ドロテア＝リツケン

最初の授業は移動教室。

しかも、ISの訓練らしい。

着替えなければいけないのだけど、ローリーナさんが言っていた。

主が脱いだ服を畳むのもメイドの役目だと。

だから私は、自分の着替えを後にして、マリーチ様のお着替えの手伝いをする。

といつても、マリーチ様は基本的に自分で着替えるので、私はマリーチ様が脱いだ服を畳んでいるだけ。

「うわぁー」

「やっぱし、メイドさんなんだ」

全員とまでは行かないけれど、視線を感じる。

恥かしい。

恥かしいけれど、役目を放棄したら後で苛められるし、怒られると思う。

大丈夫。

私は当然の事をしているだけなんだから。

マリーチ様のお着替えが終わり次第、私も着替える。
アーテイル用のISスーツは、なぜか胸が強調されているから恥かしい。

「ただ、開発部の人曰く「バリステックブレイズの熱を逃がすための処置」だという。」

嘘だと思った。

「ただ、アーテイルは専用のISスーツを必要とする特殊なISだからコレしか選択肢がない。」

「うわ、大胆」

「ぐぬぬ、勝てない」

「アレ、引つ張られたりしたら危なくない？」

「さ、触りたい」

「なんだか色々言われてる。」

「ただ、最後の人だけには近寄って欲しくない。」

「恥かしい気持ちを何とか根性で押さえ込み、私はマリーチ様の後に続いて第二グラウンドへと向かった。」

「途中、様々な人が話しかけてきたけど。」

「申し訳御座いません。次の授業は第二グラウンドですので急いでおります」

「織斑先生にご迷惑を掛ける訳には参りませんので」

「本日転入致しました為、授業に遅れぬ様にどうかご配慮をお願い」

致します」

とか色々な理由を付けて断る。

なんだか新聞部とか言う人たちが凄くしつこかったけど。部活動というヤツなのだから仕方ないのだろう。

きっと、ソレが役目なのだ。

少し早めに第二グラウンドにつく事が出来た。

マリーチ様は周りを見渡している。

たぶん、織斑様を探しているのだろう。

「ねえ、ねえ、ドロテー。ドロテーのISスーツって大胆だね」

突然話しかけられた。

見た目の印象は、ほんわかした人だろう。

しかし、名前が分からない。

「……えっと」

「あ、私ね。布仏 本音。よろしくね」

のんびりした口調で自己紹介をされた。

そして、ニッコリと微笑みを浮かべる本音様。

「ご存知かと思いますが、ドロテーア＝リッケンです。よろしくお願致します。本音様」

「様なんて、付けなくても良いよ。私もね。メイドさんなんだ」

のんびりした人。
布仏本音という人物も誰かのメイドらしい。

「あ、そろそろ授業が始まるから。静かにしておかないと、織斑先生に怒られちゃう」

立ち話は厳禁なのだろう。

軍の頃からソレは当然な事だ。

私は、本音さんに微笑み一礼する。

本音さんも微笑みを返してくれた。

そして、マリーチ様の方を向くと。

なにやら殺気立っているブリュンヒルデ、織斑先生の姿が目に入る。

マリーチ様の方を向いているが、視線はマリーチ様ではなく、オ
ルコット様と2組の方を見ていた。

いまこのタイミングでマリーチ様が喋るのはまずい。

まずい。

マリーチ様の口が少しだけ開く。

喋ろうとしているのだろう。

止めなくては。

だけど、私が喋っては本末転倒。

ど、どうすれば……。

どうしよう！

何も思い付かなかったが、身体が勝手に動き、マリーチ様を抱き
締める。

「？」

喋ろうとしていたマリーチ様の興味が私に移ったと同時に、織斑先生がオルコット様と2組の方の頭を叩いた。

きつと、抱きつくという行動にマリーチ様は怒りを覚えるだろう。私も叩かれる覚悟をしなければならない。

そう覚悟を決めたのだが。

いつまでたっても叩かれる事はなく、逆に頭を撫でられた。

褒められたのだ。

嬉しい。

私はマリーチ様から体を離し、横に並ぶ。

楽しい授業になりそうな気がした。

O・P・F | NETジャーナル 第三回

「それでは、第三回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ。今回はジイヤ一人ですな」

「感想の返答だけですぞ」

>ストラス 様<

お嬢様がたのIS学園での彼女達との出会いではどんな活躍をするのか楽しみです。

最強物ではないとありますが、最終テストの話を見る限りでは、勝負を挑んできそうな蒼い涙とチツパイはフルボッコのような…

次回は学園かな？楽しみに待ってます（ ）

追伸

エウ克蘭テ型とイーアネイラ型以外に登場予定つてありますか？作者さんの犬猫も見てみたいですが、自分としては実況役としてツガル型が見てみたいです

「いやはや、ジイもお嬢様方の活躍は楽しみですぞ。入学した時期が時期ですからな、味方うちでの戦いは少なめですの」

「はあゝい。IS学園大会実況を担当するツガルです。よろしくね」

「登場が早いすな。とりあえず、ツガル型は登場しますぞ」

> 緒方 紅夜 様<

あとがきwwwwwwww

「セバスチャンは、あの胸に懐かれ……！！」

グウォーン！！

(少し角度がありすぎた為、猟犬が現れました)

> ストラス 様<

今回の誤字報告無しです(^-^)

セバスチャンの魔改造…かのポンドカーを彷彿させそうだ(＾o＾；
しかし基本携帯からなのであとがきが見れなくてorz

「ほほほっ、ポンドカーなんぞ敵ではありませんぞ！ ちなみに、
あとがきはイーアネイラのAAですな」

> m o t t i 様<

待機状態が首輪とかマリーチ独占欲全開ですな

セバスチャンの紳士っぷりがバトルマスターズに登場する敵マスター
達を彷彿とさせてツボりました

登場予定の武器”アトミック・ジャベリン”

バトルマスターズのあるイベントを見たことのある自分には爆発オ

チしか想像できないw

「いやはや、マリーチ才お嬢様の独占欲は昔から高いですからなあ。困ったものですぞ。」

「ちなみに、あのイベントは健在ですぞ！」

> kusarri 様<

連日更新お疲れさまです

原作突入ですな

ドロテアとマリーチの二つの視点からの場面は二人によって注目しているところが違うので面白いです

個人的な質問ですが今現在ドロテアとラウラはどっちが強いのでしょうかI Sの性能を無視して操縦技術や戦闘での判断力ではどっちですか

ソレは、幻の機体DEATHも更新待っています

次回も頑張ってください

「そうですね。現在のドロテア様ではラウラ様には勝てないでしょうな。さて、幻の方はアフア子殿が頑張ってくれるとジイも信じしておりますぞ」

> 蒼 龍一 様<

AAがカワイイかったw

「ほほほ、龍一様とは気が合いそうですね」

>歪曲詩 様<

「ペットは飼い主に似る」という言葉を聞いたことがあります。

何が言いたいかというと、ヤンデレのペットは、やっぱりヤンデレ
(笑)

最近、「月光」というライトノベルを読んでから悪女系・小悪魔系
の主人公が可愛くて仕方ない。

主人公の一夏攻略戦(笑)を期待しています。

次回の更新楽しみに待っています。

「ドロテア様までヤンデレ化されると困りますな」

>緒方 紅夜 様<

シヨゴスで吹いたwww

あー、こっちの方にいきましたか。

まだまだ主人公は見極め中。

今んとこドロテアに出番食われとるが、まだまだ先は長いからな。

この四人転校生での原作乖離は大まかな流れでは企業・国家系、小
さなもんだと他のヒロインの嫉妬がライバルフラグ。

そしてインスマス村がどこにあるのか知ってるのかマリーチ……

あと会社のほかの支部のメンバーとか出てくるのかな？

そこらへんも期待しときます。

シヨゴスで思いましたが、どっかのライトノベルでシヨゴスをメイ
ドにしているのあったなー

「会社のほかのメンバーですか。みな目立ちたがり屋ですから。出てくると思いますぞ。ジヨゴスのメイド、スライムメイドです。悪くないですよ。」

> kusari 様<

更新お疲れさまです

あとがきから察するにドロテアはマリーチにより恐怖と同時に生きる希望を与えられている

飴と鞭の状態ですね、

マリーチお嬢様は計算されてやっているのかそれとも素でやっているのかわかるのか想像すると怖いですね

素なら天然の支配者ですか

ドロテアの変化をラウラはどう思うか少し気になりますね

次回も頑張ってください

「マリーチお嬢様は計算でしょうなあ。そうですね、ドロテア様の変化をラウラ様がどう思うか…。その内わかるかもしれませんが」

「さて、今回はこんな感じですか？」

「いやはや、このセバスチャン一人では寂しいですな。では、? O . P . F | NETジャーナル?はOvest Pozzo Fabb r i c a (オヴェスト ポッツォ ファブリカ) とA / c u t e D y n a m i x アキュート・ダイナミックスの提供でお送りしま

したぞ
「

織斑先生の声が第二グラウンドに響く。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1組と2組。

合同というだけあり、なにやら気合が入っている様な気がする。

2組の生徒からすれば、ブリュンヒルデから指導を受ける数少ない機会の一つと言えるからだろう。

「くっつ……。何かというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

横でオルコットが涙目になりながら頭を押さえ、後ろからは2組の誰かさんの声が聞えた。

ドロテアが止めなければ、私も一緒に頭を押さえていたのだろう。

2組の誰かさんが織斑一夏を蹴っているのが目に移る。

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 凰！ オルコット！」

「な、なぜわたくしまで……！」

嫌そうな顔をするオルコット。

しかし、私にも声が掛かると思ったが、掛からなかった。
私の隣でドロテアが織斑先生を見つめていたが、理由は分からない。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前が出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

渋々前に出る二人。

織斑先生がその横を通り過ぎる時、二人に何か耳打ちしていた。
内容は聞えなかったが、その言葉で二人はヤル気を出したらしい。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコックの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

何を言ったのか、大体は想像が付く。

おそらく「織斑一夏に良い所を見せれる」などと言ったのだろう。
実に単純な事だ。

そう考えていた時。

隣から、カシュンッと小さな音が聞えた。

これは、ドロテアの首につけられた首輪が解放され、アーティルが呼び出された時になるギミック音。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

キイイイン。

耳障りな音が上空から聞える。

どうやら山田先生がミスって突っ込んできたらしい。

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

「マリーチ様！ 私の後ろへ！」

アーテイルを展開したドロテアが私の前に出る。

だが、山田先生の落下方向から察するにこちら側ではなく織斑一夏の方に向かっていているようだ。

そういえば、マスターも武装神姫関連の事件に毎度毎度巻き込まれていたっけ。

家を出ればミミックに襲われ、少し戦いで勝ち抜けばラブレター染みた挑戦状で複数ハンデ戦を申し込まれ、優勝すれば殺人事件まで起こる始末。

そして、目の前を通過する山田先生。

接触ギリギリの所で白式を展開させる織斑一夏。

ドカーン！

なんともマヌケな。

カートゥンアニメでも見ているかのような気分だ。

「ケホッ」

舞い上がった土煙で軽く咳き込む。

「マリーチ様、大丈夫ですか？」

咳き込んだ事で心配そうな表情をするドロテア。
いままで様々な人間を見てきたから分かるが、こいつは心の底から私の事を心配しているらしい。

「大丈夫ですう」

コイツは撫でられるのが好きだった。
安心させる意味合いも込めて頭を撫でておく。

「ひう」

私がドロテアの頭に向け手を伸ばすと、ビクリと震えた。
だが、優しく撫でてやった途端、嬉しそうな表情をする。
そして、なぜ震えたかは寮部屋でユツクリ聞くとしよう。

「ちょっと心配しすぎですう」

「で、ですが…。はい」

周りは織斑一夏と山田先生のやり取りを見ており、こちらを見てはいない。

まあ、幸いだったと言えるだろう。

私に百合の属性は無いし。

ドローテアを撫でるのを中断し、織斑一夏の方に視界を向けた瞬間。

ヒュン！

私の真横を蒼いレーザー光が通過する。

そのレーザーを放ったのはオルコットだろう。

そして、そのレーザーを回避する織斑一夏。

中々の反射神経と危機感知能力を持っているようだ。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

試しに振り返ると、そこには般若みたいなオルコットがいた。

無論、表情は笑みに溢れている。

雰囲気的にといいヤツだ。

豆知識ではあるが、女性の怨霊を表現する面の事を般若というらしい。

いまのオルコットには相応しい面と言えよう。

さて、横では2匹目の般若が動き出す。

ガシーン！

という何かを組み合わせる音。

二振りの巨大な青竜刀を連結し、振りかぶる。

どうやら、アレは連結する事で投擲用武器にもなる物らしい。

ブーメランの様なものだろう。

「躊躇いの無い投擲ですう」

「助けに入った方がよろしいでしょうか？」

私の呟きに即座に反応するドロテア。

おそらく避けれるだろうし、山田先生の实力を見るためにもここは放置する。

「山田先生が対応するですう。今の所は様子見ですう」

「承知いたしました」

ドロテアは一礼し、私の後ろ斜めへと移動した。

そして、案の定。

織斑一夏は、高速で飛来する投擲物を避けてみせる。

「うおおおっ!?!」

だがまあ、予想通り。

アレはブーメランの様な物らしく、戻ってくる。

織斑一夏は絶望的な表情を浮べていたが、その横では山田先生がすでに動いているので問題ないだろう。

「はっ!」

ドンッドンッ!

短く二発。

その二発を投擲物の両端に当て、軌道を変える。

さて、なんの因果か軌道を変えられた投擲物がこちらに迫っているワケだが。

さては、あの教師。

胸を揉まれた事で、織斑一夏のことしか頭に無かったな？

「はあ、あまあまですう」

擬態し、不可視となっているアーク・E・トウージスで投擲物を叩き落す。

それはもう、つまらなそうな顔をしながら。

鉄が鉄を弾く何とも言えない音を響かせ、投擲物は大人しくなった。

「不注意厳禁ですう」

マリーセレスは海洋軟体生物を模したISなのだから、擬態など様々な事ができる。

神姫の時よりもモデルへの傾向は強くなっているのだ。

「す、すみません!」

「気にしなくて良いですう」

山田先生は物凄い勢いで頭を下げ謝ってきた。
ちなみに周りは啞然としている。

というか、状況について来れていないと言っべきだろう。

ドロテアは短銃を抜き打ちする様な体勢で固まっている。

まあ、私がアーク・E・トウージスで押さえつけているからなワ

ケだが。

ことも終わったし、離してやろう。

さて、この状況に置いても全く動じなかった織斑先生が口を開く。

「山田先生はああ見えて元代表候補だからな。今くらいの射撃は造作でもないが、ファブリカとリツケンの対応は意外だったな」

「日頃の訓練の賜物ですう。師の名は、ロレーナ。ロレーナ・ベルトンチーニですう。織斑先生なら知ってると思うですう」

「ほう、彼女か……。ならばその実力も頷ける」

ロレーナの名は有名だ。

自ら代表の座を投げ出した稀代のIS操縦者。

織斑千冬が現役だった頃、唯一対抗できるであろうと言われているだけに知名度は高い。

その名が出たのに周りが騒がないのは、授業中だからだろう。

「さて小娘ども、さつさと始めるぞ」

織斑先生は啞然としたままでいるオルコットと2組の凰という名の女子、専用機持ちという事とその名前から察するに、おそらく中国代表候補生なのだろう。

その二人に声を掛ける。

そして、我に返った二人はバカな事を口にした。

「え？ あの2対1で……？」

「いや、さすがに……」

相手の力量すら見抜けないなんて情けない。
いまのお前たちじゃ、逆立ちしたって山田先生には勝てっこない。
私とドロテアならば五分五分と言った所なのだから。

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

負ける。

その言葉で単純な二人の瞳に闘志が宿る。

織斑先生に前に出された時もそうだったが、この二人は些か単純すぎやしないだろうか？

だが、しかし。

あんまりにも早く倒されては楽しくない。

なので、私は囁いた。

「オルコットさん、オルコットさん」

「なんですの？」

「頑張ってくださいですう。山田先生はラファールなので、得意距離は中距離。おそらく同士打ちなんかも狙って来ると思っていますう」

「……………。助言感謝しますわ」

少し考える様な表情をし、私に微笑みを向けるオルコット。

織斑先生の視線を少し感じたが、気にしない。

それに、織斑先生も私の本性と性質に関して完全に気がついた様ではなさそうだ。

二人が一步前に出ると織斑先生が口を開く。

「では、はじめ」

号令と同時にオルコットと凰が飛翔する。

山田先生はソレを確認し、続くように飛んだ。

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます!」

戦いは始まった。

織斑先生はソレを見てすらない。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

どうやら山田先生の勝利を確信しているらしい。

よほど、山田先生を信頼しているのだろう。

そんな織斑先生に指名されたデュノアは、自社ISの説明をしている。

もはや研究し尽くしたISの事などどうでも良い。

細部に至るまで記憶し、記録し、その進化系統まで予測し、さらにスペックを上げ想像しながら作ったISが、わが社の第二世代強化型なのだから。

だが、使いやすさを追求されたラファール・リヴァイヴ。そして、その後継たるラファール・リヴァイヴ・カスタム。さらに後継であるラファール・リヴァイヴ・カスタム？。汎用型というのもまた美ではあるが、作り手の気持ちよりも利益を考えるゴミ野郎の意志がラファールを汚している以上。どんなに素晴らしかったであろう機体も地に落ちる。なんとも悲しい事だ。

そういえば、デュノア社と我が社O・P・FのISとは、基本思想が全く違う。

自由という名の混沌たる理論。
百を超える研究者たちが互いの意見を混ぜ合わせ、迷宮の様な構造理論を再定義しながら考え抜いた異形^{シロモノ}。

それら全ての混沌を私が吸い上げ、私なりに形を与えたのがO・P・FのISだ。

あのゴミ貯めの様なデュノアの頂点が、無意味に命令し、作らせ、社の安定だけを考え無駄に量産された機体。

思想自体が全く逆だ。
相容れぬわけなのだが、デュノア社のIS開発チームには同情を覚えてしまう。

しかし、まあ。

「その量産型ですら、我が社の強化型に地位を奪われてるですう」

そう呟き、視界を上空に移す。

そこでは全く連携が取れておらず、山田先生に良い様にあしらわれている二人の姿があった。

私の忠告を聞いていたオルコットは、凰を援護するような射撃を行っている。

凰の方は連携など関係無しに突っ込むばかりだ。

「今代の代表候補は微妙な質ですう。機体に振り回されてるですな。ま、3年間でどの程度成長するか、見物ですう」

仕舞いには戦っているさなかで罵りあい誘導されて行く。

そして案の定、衝突した。

おそらく、二人には山田先生が投擲したグレネードすら見えていないだろう。

爆発が起こり、二人は地面に落下してゆく。

「シングルの戦いはどうかかわらないですがあ、ダブルでの戦いは下の下ですう」

横では二人を心配そうに見るドロテア。

だが、クラス全体からはクスクス笑いが聞える。専用機持ちでアレなのだ。

お前らだったら秒殺も良いところだというのに。

「使えないヤツらぞろいですう」

さすがに呆れて溜息を付くが、あんな闘いを見せられては仕方もないだろう。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

パンパンと手を叩く織斑先生。

この手を叩くという行為、意志を切り替えるために多用してきたのだろう。

周りでクスクスと笑っていた生徒らの雰囲気が変わる。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、ファブリカ、リッケンだな。では六人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

織斑先生が言い終わるや否や、織斑一夏とデュノアに向かって2クラス分の女子が殺到する。

数名、私とドロテアの方にも来たが、二人の人気は凄まじいものだ。

変わりにオルコット、凰、ボーデヴィツヒの方には誰も行っていない。
当然だろう。

オルコットと凰はあんな失態を演じたのだ。

ボーデヴィツヒに至っては絡みにくいのだろう。

喋らないし。

「マリーチさん、よろしくお願ひします」

「はい。よろしくですう」

微笑みを作り対応する。

面倒な事だ。

ドロテアの方は……。

Side ドロテア＝リッケン

私の前には本音さんと数名の1組生徒。

マリーチ様の方にも数名の方が行っている。

「やほ〜。ドロテア、よろしくね〜」

「ドロテアさん、よろしくお願ひします」

「はい。こちらこそ、よろしくお願ひします」

集まった人と挨拶を交わすのだが。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！
順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背
負ってグラウンド百周させるからな！」

織斑様とデュノア様に人が流れすぎた結果だろう。

織斑先生は非常にめんどくさそうな顔をしていた。

そして、織斑先生の言葉により、蜘蛛の子を散らすように移動が始まる。

「ありやりや〜。ドロテー、またね〜」

本音さんは私のグループではない様だ。

オルコット様の方へ向かって歩いて行く。

グループ分けに要した時間は2分ほど。

最初からこうしていれば良かったのではないだろうか？

私は集まった方々の顔を記憶し、一礼して口を開く。

「皆様、よろしく願います」

「「「よ、よろしく願います」」」

私の挨拶と一礼につられる様にして集まった方々も一礼しながら言う。

緊張しているのがよく分かった。

「そんなに緊張せずとも大丈夫ですよ」

マリーチ様をマネてにつこりと微笑みを浮べる。

なぜか皆さん頬を紅く染めたが、なぜだろうか？

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。打鉄が四機、リヴァイヴが三機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

どうやらどちらかを取りに行く必要があるらしい。

マリーチ様は迷わずに打鉄を選んでいた。

別にリヴァイヴが嫌いというワケではなく、デュノア社の社長が大嫌いなだけらしい。

私は会った事がないので、デュノア社の社長という方がどういう人物かは知らないけれど。

「では、私たちはリヴァイヴにしましょう。取って来ますね」

「……はい!」「……」

皆さんやる気がある。

誰かに教えるというのは初めてだけど、頑張らなければならないと思った。

アーテイルを解除し、リヴァイヴを操縦しながら班の場所に戻った時、山田先生の声が聞える。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってください。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISのオープンチャンネルで各班長に連絡を行っているようだ。

さて、こちらにも実習を開始しなければならぬが、一つ聞いておく必要がある。

「皆様は、ISに何度か乗った事はおありでしょうか?」

「……授業で数回だけあります」「……」

「承知しました。では、始めましょう」

「「はい！」」

授業で数回という事は、歩行も満足に出来ない。限られた時間の中で出来るだけ丁寧な教えなければ。

私はリヴァイヴをしゃがませ、アーテイルを装着する。

マリーチ様のマリーセレスにも言えることだが、アーテイルとマリーセレスには脚部ユニットと腕部ユニットが存在していない。

そのため、大きさだけ見るとリヴァイヴの方が圧倒的に大きく映る。

ちなみに、マリーチ様はマリーセレスを起動させてはいるが擬態したままで行うつもりらしく。

全くISが見えない。

ISスーツのまま空中に浮かび、不可視の手で持って指導している。

「よろしく願います！」

「はい、よろしく願いますね」

一人目の方が元気な声をあげた。

そして、リヴァイヴを起動、装着する。

ここまでは問題はなかったが、歩行に若干だが難があった。

「少し重心が左側に傾いていますね」

「う、どうかな？」

重心を少しだけ右に傾ける。

「転びそうになったところを私がサポートし、予定していた位置まで歩ききった。」

「ここまで。お疲れ様でした」

「有難う御座いました」

一人目の方が終わり、そのまま降りようとする。

「待ってください」

「？」

一人目の方は不思議そうな表情で私を見た。
でも、このまま降りたら次の方が円滑に練習を行うことが出来ない。

「ISをしゃがませなければ、次の人がコックピットに乗る事が出来なくなってしまう」

「あ！ そっか…。ごめんなさい」

私の言葉でハツとした表情となった一人目の方は謝罪を述べ、リヴァイヴをしゃがませる。

「いえ、次からは気をつけてくださいね」

私は微笑みを向けそう言った後。

二人目の方の練習を開始した。

「では、次の方」

実習の時間は概ね成功したといえる。

ラウラ隊長は全く教える気が無かったのか、途中から山田先生が指導していたけれど。

私の方は班の方々に感謝された。

「ドローテアさんって教えるの上手いね」

「次もよろしくね」

「ドローテアさん、ありがとう」

等々。

班の方々から感謝を述べられるのは嬉しかった。

これならきつと、マリーチ様も褒めてくれるだろう。

また、頭を撫でてくれるかも知れない。

そんな期待を胸に授業の終わりを確認次第、マリーチ様の元へと向かった。

Ver.13 (前書き)

修正

ナヴァグラハの展開個数

8 9

マリーチが持つ目の個数

9 10

理由

ナヴァグラハの武器個数を間違えていました。

緒方 紅夜 様に感謝

午前中の実習が終わり、いま私はドロテアと一緒に食堂に来ている。

普段から会社の食堂で食事を取ってはいるが、あそこは食堂というよりもレストランだ。

なので、どうせなので一般的な食堂の料理を楽しもうと思ってきたワケだが。

「思いのほかに人が多いですう」

「デュノア様を見に来たのではないのでしょうか？」

ドロテアが言う。

その通りだろうとは思いますが、残念な事に食堂にデュノアは来ていないらしい。

「肝心のデュノアはいないですう。でもまあ、キャツキャツキヤと騒がれるのはウザイので丁度良いですう」

こういった食券を買って食べるタイプの食堂は初めてだ。

しかも並んでいる。

非常にめんどくさい。

「マリーチ様。あちらの席が空いていますので、ここは私にお任せください」

「任せるですう。適当な物で良いですう」

「承知しました」

食券をドロテアに任せ、私は端の方の開いている席に座った。それなりに人は多いが、完全に席が埋ったワケではない。いや、食堂自体がかなり大きな作りになっているのだろう。1年生から3年生まで、全学年の生徒らが使用する食堂だ。しかも、IS学園には様々な国の少女らがいる。ならばこそ、多種多様な食文化にあわせるため、食堂を大きく設計したのだろう。

「学生か……。そういえば、マスターも学生だった頃はこんな感じだったんですかあ？」

いまは亡きマスターの姿を思い浮かべ、一人呟く。
誰にも聞えないだろう。

私の呟きは無数の雑音の中に紛れ消えて行く。

『マリーチは何が食べたい？』

『神姫は食べ物なんて食べれないですう』

『あ、そっか……。悪い』

『気にしなくても良いですう。でも、もしも食べれるならアレが食べたいですう』

『ああ、コレな。コレはアイスクリームって言うんだ』

『そ、そんなこと知ってるですう』

懐かしい事を思い出してしまった。
らしくない。

「あの…。マリーチ様？ どうなさったんですか？」

ドロテアの声が聞える。

その声色には困惑が混ざっていた。

「ちょっと目にゴミが入っただけですう」

私は目を擦り、ドロテアが持ってきた食べ物を食べ始める。

「日替わり定食というものが在りましたので、そちらに致しました。」

これは日替わり定食というらしい。

まあ、食べねなくもないから良いだろう。

これが庶民の味というヤツなのかどうかは知らないが、マスターは学生時代にこういうものを食べていたのだろうかと思うと。

なぜか、美味しく感じる。

O.P.F社長の娘として生を受けてから、食べ物に困った事はなかったし、常に最高級の物を使った食べ物しか食べて来なかった。それに比べると、あんまり美味しくはない。

なのに、マスターの顔を思い浮かべるだけで美味しくなるのは何でなんだろうか？

私は食事の時間。

マスターの事ばかり考えてしまって涙が出そうになったが。

ドロテアは何も聞かず、普段通りに接してくれた。

恐怖を与えるのは、やめにしてやるつもりだ。

Side ドロテア・リッケン

夜になった。

昼食の時間、突然マリーチ様が泣き出したのには驚いたけど平気かな？

ロレーナさんから教えてもらった秘密のだけど、マリーチ様はどこかで大切な人を失ってしまったらしい。

なにを切欠にしているか分からないけれど、涙を流す事があるそう。

今回のがソレだったのだろうと思う。

午後の授業は普段通りのマリーチ様に戻っていた。

大浴場を使うときも普段通りだった。

夕食の時は、平然とした様子でオルコット様と凰様と会話なさっていたし…。

もう、大丈夫なのだろうけど…。

そんな事を考えながら寮の廊下を歩く。

制服の発注確認をしていた為、マリーチ様より少し遅れて寮部屋に戻る事になったのだ。

そして、部屋の扉を開けて中に入ると。

「マリーチ様。そちらの物体は……？」

マリーチ様が不可思議な黒い物体を宙に浮かべていた。

「コレですかあ？ 名称はナヴァグラハ。ISのビット兵器ですう」
ビット兵器。

基本的に全方位からのオールレンジ攻撃が可能な自律兵器あるいは遠隔操作兵器の事。

たしか、オルコット様のブルー・ティアーズもビット兵器を採用しており、そのビット兵器の名前が直接ISの名前になったモノだと資料に書いてあった様な気がする。

しかし、重要なのはソコじゃない。

「あの、さすがに寮内で起動するのは不味いんじゃないでしょうか？」

そう、いかにIS学園と言えども、どこでもISを展開しても良いわけではない。

指定された場所。

例えば、グラウンドとかアリーナとか。

それら以外でのIS起動は基本的に厳禁であり、罰則すら在るほどだ。

「問題ないですう。コレにも擬態機能を付け、瞬時に消す事が出来るから問題ないですう」

自慢するように言うマリーチ様。

バレなければ良い。という思考はマリーチ様の基本行動の一部なのかもしれない。

「しかもお、コレには超高感度ハイパーセンサーが個別に一つ取り

付けられてるですう。1セットで9基が基本のナヴァグラハ。なにも武器としてだけ使うのが脳じゃないですう」

武器にもなるし、目にもなる。

マリーセレスのハイパーセンサーにナヴァグラハに搭載された超高感度ハイパーセンサー。

簡単に考えて、マリーチ様は合計10つの目を持つ事になる。でも、それは……。

「脳に負担がかかるのでは？」

9箇所から同時に様々な映像が脳に投影される事になるはずだ。それらを統括する事など、私のバロールを持ってしても不可能。

「もちろん、考えてあるですう。マリーセレスに処理させて別枠の画面として表示するように設定してあるですう。前後上下右左斜めと様々なところからISが解体されるサマを見れるなんて、快感ですう」

うつとりした表情をされるマリーチ様。

その解体されるISに心の中で合掌しつつ、対象が私にならない事を祈る。

怒らせたら面白半分で解体されかねないから。

そこで、私はふと時計を見た。

時計の針は、10時を刺している。

「マリーチ様、そろそろ消灯時間かと」

「はあ、もうそんな時間ですかぁ？ まあ良いですう。今日は疲れてるから寝るですう」

そういつてマリーチ様はなぜかマリーセレスを部分起動させ、アーク・E・トウージスでベッドをくっ付ける。
なぜ？

「あの」

「ドローテア。お前は今日から3年間、夜は抱き枕ですう。□答えは許さない。いいな？」

最後の方のマリーチ様の声は、かなり怖かった。

ドスの効いた声というヤツは、ああいう声の事なのかもしれない。

「……。はい」

さっさとパジャマに着替え、ベッドに入る。
私のパジャマはいたって普通のパジャマだ。

マリーチ様はシルクキャミソールという薄っぺらい布みたいなのを一枚。

なんだか寒そうだ。

だから、抱き枕が必要なのかもしれぬ。

「寝るですう。おやすみなさいですう」

「はい。おやすみなさい」

こうして、私は3年間の抱き枕代わりを命じられベッドに入る。

マリーチ様は私に抱きつくとすぐに寝てしまった。

呼吸音などから察するに、本当にグッスリと寝ている。

物凄い力で抱きつかれるわけでもなく、ふんわりとした優しい力で私に抱きつくマリーチ様。

マリーチ様のぬくもりを感じつつ、私も眠りに付いた。

その夜は、なんだかフワフワした不思議な夢を見た様な気がする。

Ver.14 (前書き)

修正

マリーチの台詞

「あらかた、そのISも」 「おおかた、そのISも」

理由

誤字

小説好き 様に感謝

修正

マリーチ視点の一夏の行動

分かったのは分かっていないのか、一夏は頷く

分かったのか分かっていないのか、一夏は一応頷く

理由

?は か? 誤字

?一応? 追加

ストラス 様に感謝

もにゅもにゅと柔らかい物体を触りながら、1日の出来事を考える。

そこでふと、廊下を歩いている時に小耳に挟んだ情報を思い出した。

「一夏君とシャルル君って放課後に訓練するらしいよ」

「え、ほんと！」

「見学しに行かなきゃ！」

という様な内容。

私も参加させてもらう事にしようか。

ナヴァグラハでのシューティングゲームならば、そこそこ良い訓練になるだろうと思う。

「う……。んんっ、んっ」

しかし……。

これが、7の差か。

私は結局、ドローテアが目覚めるまで妬ましい物体を揉みつづけた。

そして、数日。

ISがある為か、平凡とは少し違うような学園生活だが、ISが

関わらない場所は概ね普通の女子校みたいな感じなのだろう。

数日の間にオルコットに近寄り、土曜日の訓練に同行させてもらっているワケだ。

土曜日は午前中が理論学習、午後がアリーナ全解放の自由時間となっている。

しかし。

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

一夏にはデュノアがベツタリだ。

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

デュノアにこつ酷くやられた後に「一応わかっているつもり」という言葉が出るなんて、やはりマスターとは少し違う。

マスターならば「まだまだか……。なあ、少し練習に付き合ってくれないか？」とか何とか言っつて、他のマスター相手に練習を始めるのだけど。

仕方ない、少し助言をしてやるか。

「？一応？？つもり？じゃ、ダメですう。いまの一夏さんは、説明書を見てその内容を知っているだけの状態ですう。瞬時加速も直線的 and 乱用のしすぎで軌道予測が楽々ですう」

「そうだね。反応できなくても軌道予測で攻撃で来ちゃうし。あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ」

「空気抵抗、圧力、摩擦、その他諸々が重なって機体に負荷が掛か

るとお、骨がポツキリ逝くですう」

私とデュノアは息ピッタリで一夏に助言をして行く。

なんだかんだと、このシャルル・デュノアは、私が見てきたデュノア社の人間とは比べ物にならないほど人間らしい。

このデュノアが社長になってくれれば、O・P・Fもデュノア社を潰そうなどとは考えない。

「……なるほど」

素直に頷く一夏。

ちなみに、デュノアは専用機であるラファール・リヴァイヴ・カスタム？で実際に相手をし、私は部位限定でナヴァグラハだけを呼び出し、間接的に相手をしている。

他のオルコット、篠ノ之、鳳たちが教える姿も見たことはあるが、アレは酷かった。

篠ノ之は擬音ばかり、鳳は感覚的だとぬかし、オルコットは角度やら何やらを指定している。

オルコットだけは教えるのが下手なだけで何が言いたいのかは分かるのだが、初心者向けの教え方じゃない。

他の二人はダメだ。

出直してきた方が良い。

「一夏様、誰しも最初からすべてが出来る訳では御座いません。ゆっくりと出来る様になれば良いかと」

ドロテアが一夏に声を掛ける。

そのドロテアの後ろで、こちらを恨めしそうな瞳で見ている三人がぶつくさと呟いているが、知った事ではない。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

デュノアの言う様に、白式には後付武装が存在していないのだ。

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「ワンオフ・アビリティーですう。一夏さんの白式には強力なワンオフ・アビリティーが発現してるですう。それが拡張領域を全て使ってるって考えるのが妥当ですう」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーっと、なんだっけ？」

私はデュノアと顔を合わせ苦笑いをする。

「言葉通り、唯一仕様の特殊能力だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力のこと」

Love30まで上げる事で使用可能になる専用EXレールアクションだと考えると分かりやすい。

あれもライドレシオンMAXの時にしか使用できないし、ワンオフ・アビリティーに少し似ている。

「普通は第二形態から発現するですう。でも、殆どの機体に発現する事がないですう。O・P・Fでも発現させた事があるのは、ローナのサイフォスBくらいなものですよ」

「ワンオフ・アビリティー以外の特殊能力を複数の人間が使える様にしたのが第三世代型ISだよ」

「第三世代型ISでワンオフ・アビリティーが発動したら良いなって、企業も国家も考えてるですう」

分かったのか分かっていないのか、一夏は一応頷く。

「なるほどな。それで白式の唯一仕様ってやつぱし？零落白夜？なのか？」

？零落白夜？。

聞くところによると、エネルギー性質のモノであればなんでも無効化し消滅させるらしい。

噂に名高いブリュンヒリデと同じワンオフ・アビリティー。

しかし、その特殊能力の代価は自らのシールドエネルギー、LPライフポイントを削り使用する諸刃の刃。

果たして使いこなせるか否か…。

そう考えている間にも一夏とデュノアの会話は続き、なにやら射撃武器の訓練をする様な話になっている。

「デュノア、私は少し考え事をするですう」

「あ、うん。わかったよ」

デュノアだけに一夏を任せ、私は思考に入った。

姉弟だからと言って、こつも都合よく同じワンオフ・アビリティーが発生するなどマズありえない。

あの白式には何らかの秘密が在ると見るべきだろう。
いや、もしかしたら…。

アーンヴァルmk2の様に二つのレールアクション、いやワンオフ・アビリティーを持ち得ている可能性だ。

何にせよ例外というものはある。

二つのワンオフ・アビリティーを使用するとするならば、零落白夜は織斑千冬のワンオフ・アビリティー。

ならば、織斑一夏のワンオフ・アビリティーはなんだ？
純粋にまだ目覚めていないと考えるのが普通だろう。

二つ目の力が在るとするならば、目覚めるのは第二形態となった時？

いや、真の意味で。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナが騒がしくなる。

私はやむ終えず思考の海から顔をあげた。

「チッ、勘違い女がウゼえですう」

こちらを見下すように見るボーデヴィック。

視線は一夏に向けられている。

「おい」

ISの開放回線で声を掛けてくる。

ドロテアはソワソワしているが、気にする事ではないだろう。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

戦闘狂か…。

戦闘経験値を得るのには丁度良いが、いまはまだ早い。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくとも私にはある」

面倒な女だ。

少し私の戦い方を見せておくのも勉強になるだろう。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　貴様の存在を認めない」

一瞬だけ辛そうな顔をする一夏。

だが、それでも一夏に戦う気はないらしい。

「また今度な」

「ふん。ならば　戦わざるを得ないようにしてやる！」

そう言うや否や。

ISを戦闘状態へシフトし、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「ぬるいですう」

私はソレをアーク・E・トウージスで受け止める。

威力が高かったためか、擬態が剥がれ一瞬だけ機械触手がその姿を現した。

その黒い触手の一本はうねりをあげ、放たれた実弾を意図も容易く握りつぶす。

「おおかた、そのISも我が社の強化型ISを解析し作り上げた発展形に過ぎないですう。それになクソ虫、ためエはドロテアを出来損ないって言ったよなあ？ 虫ケラの分際でウゼえんだよ」

周りの生徒と一夏、デユノアにおバカさん人組みがギョツとした表情で私を見る。

ドロテアはなんだか感動しているようだ。

「貴様……」

計5つの触手パーツで構成されたアーク・E・トウージスが姿を表し、うねうねと動き出した。

一見ランダムに動いている様に見えるが、すべて私の意志で動く様に造られている。

「綺麗なスクラップにしてあげるですう」

「ぬかせ！」

私は何処までも虫ケラを見下したような表情を浮べる。

とはいえ虫ケラも代表候補に選ばれるだけの實力はあるのだから、油断をする事は出来ない。

Ver. 15 (前書き)

報告

風邪をひきました。

Ver. 16が1日ほど遅れそうです。

なにか変わりに適当なもの書くかも知れません。

修正

誤字脱字多数

Side ドロテア＝リツケン

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナのスピーカーから教師と思われる人の声が聞えてくる。
誰かが担当教師を呼んだのかも知れない。

「チツ、見逃してやるですう」

「ふん。今日は引こう」

興が削がれたのか、マリーチ様もラウラ隊長もあっさりとISSを量子化する。

マリーチ様は普段通りの微笑みを浮かべ、一夏様へ近づいて行き、ラウラ隊長はアリーナゲートへと去って行った。

「一夏さん、大丈夫ですう？」

「あ、ああ。助かったよ」

微妙に一夏様が引いている様な気がする。
無理もない。

いまのマリーチ様は先ほどまでのマリーチ様とは異なり、普段通りの優しい微笑みを浮かべている。

そのギャップはあまりにも……。慣れていない人には衝撃を与え

る事だろう。

それに、微妙に機嫌が悪いみたいだ。

「きよ、今日はもうあがるっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしさ」

「お、おう。そうだな」

デュノア様も引いてる。

オルコット様、篠ノ之様、凰様の三名も引いていた。

周りで見ていた生徒の方々からは恐怖に近い表情が伺える。

一夏様とデュノア様は着替える為に更衣室へと向かう。

オルコット様、篠之乃様、凰様もISSーツを着ていたためか、そそくさと更衣室へと向かった。

「マリーチ様。えっと、その…。怒っていらっしやるのですか？」

「別に怒ってないですう。ただ」

「ただ？」

マリーチ様そのまま歩みを進め、私の横を通り過ぎる時に呟く。

「次は、あの虫ケラを綺麗なスクラップにしてやるですう」

ゾクツとした。

身体が震える。

心が恐怖に縛られ、一步も動く事が出来ない。

「……」

私が立ち止まっている間にマリーチ様は歩いて行ってしまった。しかし、追いかける勇氣は出ない。

下手に追いかけると八つ当たりされるかもしれないからだ。

「はあ……。マリーチ様のお怒りが早めに鎮まることを祈るしかないよね」

自然と肩が落ちてしまう。

私は溜息を吐きながら1年生寮へと戻る事にした。

1年生寮。

トボトボと寮の廊下を歩いていると……。

「あれ？ ドロテーアさん、どうしたの？」

「なんか落ち込んでるみたいだけど？」

私に話しかけてくる生徒がいた。

確か名前は、山田妙子さんと夕暮有紀さん。

この二人は実習の時、私の班にいた方だ。

「いえ、大丈夫です」

「とてもじゃないけど、大丈夫そうには見えないよ？」

「うんうん。なんか顔色も悪いし」

二人とも心配そうな表情で私を見る。
それほどまでに私の顔色が悪いのだろうか？

「話すだけでも少しは気分がまぎれるよ？」

「そうそう。私たちだとソレくらいしか出来ないけどね」

二つの優しい笑顔が私の瞳に映った。

私は…。

優しい二人に、少しだけ相談に乗ってもらうことにした。

食堂。

難しそうな顔をする二人。

「ふむ、アリーナでそんな事が起こってたのか」

「うーん。さすがに怒りっぱなしは無いと思うけどね」

私は二人にアリーナでの出来事を話した。

二人はISでの戦闘より、ISを整備する事を主にシフトしたらしく、整備に関する勉強をしていたらしい。

だからアリーナでの出来事を目撃しなかったそうさだ。

「怒った状態のマリーチ様は…。とにかく怖いんです」

長く話していた為か、この二人が相手だと素の口調に戻ってしま
う。

丁寧な口調というのも以外に疲れるし、息抜きになって助かる。

「そんなに怖いんだ」

「普段すごく優しいそうだもんね」

私の言葉に頷く二人。

やはり、怒っている時のマリーチ様を知らぬ状態では、あの恐ろしさは分からない。

逆に言えば、見てしまえば最後。

心の弱い人ではマリーチ様に逆らえなくなってしまうかねない。

私の場合は短期間とはいえ、あの怒りに触れていたから震えたり、落ち込んだりするだけですんでいるけれど。

「私も怒っていない時のマリーチ様はすごく優しく大好きなのですが……」

どうやって怒りを静めるか、それが問題である。

「……はあ……」

三人で溜息を付く。

ただ一つのお題。怒っているマリーチ様の怒りを鎮める方法が中々思いつかないのだ。

「ケーキセットとかどうかかな？」

「お嬢様だから宝石とか？」

「どうでしょうか？ 私もマリーチ様の好きな物って知らなくて」

三人で頭を抱える。
どうしたものか？

結局、なにか良い案はでなかった。しかし、私を含め妙子さんと有紀さんの三人で就寝前に食堂で開くこの話し合いは日課となる。後に会議として有名となり、様々な人の悩み相談の場へとなつて行く事になるのだが、当時の私たちは知るよしもない。

マリーチ and ドロテアの寮部屋。

なんだか色々と忙しかった一日だけれど、その一日の終わりには私を抱き枕代わりに眠るマリーチ様の寝顔があった。

無論、食堂から戻り次第シャワーを浴び、強制的に抱き枕にされる私の恐怖もあつたワケだけれど。

この可愛らしくも優しい寝顔を見るためならば、多少の苦難は些細な事だろう。

「おやすみなさい。マリーチ様」

私は小さな声でそう囁き、眠りについた。

Ver. 15 (後書き)

マリーチの性格は、ヤンデレ(むしろサツデレ)殺す気満々。しかし、惚れると蝶(誤字ではない)デレる(を比率にすると9:1くらいだと思う)。

この1が発動するとどうなるの？
逆に完全に病んでしまったら、一夏殺されてバッドエンド直行なのかもしれない。

Ver.000(前書き)

デモンベインライトノベル軍神強襲とセラフィックフェザー(漫画)の影響を受けて書いてみた。
セラフィックフェザー楽しい。

ソレには名が無かった。

だが、ソレは自らの役目を確信し、自らの行つべき事柄を知っている。

遠い昔、ソレはとある男を襲つて役目を負っていた。

だが、その男は在ろう事か複製品へと変わったソレを自らの仲間としたのだ。

男が死んだとき、ソレは誓う。

三度自らに姿形が与えられたのならば、男の為に死のうと。

なんの因果か、ソレは新たな姿を与えられ、新たな世界で目を覚ました。

そこは、ISという兵器がある世界。

主に似た姿を持つ男を尾行し、ソレはIS学園へと辿り着く。

そこで…。

「!？」

「な、なんだ？ 何が起こって!？」

突如現れた所属不明のIS。

そして。

「な!？ アンタいったい？」

主に似た男を守るため、存在すらしない黒染めの武装を纏った人型が現れる。

「うづうううきゃあああああつ!!」

黒染めのソレは、なんの躊躇も容赦も無く所属不明ISを破壊した。

そして…。

「織斑先生これは…!!」

「自立型のISだと？　だが、なぜコイツは一夏を守った？」

ソレはIS学園の地下で眠りに付く。
二度目に目覚める時は……。

「私と戦え！」

「また今度な」

「ふん。ならば　戦わざるを得ないよつに……!!」

黒きISの前に立ちふさがる黒染めの人形。

「な、おまえ!?!」

「うづううう……」

黒と黒は、唸り上げ静止する。

鈍色の乙女が目覚めた時、ソレはアリーナの地面をぶち抜いて現れた。

「あああああつー!!」

そして、その偽りの刃を自らの体で持って受け止める。

「おまえ……」

「ううう」

「……。ありがとよ！ さあ、覚悟しやがれ！ 偽者野郎！」

少女の中にソレの思考が流れ込む。

『なんだ？ これは？』

《マスター、マスター、マスター、私、マスター、マスター、マスター、守る、マスター守る》

それは、意味不明な言葉の羅列。

しかし、一つだけ少女にも理解できるものがあった。

《私は守る。この身を犠牲としたとしても守る。偽りの私に生を与

えたくれたマスター。私からの片思い》

『……。これは』

《お前が羨ましい》

『私が羨ましい？』

《お前は口が利ける。私は口が利けない。マスターはお前を守ると言った。だが、私はプログラムに過ぎない》

『……………』

《マスターと共に生きられるお前が羨ましい。お前は、私の分までマスターに甘えても良いと思う》

『私が？ 甘える』

《……………》

『ま、まで！ お前の名は？』

《……………。私の名は》

少女は知る。

黒塗りの人形の思いを。

そして、自らの仲に芽生えた一夏への気持ちを……………。

「お、お前は私の嫁にする！！ 決定事項だ！！ アイツも言って

いた甘えても良いと、故に異論は認めん!!」

「よ、嫁？ 婿じゃなくて？ ってアイツで誰だよ？」

次に黒塗りが目覚めたのは、海の上で戦う主の危機を知った時。少年が少女を庇い、瀕死の重症を追う寸前。ソレは現れた。

「うづうううきゃあああああつ!!」

「La…」

意志持つ人形と意志奪われし人形は戦い始める。それは、自らの存在意義を確かめる為の戦い。

「くつ、新手か!？」

「また、助けてくれるのか？」

「一夏？ 何を言っている？」

「そうか。分かった。幕、一旦退くぞ」

「一夏？」

「早く！ 俺たち二人じゃ勝てない」

白と紅は戦場から退いて行く。
仲間を引きつれ、黒と共に戦う為に。

だが、やはり。

少年と少女たちは間に合わなかった。

「アレは、セカンドシフト!!」

第二形態となった意志奪われし人形の一撃は、意志持つ人形の胸を貫く。

力なく落下するソレを抱きとめたのは、少年だった。

「しつかりしろ。いま、すぐに……!!? お前、コレは!?!」

少年の目に飛び込んできたのは、機械仕掛けの身体。

「あああ」

「な、ダメだ! ?死ぬな!?!」

意志持つ人形は感動を覚えていた。

機械仕掛けの自分に向かって「死ぬな」と言ってくれる少年に対して。

だからこそ、ソレは自らを託そうと考えた。

意志ある人形は少年に抱きつき、白式へと同化して行く。

白式に自らの戦い方、自らの経験、自らの技、自らの全てを明け渡す為に。

「な、一夏!」

「白式が第二形態へ!？」

人形は最後に言った。

『私は守れなかった。だから、償いにマスターに似ているあなたを守った。でも、あなたは私とは違う。あなたなら多くを守れる。だから、私を使つて』

少年は変化する白式の中で一人の少女と一人の騎士、そしてボロボロの黒いローブを纏った少女と対峙する。

『なぜ力を求める?』

「みんなを守る為に」

『そつか、なら行かなきゃね』

「ああ、みんなの元にな!」

『……………』

「いままで守ってくれてたんだろ? ありがとう。名前を聞いても良いかな?」

『……………。私の名は、雪羅』

意志ある人形は白式と一つとなり、少年と共に空を駆ける。

時がたち、少年と少女たちに更なる試練が訪れた時、第4世代型IS白式の左手、雪羅に青白い光が奔った。

それは白式という意志の奥、異なる世界より舞い降りた意志を持つ人形の軌跡。

人形、ミミックの雪羅が意志はソコで共に戦う。

少年の守るという意志と一つになり、少年が守ると決めた者たちを守る抜く為に。

Ver・000(後書き)

「うううううきやあああああつ!!」の音がハイリンの声(声優さん)だと知った時の驚きは凄まじかった。

そして、未だに私の手元には強化タイプが訪れない。
あと何体破壊すれば良い？

O・P・F | NETジャーナル 第四回

「それでは、第四回O・P・F | NETジャーナルを開始しますぞ。今回もジイや一人ですな」

「感想の返答だけですぞ。寂しいですな」

>蒼 龍一 様<

何故だろう、マリーチ嬢がマトモに褒めるのに違和感が・・・(汗) 毒舌だな〜(第3世代が第二世代にあしらわれている時点でしょうがないけど)

「ほほほお、きっとアメをあげているんでしょうな。マリーチお嬢様の毒舌は生まれつきですな」

>ストラス 様<

自由と言う名の混沌…マリーセレスは海洋生物だけでなく、神話関係も多少入ってるので納得ですね(^-^)

本当にマスターの神姫関係の不遇っぷりはハンパなかったですね。

(最初の頃ハンデ戦に何回泣かされたか(T|T))

ドロテーア嬢が後で受けるかもしれないお仕置きにもwkkk

こんなに更新速度が早くて後半持つのか心配しながらも、次回の更新も楽しみに待ってます()

一夏の特訓にお嬢は参加するののか？

ツガル型の出番はいつ頃になるのか？

「クトウルフですな。いやはや、なにやらアファ…ゴホッ、ゴホッ、名も無き武装神姫殿はそれらも少し関わらせるようですな。ああ、ジイやも久しぶりにお仕置きされたいですぞ！」

「更新速度に関しては、ソレと異なり切る所は切る用にした結果の速度らしいですな。質問の二つに関してはVer16 18までお楽しみで良いですか？」

>蒼 龍一 様<

不可視の手ってわかりづらい気が・・・(汗)

「マジメに教える気がないんでしょうなあ。困ったものですよ」

>ストラス <

お嬢の出番が食われかけてる!?

学園ゆえに一夏が関わらない事には、おとなしくしているのかな？
まあ、まだ転校1日目なのでこれから…

「マリーチお嬢様は以外に慎重ですからな。回りの動きを見ているんでしょう」

>緒方 紅夜 様<

しかし、バトルロンドで命中マイナス武器だったやつですか。カッ
コよかったんで覚えています。

ハイパーセンサーで命中は上がったのか、そのままなのか。

たしか投げる武器だったんで、そのままっすか？

それとも光学・粒子兵器？

そしてドロテの調教終了フラグ
やったねドロちゃん！

しかしそれでもあんまり変わらなかった命令時の寒気www

なんか百合くさいルートが量子展開しかけてますな。

「仕様はバトルマスターズで行く予定ですよ。分類はビット兵器ですよ。取り囲んで9方向から攻撃を行う装備ですよ」

「命令時の寒気が快楽に変わったら、大変な事になりそうですね。百合の予定は無いようですよ。ドロテア嬢の方は知りませんがのう」

（その内、一夏に嫉妬するドロちゃん書きたい。と窓ガラスに血文字が現れた）

> kusarri 様<

更新お疲れさまです

今回出てきたナヴァグラハは戦闘に使うよりも諜報用として使いそうですね、これで一夏のプライベートを覗き放題ですね

なんだかシャルのバレフラグが建った気がします、マリーチ様の事だからこれを材料にデュノア社を潰しそうですね

もしくはシャルをいただきメイド三号か執事二号の誕生でしょうか
暴走しましたすみません
次回も頑張ってください

「攻撃ばかりではバランスが悪いですからな。シャルル様の扱いは微妙ですよ。デュノア社の社長はソレくらいで揺らぐ人物とは思えませんぞ」

>ストラス 様<

ドロテア嬢の抱き枕…なんと羨まっゲフンゲフン

それは置いといてナヴァグラハの擬態も見破りそんな人が約一名い
そうなので過信は禁物かと…(^-^-^);

誤字と言うかちょっと分からない文章が一ヶ所

分かったの”は”分かっていないのか、一夏は頷く。

ここは「分かったの”か”」が妥当かと、後このままでは文章も
変なままなので「一夏は”一応”頷く。」と付けたほうが良いと思
います

「おおお！ ストラス様とは気が合いそうですねア！ かの有名な
ブリュンデヒルデならば気がつくかも知れませんが。マリーチお嬢
様もまだまだ未熟と言ったところででしょうか。最後に指摘感謝致し
ます」

>小説好き 様<

>あらかた、そのISも我が社の強化型ISを解析し作り上げた発
展形に過ぎないです。

「あらかた」じゃなくて「おおかた」では？

「誤字報告感謝ですぞ」

>骨皮 筋男 様<

初めまして。骨皮です

直線的云々を聞いていると、一夏のレールアクションが出来そうで
すね

だとすると、小剣と大剣。sゲフンゲフンはランチャーかライフル

あたりかな？

「レールアクション時の速度は、瞬時加速並と考えれば再現できそうですね。ただ、ルート変更の時に身体を痛めそうな欠点がありますのう。ワンオフ・アビリティーとは異なり、技術として登場するかもしれませんが」

>蒼 龍一 様<

ラウラ・・・なんとという死亡フラグを・・・(汗)
グッドエンドをお願いします(土下座)

「大丈夫ですぞ。まだあの程度ならば死亡フラグは立ちませんでな。エンドに関しては、ジイからは何もいえませんのう」

「さて、今回はこんな感じですか？ 返信が遅れた事、ココでお詫び致します。次回のジャーナルはコメントが4〜5溜まり次第、書くツモリですぞ」

「しかし、このセバスチャン一人では寂しいですな。では、？O.P.F|NETジャーナル？はOvest Pozzo Fabb
rica(オヴェスト ポッツォ ファブリカ) とA/cute
Dynamixアキュート・ダイナミックスの提供でお送りしましたぞ」

O・P・F | NETジャーナル 第四回（後書き）

全然関係ないけれど、久々にMH3rdの終焉を喰らうものをやった。

なんとか、5分針でクリア（たぶん、8分くらい）

装備一覧

覇砲ユプカムトルム、増弾のピアス、シルバーソル（頭以外）

発動スキル

装弾数UP、弱点特化、通常弾UP、ブレ抑制+1、攻撃力UP【

小】

Ver.16 (前書き)

ペルソナ4アニメが面白いです

そして、武装神姫mk2のクリア後に戦えるガイア……。

貴様！ DL武器外せよー！ フリーズするじゃないかー！

武装紳士、武装淑女の方々は注意してください。

修正

マリーチの台詞

「私色の染め様かと」 「私色に染め様かと」

理由

誤字

ストラス 様に感謝

確信のない噂が学園内に満ち溢れていた。
それは、廊下を歩くだけで耳に入ってくる。

色々と脚色されていそうなソレを楽しそうに話す生徒の姿は、私の瞳には滑稽に映った。

しかも、一部ではソレを本当に信じている生徒まで出ている始末。
なんとというか、哀れだ。

「ドロテア」

「はい」

「この噂の出所は何処ですか？」

後ろを歩くドロテアに問いかける。

「それが、どうも篠ノ之さまの告白を偶然聞いた方が勘違いをし、
ココまでの形になった様です」

「……………。哀れです」

篠ノ之といえば、一夏と最も長い付き合いでありながら告白する機会を逃し続け、やっとの思いで告白してみればこの騒ぎ。

しかも、内容には尾ひれが付き、自らとの交際ではなく優勝者との交際に置き換わるなんて。

「恋愛死兆星の元にも生まれたんですかねえ？」

「おそらく、織斑様自身も付き合つたというのは買物に付き合つ程度の感覚だったかと思われます」

篠ノ之本人が聞いたら泣き出しかねない事をサラリと言つてドローア。

まあ、事実だろうし何とも言えない。

「この件は無視ですう。現状は一夏さんを鍛える事を優先するですう」

「承知いたしました」

そつだ。

こんな戯言に構う余裕が在るのならば、まだまだマスターには程遠い一夏をマスターに近づけなければ。

この世界にマスターはいない。

だが、マスターとソツクリの男はいる。

ならばだ。

私好みのマスターとして育て上げれば良いだけの話。

「マスターへの思いは変わらないですう。ま、死ぬまでに人間の恋愛を体験するのも良い経験ですう」

自然と微笑みが漏れる。

私好みのマスター、私だけのマスター、私が理想とする人物像を投影した男。

悪くないかもしれない。

放課後。

一日中、一夏をどうやって私色に染め様かと考え、早めに第三ア
リーナに来てみれば……。

バカ二人組みとゴミ虫が死闘を繰り広げていた。

「当れー！」

「こちらも行きますわ」

「はっ、ザコが群れた所で私に勝てると思うな！」

現状を鑑みるに、オルコットと嵐の二人ではボーデヴィツヒを倒
す事は不可能に近い。

その証拠に二人のISはもはやボロボロの状態になりかけている
が、ボーデヴィツヒのISは軽症だ。

「はあ、ドロテア。ここであの二人が死んだら一夏は悲しむです
う？」

「悲しむと思います。私が行って止めても良いでしょうか？」

ドロテアは握りこぶしを作り、ボーデヴィツヒを睨みつけ今に
も飛び出して行きそうだが、私の手前ソレが出来ないのだろう。

しかしまあ、いまのドロテアでは軽くあしらわれて終わりだ。

私は溜息を付き、無意味な戦いに割り込む事を決める。

隙あらば、ボーデヴィツヒの命を奪う為に……。

「ドロテア」

「はい」

「お前は待つてるですう。お前が怪我をするとふかふかの抱き枕がなくなるですう」

私はそう言つて、第三アリーナ内部へと向かう。
なんだかドロテアが惚けているが、気にする必要もない。

第三アリーナ内部に入ったとき、一番最初に聞えたのは耳障りな
ゴミ虫の声だった。

「終わりか？ ならば」

一瞬でマリーセレスを身に纏い、二振りのサーペンタインを手に
斬りかかる。

「私のターンですう。死ね！ むしけら！」

突然現れ、ボーデヴィツヒを首を狙つて斬りかかる私に呆然とす
る二人。

そして、斬りかかれた本人はギリギリの所で緊急回避をしてみ
せる。

「避けてんじゃねえよ！ クソ虫がア！」

「くっ！」

あれほど余裕ぶっていたとしても、少なからずダメージを負っているのだろっ。

サーペントインを避ける時の表情はかなり必死だった。

だが、続け様のエルヴァン・アクスでの一撃をAICで止められた事でボーデヴィツヒの顔に余裕が見え始める。

「ふっ、停止結界の前では無意味だ！」

「バカかお前？」

「なに？」

擬態させていたアーク・E・トウージスに見えるようにし、ボーデヴィツヒに向け口を開く。

しかし、よほど私は良い笑顔をしていたらしい。

口を開く瞬間、ボーデヴィツヒの表情に僅かながら本能的な恐怖を見ることが出来た。

「二人との戦いを見て分かったですう。お前、AICを一方向へしか展開できないですねえ。ならあ、これは停止できないですう？」

擬態を解いて姿を表したアーク・E・トウージス。

その機械触手の一本一本にはサーペントイン、イング・ペイカー、ハフ・グーフア、エルヴァン・アクスが無数にひしめき合っている。それら機械触手はボーデヴィツヒを取り囲むように展開されており、目の前のAICを解けば私が手に持つエルヴァン・アクスをまともに喰らい、このままAICを展開し続けると上下左右後からの一斉攻撃を喰らう事になるワケだが、ボーデヴィツヒのAICは一方向。

結局は5つの攻撃を喰らう。

私に懐に入られた時点でそもそも逃げ道なんて用意されちゃいない。

「はあ、普段余裕ぶってる分、その絶望に染まった顔は快感ですう。じゃあ、沢山悲鳴をあげると良いですう」

「おの…れ……」

そして何の躊躇いも無く、私は攻撃を開始した。

「うふふ。あつははははっ、気持ちいですう。ほらほら、さっさとどうにかしないとデッドゾーン突入ですう」

「ぐがあ！？ がはっ……」

全ての触手が同時に攻撃を行い、エルヴァン・アクスを握る手に力を込める。

AICに掛かる力を感じた事で、ポーデヴィツヒは目の前の私の攻撃を無意識に優先してしまった。

それは即ち、5つ触手の攻撃を全て喰らう事となり、アツという間にポロポロになって行く。

たった一瞬の出来事でオルロットや凰以上にポロポロになるポーデヴィツヒの表情ときたら何とも言えない快樂を私に与えてくれる。

とはいえ、全快の状態でサシの殺り合いとなっていたのならばこっちは行かなかっただろう。

多少とはいえ、ポーデヴィツヒにダメージを与えたオルロットと凰には感謝しなければならない。

「さーて、ゆっくり解体してやるですう」

動くことすら困難な状態になったボーデヴィツヒに向け、サーペ
ンタインを振り下ろしたのだが、その一撃は乱入者により阻まれた。

「ガキの相手はこれだから疲れる」

乱入者、それは。

「チツ、織斑先生が来たならやめるですう」

ISはもちろんこと、ISスーツすら纏っていないブリュンヒル
デがIS用接近ブレードを手に乱入してきたのだ。

いまの状態ならば或いは勝てるかもしれないが、一夏が見ている
手前なにかするワケにも行かない。

「この戦いの決着は、学年別トーナメントで付けてもらおうか」

ボロボロの状態で何とか立ち上がりながらボーデヴィツヒは言う。

「ゴホツ……。くっ、教官がそう仰るなら」

「別に逆らう気はないですう」

織斑先生は、私とボーデヴィツヒの顔を見比べると溜息を付いた。

「はあ、頭痛の種は一つで十分なんだが……。学年別トーナメント
まで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツと織斑先生が手を叩く、私はその音と共に振り返り、オル

コットと凰の方へ足をむけた。

二人は未だに呆然としていたが、私が近寄ると怯えすら隠さない。

「そんなに怯えなくて良いですう。とりあえず、保健室ですう。怪我してるですう」

「え？ あ、うん」

見事にシンクロし、私に答える二人。

とりあえず、私はオルコットと凰を立たせ保健室へと向かった。

Ver.16 (後書き)

強さ基準(現状での単体戦闘力)

番外：織斑千冬、ロレーナ⇨ベルトンチーニ

1位：ラウラ⇨ボーデヴィツヒ、マリーチ⇨オヴェスト⇨ポッツォ
⇨フアブリ

2位：シャルル⇨デュノア、ドロテア⇨リツケン

3位：セシリア⇨オルコット、凰鈴音

4位：織斑一夏

5位：篠ノ之箒(打鉄使用)

保健室。

私がボーデヴィツヒをマジで殺そうとしてから30分ほど経過していた。

目の前ではドロテアの治療を受け、大人しく椅子に座るオルコットと鳳がいるワケだが、二人とも私を怖がっている事がよく分かる。

しかしまあ、二人ともプライドだけは維持しているらしい。

「別に助けなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

このプライドも一夏とシャルルがいるから、強がったのことだろう。

ドロテアは二人の治療をしながら苦笑をしている。

「ハッキリ言うですう。私が乱入しなかったら私にやられたボーデヴィツヒさんみたいにボロボロになってたのは二人ですう。良いですかあ？」

「マリーチ様は戦いともなりませんと口も悪くなり、行動も凶悪になります。それは、貴女方を守るという気持ち故なのです。分かっていただけと幸いです」

ドロテアが言葉を付け加えたが、なんだか微妙にジイヤを思い出す台詞だ。

こういう時には、こう言えとでもジイヤに言われていたのだろう。

とりあえず、私は一夏とシャルルを放置した状態でオルコットと鳳の座る椅子の前へと移動した。そして、腕を組み睨みつける。

「「ひっ」」

二人は明らかに怯えの表情を見せるが、知った事ではない。これ以上この二人が物理的に傷つく事は、あまり面白くないのだ。

「二人とも良く聞くですう。何が原因で戦いを始めたかは知りませんが、情報のない相手と戦い。しかも、自らよりも力量が上である事など一目瞭然。オルコットさん、鳳さん、貴女方二人が傷つければ心を痛める人がいるですう。それなのに無謀な戦いを行うのは愚の骨頂！」

「でも、アイツは一夏の事を！」

「ですが、一夏さんの事を！」

必死な顔で反論してくる二人。

ああ、やっぱし。

一夏関連のことで挑発されて、勝てない喧嘩を買わされたワケか。

「黙れ」

「……」

「……」

二人を一喝し、完全に黙らせる。

あんなに近くで私を見てしまったのだから、二人の心は私への恐怖で当分は縛られたままだ。

「相手が軍人だという事は一目で分かるですう。確かに二人は代表候補として他のIS操縦者よりも高い水準でISを操れるですが、それでも恐らくは実戦経験すら持ち合わせるボーデヴィツヒさんの前では経験不足と言わざるおえないですう。しかも、連携が出来るならばいざ知らず。二人の連携のダメダメ具合は山田先生との戦いで明白にされてたですう。ボーデヴィツヒさんだってソレを理解したうで喧嘩を売ったハズですう。おそらく、貴女方をボコボコにすれば一夏さんが自らと戦うと判断したんですう」

そこで一旦話を区切り、一夏とシャルルの方を1度だけ見る。

最初の方は怯えていたのかもしれないが、正論を言ったことで二人とも私への恐怖は薄れている様だ。

私は、オルコットと嵐に近づき耳打ちをした。

「好いている人を貶されて怒る感情、私にも分かるですう」

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！」

「べべっ、別にわたくしはっ！」

二人に向けて「だ・ま・れ」という意味合いを込めた微笑みを送る。

「「……。はい、ごめんなさい」」

どうやら通じたようだ。

後ろの一夏はクエツションマークを浮かべ、シャルルとドロテー

アは苦笑している。

「もしも二人が大怪我を負ったら、一夏さんは悲しむですう。しかも、その原因が自分だと知れば、重荷を背負ってしまうかも知れないですう。その事を考えて耐えることも女には必要なのですう。分かったですう？」

コクコクと頷くオルコツトと鳳。
本当に分かっているのだろうか？

「とりあえず、経験を積むまでは上の相手とは戦ってはダメですう。力量を見極める眼がないというのならばあ、私が叩き込んであげますう」

微笑みながら言う。

最後の台詞を言った瞬間、二人はフルフルと首を横に振ったのが気に喰わないが、そんな感情を消し去るような地鳴りが聞えてきた。

ドドドドドドドドドドッ……！！

「な、なんだ？ 何の音だ？」

音がする方向を見る一夏。

その方向は、ちょうど保健室の扉がある場所なので廊下から聞えてきているのだろう。

「なんだか、近づいてきていないかな？」

「その様ですな」

シャルルに同意するドロテア。
そのやり取りから約1秒後ほどだろう。

ドカーン！ という音と共に保健室の扉が吹き飛ばす。
結構頑丈そうな扉だと思っただが、呆気ないほど簡単に吹き飛び、
扉の正面にある壁にぶち当たって止まった。

「織斑君！」

「デュノア君！」

入って来たのは数十名の女子だ。

そこそこ広く、ベッドが5つもある保健室いっぱいなのだから一
つの組の半分くらいの間人が雪崩れ込んで来たのだろう。

一夏とデュノアはアツという間に取り囲まれてしまった。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちよつと落ち着いて
うるさい。」

しかも、保健室といえば怪我人が治療を受け、安静にしている場
所だというのに小娘どもが！

「黙れ！ ここを何処だと思ってる!！」

一喝。

その瞬間に保健室は静まり返った。

織斑先生に怒られた時のような感じになっている。

「なにが合ったかは知らないですがあ、ここは保健室ですう。保健室は怪我人が安静にしなければならぬ場所ですう。ギャーギャー騒いで良い場所じゃない！」

なんだか今日は、かなり奮発している様な気がしてならない。というか疲れる。

「それで？ 何があったんですう？」

そう聞くと、怯えた表情で一人の生徒が？ 申込書？ を差し出してきた。

その内容はこうだ。

『 今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする』

締め切りも在るようなので、いち早く一夏かデュノアと組みたかったのだらう。

「はあ……。気持ちは分からないでもんですう。ですが、保健室に突っ込むとかあ、織斑先生が知ったらIS背負ってグラウンド50週くらいは余裕ですう」

怯えていた表情が一斉に青ざめた表情に変わった。

うん。私もIS背負ってグラウンド50週は無理だから気持ちは分かる。

「それで、織斑さんとデュノアさんはどうするんですう？」

放置しても可哀想なので確認を取っておく。

「えっと…」

「みんな悪い。俺はシャルルと組むからさ」

怯えと恐怖すらも掻き消し、考え始める数十名の女子たち。

「まあ、そういうことなら」

「他の女子と組まれるよりはいいし…」

「男子同士っていうのも絵になるし……ゴホッゴホッ」

そう言いながら撤退してゆく女子たち。

しかしまあ、私に怒られたためか戻る時は大人しく歩いて戻っていた。

Ver.17 (後書き)

武装神姫mk2のジュービジーが早く使いたい
収穫の季節の恐怖を思い出したい！

Ver・18(前書き)

修正

マリーチの思考

「デュノアがクソ社長」

「デュノアのクソ社長」

理由

誤字

緒方 紅夜 様に感謝

保健室から女子が居なくなつた途端、オルコットと凰が騒ぎ始める。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

二人は先ほどの大群が可愛いと思うほどの勢いで一夏に迫つた。

「あ、あたしと組なさいよ！ 幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

迫られ、肩を揺さぶられる一夏。

かなり困つた表情をしている。

前々から思つていた通り、一夏は朴念仁だ。

しかも、超を2乗しても足りないくらいの朴念仁のだが、一夏に惚れている方もなんだか攻め方が微妙な気がしてならない。

身体を使うというのは、学生ゆえに発想としてないのは分かる。

だが、なぜこつも猪突猛進な感じなのだろうか？

少し大人しくなり、日本にある大和撫子という言葉を体現したような攻め方をしても良いのではないか？

恋は盲目という言葉の本で見たことが在るが、ソレにしたって盲目になり過ぎだろう。

これは、元々私が武装神姫だからそう思うのだろうか？

自身の心はマスターに届いて欲しい。

だが、それでマスターが幸せであるのなら良いが、幸せでないのなら、私は自らの心を封じ接する事も厭わない。

彼女たちの考えと私の考えは異なってるのだから、彼女らは一夏の幸せを考えたりしているのだろうか？

自らの幸せのみを願っている様にしか見えない。

「ダメですう」

溜息を付き、呆れた顔を作りながら？やれやれ？と言った様な感じで首を振る。

なんだか一瞬だけオルコットと凰から敵意を感じたが、一睨みしたら大人しくなった。

「良いですかあ？一夏さんはデユノアさんと組むと先ほど言ったじゃないですかあ。私だって一夏さんと組みたいですう。でも、それだと先ほどの一夏の言葉が嘘になるですう。そうなればあ、先ほどの方々に一夏さんが囲まれるのは必然となるですう。それだけは阻止せねばならないですう。そこで、オルコットさんは私と凰さんはドロテアと組むのが最適ですう。オルコットさんは遠・中距離型、接近戦闘は苦手と見たですう。私は中・近距離型、遠距離も出来なくはないですがあ、パートナーとしては丁度良いですう。

凰さんは中・近距離型、私と同じですがあ、基本的に近距離タイプの傾向が強すぎですう。ドロテアは遠・中距離型なのでえ、凰さんの隙間を埋めるのには向いてるですう。本来ならば私とドロテアが組むのも最も良いパーティなのですがあ、オルコットさんと凰さんのコンビネーションのダメダメ具合は先ほど見たですう。みっちり鍛えてやるですう」

そして、満面の笑みをオルコットと凰に向ける。

凄く嫌そうな表情をされた。

一瞬で機械の触手が現れ、オルコットと凰の方に先端を向けてウネウネしている。

二人は逃げ出した。

保健室にある唯一の扉の前には優しい笑顔のドロテアが。

「申し訳ありません。マリーチ様の命令は絶対です」

ドロテアは笑顔で二人の顔の前に銃を突き出した。

二人は大人しくなった。

ゲームクリア！

経験値0、オルコットと凰を入手した！

「ということ、一夏さん。この2匹は私が預かるです」

「2匹って言うな！」

振り返り反論する二人。

しかし、後ろにドロテアが居るからなのだろうか微妙に言葉に覇気がない。

怯えてるのに何とか搾り出している感じだ。

「お、おう」

一夏とデユノアは若干引き気味だが、デユノアの方はそろそろ慣れてきたのだろう。

硬直時間が先程よりも短くなっている。

「あ、そういえば。なんで二人はボーデヴィツヒさんと戦ってたの

かな？」

不思議そうな表情をするデュノア。

「だけどわかる。あの表情の裏には？すでに分かっているデュノア？が存在している事が。」

「分かっているのに聞いているのだろう。」

「二人を応援しているのだろうが、いまの二人にソレを察する余裕とかは全く無いだろうに。」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「一夏の頭の上にはクエッションマークが浮かんでいるに違いないだろう。」

「？マークがよく分かる表情をしている。」

「ああ、もしかして一夏のことを」

「閃いたような顔をしていたが、一瞬だけ私にも近い笑みを浮かべるデュノアが見えた。」

「もしかしたらシャルル・デュノアは私と同類なのかもしれない。」

「いや、シャルロット・デュノアと言うべきかな。」

「フランス支部にいる第三世代型アークの操縦者であり支部長クトウグア、同じく第三世代型イーダの操縦者であり副支部長イクタアに調べてもらった所、シャルル・デュノアという存在が現れたのは一ヶ月前後らしい。」

「ということとは、その前には存在すらしていないのだ。」

そして、シャルル・デュノアが登場してからの一ヶ月。
一人の人物が消えている。

名は、シャルロット・デュノア。デュノアのクソ社長が妾に生ませた子供らしいが、最近まで放置していたとの事だ。
社を大きくするために呼び戻し、利用したのだろう。
相変わらずどこまでも腐った事をしてくれる。

「あああつ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですね！ まったくです！ おほほほほ」

デュノアとオルコット、嵐が戯れている間に私は一夏に近寄り話しかけた。

「一夏さん、一つ覚えておくですう」

「ん？ なんだ？」

「ボーデヴィツヒの真の狙いは一夏さんですう。気を引き締めて行くですう。零落白夜に頼る戦いだけは厳禁ですう」

ボーデヴィツヒの名が出たところで一瞬だけ険しい表情をする一夏。

だが、すぐに普段通りの表情に戻り力強く頷いた。

「ああ、わかってる」

そして、少しの間だけ私は一夏の隣でデュノアと戯れる2匹を見ていた。

やはり一夏はマスターではない。

しかし、マスターに限り無く近い？思い？を持ち合わせている。
ならば私は手を貸すべきだろう。

それが私、武装神姫マリーセレス型マリーチが出来る唯一の事柄。

マスター育成計画も悪くないが、この一夏がどこまでマスターに
近い男になれるか。

ソレを見るのも悪くない。

まあ、一夏をどうするかは計画は後々決めて行こう。

当面は、オルコットと凰を鍛える事に集中するですう。

Ver.19 (前書き)

修正

マリーチの思考

「ほどこの中にまで」 「ほどこの中にまで」
理由

誤変換

k u s a r i 様に感謝

黒い球体がとある一室を見ていた。

ソレは風景に溶け込み、一切の気配を放つ事はない。

そして、見聞きした情報を記録し、主の元へと戻って行く。

数週間後。

一夏、シャルル、セシリア、鈴、篝の特訓をしていたら、いつの間にか時は経過し学年別トーナメント当日。

実に早いものだ。

ちなみに特訓している間に全員とは名を呼び捨てにするほどの仲にまでなった。

一夏、シャルル、鈴、篝からはマリーと呼ばれるようになり、セシリアからはチーフと呼ばれる。

セシリアには、少しスパルタが過ぎたのだろう。だが、反省はしていない。

いまのセシリアの実力はドローアを少し下回る程度だが、全くといっても良い程できなかった接近戦闘もある程度こなせる様になった。

我が社のIS用ダブルナイフ？コート&コーシカ？を与えてみたところ、まだまだ完璧とは言えないが、使える程度の実力だ。

ブルー・ティアーズ（BT兵器）の方も動きを止めずに使用できるようになったようだ。集中力を割いているためか、他の武装での命中率は80%少しと言ったところだろう。

さて、いま私は暑苦しい更衣室にいる。

「ギョウギョウ詰めですう」

言葉通り、許容量オーバー状態の更衣室。

本来ならば、2箇所の更衣室でそれぞれの組の女子が着替えを行うわけだが、片方を男子に貸し出している為、一つの更衣室に1年全ての女子が集合している。

「超過密とでも言えば良いのだろうか？」

空調は効いているが、それでも暑いと感じてしまう。

「マリーチ様、お飲み物をお持ちしました」

ドロテアが気を利かせ、ポカリを持って来てくれる。

余談だが、私はアクエリ派でもポカリ派でもなく、ゲータレード派だ。

争うまでも無く結果など見えている。

「対戦相手の発表はまだですう？」

「そろそろだと思えますわ」

呟きに答えるセシリア。

ちなみに、私のパートナーはセシリアでドロテアのパートナーは凰だ。

一応、箒にも私流の剣術らしき何かを教えたのだが、日本のKENDOUとは相性が悪かったらしく全く使いこなせていない。

ただ、ドロテアの精密射撃とKENDOUの精神集中は相性は

良かったらしく、そこそこ精確な射撃が出来るようになっていた。
モニターがトーナメント表へと切り替わる。
内容は何とも面白いものだった。

？学年別トーナメント第一回戦。織斑一夏& amp; シヤルル＝
デユノア vs ラウラ＝ボーデヴィツヒ& amp; 篠ノ之箒？
？学年別トーナメント第二回戦。マリーチ＝オヴェスト＝ポッツ
オ＝ファブリカ& amp; セシリア＝オルコット vs ドロテー
ア＝リツケン& amp; 凰鈴音？

最初からクライマックスとは、こういう事を言うのだろう。
一部から冷たい風が流れてくるが、ボーデヴィツヒと箒であるこ
とは分かりきっている。

二名ほど頭を抱え、1組2組の生徒から励まされているが…。
こちらからしてみれば、どの程度成長したかを見るには丁度良い。
それに、自らがどの程度成長したのかを確かめる確認にもなる。

「……。一夏さん」

私の横で心配そうに呟くセシリア。
心の底から心配しているのである。

「セシリアは心配のしすぎです」

「でも、チーフ……」

「そろそろ、そのチーフっていうのやめて欲しいです。マリーチ
で良いです。あと、信じて待つのもまた強さです」

セシリアは今一度トーナメント表を見た後、ほんの少しだけ目を

瞑った。

目をあけた後のセシリアの表情は、私の言葉通りに一夏を信じて待つ事を決めた女の表情をしている。

「チー……。マリーチさんの言うように、信じて待つことにしますわ。一夏さんが負けるはずありませんものね」

軽くガンを飛ばしたただけなのに、慌てて言い直すセシリア。
随分と従順になったものだ。

「とりあえず、一夏とデュノアの死合……。コホン。試合を見るための場所取りに行くですう」

「マリーチさん、発音が違いすぎますわ……」

なんだかシヨンボリするセシリア。

私の言葉違いには、随分と耐性が付いたらしい。

「ほら、ドロテアに鈴。お前たちも一緒に見に行くですう」

そう言うと二人はユックリと立ち上がり、トボトボと更衣室を出て行く。

なんか映画で見たゾンビみたいだ。

「篝さんに声はかけませんか？」

「セシリアは、あの絶対零度の一角に手を突っ込みたいですう？」

「……。一夏さんの試合ともなれば場所取りは奪い合いですわ。わたくし、先に行って場所をキープしてきます」

ゾンビ二人に続いて更衣室を出るセシリア。
さて、私はどうするか。

「……」

少し考えたが、面倒なので特に何も言わずに三人の後を追う事にした。

学年別トーナメント開催アリーナ。

「これより学年別トーナメントを開始します！」

なんだかイヤにテンション高い2年生が実況の様な事をしている。季節感をぶち壊す様なサンタクロースをイメージしたであろう真赤な服装を身に纏い、アイスクリームの様なマイクを片手に司会席を一人で陣取っていた。

胸にはデカデカと？ツガル？と書かれたネームプレートを掲げている。

ツガルといえば、IS学園に通っている現役アイドルの事だ。

専用機は持つてはいない様だが、IS適性Sというトンでもない人物でもある。

ドロテア、シャルル、セシリア、鈴でさえ適性Aだというのに……。

一夏は適性Bで、箒が適性Cという状態だ。

ちなみに私も適性Sだったりするが、マリーセレスとの適性は測

定不可能と出ている。

そもそも自らの一部なのだから、測定も何もないという感じなのだろう。

「第一回戦のカードはー！ ISを操縦できる男子ペア！ 織斑一夏ー！ アーンド！ シャルル＝デュノアー！」

紹介と共に現れる一夏とシャルル。

ツガルの方はなにやらハイテンションで細かな紹介もしているが、殆ど女子の声援という名の津波に飲まれて消えている。

「対戦相手はー！ ドイツ代表候補にしてドイツ軍所属と思われる謎の美少女& amp・天才篠ノ之束博士の妹ペアー！ ラウラ＝ポーデヴィツヒー！ アーンド！ 篠ノ之箒ー！」

これまた紹介と共に現れるポーデヴィツヒと箒。

あんまりにも冷たい空気をまとっている為か、声援を送っていた女子たちの声が途絶えた。

だが、ツガルのハイテンションには絶対零度すらも意味が無いらしく新聞部が集めたと思われる情報を紹介している。

「それではー！ 試合開始のカウントを開始します！」

．．．3。

．．2。

．1。

試合開始！

こうして、四人の戦いが始まった。

試合開始直後。

動いたのは一夏だった。

開始合図とほぼ同時に瞬時加速を使いボーデヴィツヒに斬りかかる。

ソレを読んでいたかのようにAICで停めるボーデヴィツヒ。

どうやら一つの対象を止めるのに対し、AICを糸の様に張り巡らせ完全に停止させる様にしたい。

私と戦ったときは点で武器を止めていたが、現在は面で止めている。

中々に厄介だ。

だが。

「チーム戦だつて事を忘れてるですう」

隣で一夏を心配そうに見ているセシリアに聞えるか、聞えないか程度の呟き。

そう、今回はチーム戦なのだ。

ソロでの戦いを中心とし、仲間がいるのにまったく仲間に頼らないボーデヴィツヒは不利だろう。

しかも、自ら一人で勝てると思っ込んでいる時点で一夏とシャルルの勝率を上げていると言っても良い。

脳筋染みた考えで軍人。

しかも、それが隊長とは片腹痛い。

作戦も全く練れず、感情の赴くままに行動している輩と何が違うのか？

もし私がボーデヴィツヒならば、箒を最大限に利用し勝利を掴もうとするだろう。

勝者ことが真実であり、事実なのだから。

「さて、次の一手は大型レールカノンでの攻撃と見るですう」

予想通り、ボーデヴィツヒは動きを止めた一夏に対し、右肩に装備された大型レールカノンの砲頭を向けた。

ボーデヴィツヒの視点からは見えていないだろうが、若干上から見下ろすような形になっている私にはよく分かる。

一夏を壁とし、ボーデヴィツヒに迫るシャルル。

箒は若干遅れを取ったが、そのシャルルに気がついた様だ。

「マリーチ様。どちらのペアが勝つと思われませんか？」

横に座っているドロテアが話しかけてくる。

ちなみに私の左にセシリア、右にドロテア、そのドロテアの右に鈴の並び順で座っている。

現状ではまだまだわかり難いが、ボーデヴィツヒの行動はあまりにも軍人らしからぬものであるため。

「勝利の女神は、一夏とシャルルに微笑むと思うですう」

「なぜそう思うんですの？」

「私もマリーチ様がお考えになっている理由が知りたいです」

声こそ掛けてこないが、鈴も私の方を向き理由を聞きたそうにしている。

まあ、おそらく鈴も何かしら言っているのだろうが、周りの声援に言葉を掻き消されているのだろう。

「簡単ですう。ボーデヴィツヒは一人で戦っているのに対し、一夏とシャルルは二人で戦っているですう。箒もいるですが、現在の箒の実力では一夏にもシャルルにも勝てないですう。出来たとしても精々数分の時間稼ぎ。数分程度なら一夏もシャルルもボーデヴィツヒを抑えられるですう。あと、ボーデヴィツヒは1対1ならば無類の強さを誇る部類ですが、複数戦となるとAICの長所は活かしきれず、逆に短所が目立つようになってくるですう。そうなれば最後、AICを使用して一夏かシャルルのどちらかを止めようものならば、停めた際に発生する硬直が隙となるですう。無意識でAIC使えるようにでもならなきゃ複数戦にAICは向かないですう。動き回ってワイヤーとレールカノンで対応するとは思いますが、それでもやはり2対1ですしい、ボーデヴィツヒは一夏は接近戦しか出来ないと思っ込んでいる辺りも一夏とシャルルの勝率を大きく引き上げてるですう」

あくまでも私の考えた理由なワケだが、実際も私の言ったように事が進んでいる。

ボーデヴィツヒは助けに入った箒の足をワイヤーで牽引し、アリーナ脇まで吹き飛ばしているのが見て取れた。

きつと、あちらでは怒号が飛び交っている事だろう。

実際もハイテンション気味に……。

「おおっと！ ラウラ選手、箒選手を助けたー！ かに見えたが、邪魔だからポイしたみたいー！」

誰かあの釘宮ボイスとめて来いよ。

そついえば、ツガル型はコールドスリープ状態にある菱宮津軽の精神構造をロジック化し移して作り出されたらしい。

あそこで司会してるハイテンションもそうだったりするのだろうか？

まあ、人間みたいだしソレはないか。

「とりあえず、見てるですっ」

三人は頷き、試合を見る事に集中し始めた。

現在は、一夏VSボーデヴィツヒ、シャルルVS箒の構図になっている。

一夏はボーデヴィツヒのワイヤーブレードに切り刻まれ、戦況はよろしくない。

シャルルの方は的確な射撃で箒を一瞬で追い込み、そろそろ倒しきるだろう。

「ああ、一夏さん……」

心配そうな声色でセシリアが呟く。

一夏は、ワイヤーブレードで行動を封じられ、いままさに大型レールカノンで撃たれよとしているのだから無理もない。

が、セシリアにはシャルルが箒を倒し、かなりの速度で回り込んでいるのが目に映っていないようだ。

シャルルと戦っていた箒の腕もかなり上がっているように見えたが、接近ブレードで弾を斬ったり、実体シールドで防御したりしたところで、シャルルの高速切替による猛攻の前では長く持たなかったらしい。

ISが訓練機なのだから仕方ない結果としか言えないが、もし刀を用いた専用機だったのならもう少し粘っていただろう。

さて、一夏の前に割り込んだシャルルは砲弾を防ぎ、ワイヤーブレードを断ち切る。

即座にその場から後退するあたり、シャルルの判断能力の高さが伺える。

アサルトライフルを量子化せず、そのあたりに捨てたのもフラグだろう。

察するにアンロックした状態の物をあたかも弾切れで捨てたように演出したのだろう。

そもそも、量子化してしまえる物を捨てるという行為自体、なんらかの意味が在ると感じるべきだ。

量子化しなければ、処理が早くなるとかそういう事はない。逆に量子化しなければ、足元に転がっている銃が邪魔になる可能性だって少なからず在るのだ。

そんな事すらも頭の片隅に思いつかないなんて、ボーデヴィツヒの狂信者ぶりが伺える。

織斑千冬の偉業を邪魔した存在を倒さなければとか、そんな感じの考えが脳内を支配している様だし、先に脳筋と表現したが、狂信者と表現したほうが最適だろう。

「強さを攻撃力と思い込むあたりが愚の骨頂。そういうヤツから死んでゆくですう。そして、絶対。何処かしらで誰かに迷惑を掛けるですう」

誰にも聞えないように呟く。

ボーデヴィツヒを見ているとイライラする。

マスターの代わりに生きながらえたゴミ虫を思い出して仕方ない。

ワアアアッ！

声援というなの音の波が耳に痛い。

一夏が零落白夜を発動させた途端にコレなのだから、困ったものだ。

零落白夜は確かに一撃必殺だろう。

必ず殺すと書いて、必殺。

だが、当てることが出来なければ意味はない。

戦いはここからと言ったところだろう。

Ver. 2.1 (前書き)

修正

全体的に内容を修正しました。

理由

ボーデヴィツヒに迫る一夏は、急停止・転進・急加速などの行動を行っている。

AICの見えない糸に捕らわれない対策として複雑な軌道を描いているのだろう。

ワイヤーブレードの攻撃も加わり、一夏は追い詰められて行くが、そのワイヤーブレードを的確に狙い撃ち、ボーデヴィツヒへの牽制も忘れないシャルル。

デュノアの名を持つ者だが、可能ならば我が社に欲しい。

この前、ナヴァグラハが面白い映像を持ってきたからソレを利用し、シャルルをシャルロットに戻し、デュノアと切り離してやるのも面白い。

いや、それともシャルロットをデュノアの頭に沿え、企業連合としてO・P・Fに取り込むのも悪くないか…。

まあ、何にせよ。いまは試合を見ることにしよう。

思考をやめ、視点をアリーナに戻すと、一夏はワイヤーブレードを掻い潜り、ボーデヴィツヒに入り体当たりをしようとしている所だった。

ボーデヴィツヒとしてみたら、斬撃を行うと思っていたら刃を向け体当たりをしてきたのだから驚くだろう。

だが、面による停止を主体に持ってきたボーデヴィツヒならば一夏を停める事は容易い。

「それにしても、本当に学ばないヤツですう」

ボーデヴィツヒは開幕直前にも同じ様な事をやったにも関わらず、再度シャルルの接近を許していた。

2対1だというのに、頭の中には1対1の構図しかないらしい。なんとも愚かな事だ。

シャルルは零距离でショットガンを乱射し、ボーデヴィツヒの大
型レールカノンを破壊した。

これでボーデヴィツヒは最大火力であり、遠距離攻撃手段を失っ
た事になる。

ワイヤーブレードとプラズマ手刀は中・近距離用武装であり、シ
ャールとの相性は最悪。

怯み後退したボーデヴィツヒめがけ、零落白夜を発動させた一夏
が斬りかかる。

いまのタイミング、このタイミングならば確実に当たるだろう。

だが、勝負の女神とは何とも気まぐれなもので、切っ先が触れる
寸前に零落白夜の白い光がゆっくりと萎んでゆき、消えてしまった。
白式には、零落白夜を発動させられる程のエネルギーが残ってい
なかつたらしい。

啞然とする一夏。

そして、それにより発生した隙を見逃すほどボーデヴィツヒも甘
くはない。

一瞬で一夏が追い込まれ、助けに入ったシャルルは吹き飛ばされ
る。

ボーデヴィツヒが一夏に向け攻撃を行うと、二人の間に閃光が走
り、その後に現れたのは白式の力を失い膝をつく一夏の姿だった。

ここでトドメを刺さないボーデヴィツヒは愚かだろう。

少しでもエネルギーが残っていれば動く事が出来るというのに……。

しかも、勝ち誇ったようなポーズを取り、その隙をシャルルに突かれ、攻撃を許している。

ここまで慢心し、油断しているボーデヴィツヒならば、先のフラグに気が付くことはない。

そう、相手が相手ならすぐに分かるだろう。まるで計ったかのように一夏の足元にあるソレに……。

シャルルが最初に投げ捨てたアサルトライフルが、一夏の足元に転がっている事に……。

一夏は自身がラウラの視界と興味から外れた事を確認すると、ゆっくりとアサルトライフル片手に立ち上がる。

こちらからは、ボーデヴィツヒに狙いを定める一夏が丸見えなワケだが、シャルルの対応に追われ、一夏を確実に倒したと思っ込んでいるボーデヴィツヒが気が付く事はない。

もちろん、撃たれるまでは……。

撃たれ、気が付いた時にはすでに遅い。

シャルルの切り札。

通称、盾殺しと呼ばれるソレはすでにきられている。

第二世代型最強と謳われた装備であり、すでに我が社のEVFベイオネットに最強の名を奪われたものの威力は折り紙つきだ。

リボルバー機構により、炸薬交換による連続打撃が可能なパイルバンカー。

これをAICで止めようとするのなら、杭の一点。先端を停止させなければならぬ。

無論、焦りにより集中力の乱されたボーデヴィツヒでは盾殺しを
停めることはまず不可能。

予想通りに腹部に盾殺しを叩き込まれ悶絶している。
シャルルはボーデヴィツヒの様に甘くないらしく、確実に倒す為
に連続で三度ほど叩き込んでいるが…。

「なにかおかしいですう」

「なにがですか？」

「あとすこしで一夏様とシャルル様の勝利では在りませんか？」

何かが、おかしい。

過去、アストライアーと1回目に戦い終わった時に感じた違和感。
何かまだ、トンでもないものが隠れているような気配…。

人間、当って欲しくない予感という物は良く当るようで、ボーデ
ヴィツヒのISから突然電撃が放たれ、シャルルを吹き飛ばした。
そして、ボーデヴィツヒのISが変異を始める。

ドロドロとした銀色の何かに変化して行くボーデヴィツヒのIS。
その見た目は経験値沢山くれるけど逃げまくる、某スライムを丸
くした様な感じだ。

本来、ISはこんな劇的な変化などしない。

多少装甲の形が変わることは在れど、完全に見た目が変わるよう
な変化などしないのが普通だ。

「なんですの？ あれは？」

「なんなのよ。あれ？」

「マリーチ様。どういたしましょう?」

「……。お前たちは被害が出ないように避難の手伝いをするですう。私はアレの動きを止めるですう」

三人をすでに始まっている非難の手伝いに向かわせ、私はボーデヴィツヒのISを見つめる。

三人に関しては、訓練という名の調教が上手くいったらしく私の指示通りに避難の手伝いに行った。

そこまで拘束力のあるモノではないが、無意識に私の指示を聞く様にしてみたのだ。

もちろん、本人が拒否する事なんかは強制できない。

先にも言ったが、拘束力は無いのだ。

だから、こういう時くらいにしか役に立たない。

三人の気配も遠く離れた事だし、私も動くとしよう。

新しい武装、魔爪ヴァナルガンドを試すのにはもってこいのシチュエーションだ。

O・P・F | NETジャーナル 第五回

「うきゅ？ うきゃー（訳：第五回O・P・F | NETジャーナルを開始。今回は私一人）」

「きゃ（訳：感想返答だけ）」

>蒼 龍一様<

番外というより最早殿堂入りだろこの二人w

「きゅ（訳：仰るとおりで）」

>ストラス様<

番外編の感想から

最後まで読んで少し眼が潤みました。

意志を持ったミミックがカッコよかった、最後に同化してまで一途に一夏のために尽くした姿に眼の奥があつくなりました。

Ver.16の感想

さすがお嬢、逆光源治とは考えることが違うなあ

「きゅあ／＼／＼（訳：照れているらしくて何を言っているか解読不能）」

「うきや（訳：失敗に1ペリカ賭ける）」

> 緒方 紅夜 様<

さて、ここまでのところを見たところ、恋愛感情というものに発展はしていないというか、どこか観察段階というような感じ。

神姫だったからなのか、いまだ恋愛が分からないからなのか、どちらにしてもまだまだですな。

そしてさりげなく三輪車が……

市街地戦とか想定してか？

正直ないと思っていたが。

たしかに神姫の武装はISよりは小型だが三輪車は比較的大きく並のISと同じくらいだからあんまりうまみはないと思うんだが……

（自分のフィギュアを見ながら）

そしてここでクトウグア、イタクア。

だとしたら鳥とか人魚は……

タッグは予想外に世話焼きなマリーチさんが介入しましたね。

正直主従タッグでオーバーキル並に爆発と硝煙の過剰投入かと思っ
てました。

あと、原作キャラのマリーチへの内心思っていることが知りたいで
す。

一話くらい番外でお願いできませんかね？

「きゅ？（訳：模造品である私に恋愛に関する質問はお答えできませんが、たぶん観察中なんだと思います？）」

「うきゃあー（訳：大丈夫、アークとイーダなら！ きつと、きつと！（リピイント版を眺めながら））」

「うきゅ！（訳：了解しました。番外では在りませんが、定期的にお話形式でみんながマリーチの事をどう思っているかを載せ様と思います）」

> kusarri 様
更新お疲れさまです

笑顔で銃を向けるドロテア想像すると怖いですこの時の姿はメイドですか

鈴とセツシーの魔改造フラグが建ちましたね、どこまで成長するかまた何処に魂が逝ってしまうか楽しみです

そしてデュノア社がマリーチ様の潰す対象に含まれた気がしたのは気のせいでしょうか

次回も頑張ってください

「きゅ！ うきゃー（訳：あ、制服です。一部に手直しを加えておきます！ 気のせいでは在りません）」

「うきゃああ（訳：がんばります）」

>ストラス 様<

あれ？第三世代型は試作機で鳥と人魚だけだったのでは？（Ver .
2の段階で）

いつの間に三輪なんて作ってたんだ？

ここでクトウグアとイタクアが出てくるとは…このまま行くと蜘蛛
とか鏡とか時計兎なんてのも出て来るのか？

次回も楽しみに待ってます。（ ）

「きやうう…」（訳：番外編をご用意しました！ しばしお待ちくだ
さい…）」

「うきゅ（訳：名前は色々あります。中には結構マニアックな物ま
で）」

>kusari 様<

更新お疲れさまです

セシリアは弱点を克服とまではいかないみたいですけどピット操作
しながら行動できるのはかなりの進歩ですね

鈴とドロテアはゾンビ化していますが一体なにがあったか気にな
ります

マリーチお嬢様の行為にいくらか耐性があるドロテアこの状態と
は何を行ったか想像しづらいです

今回はラウラ戦ですねどんな事が起きるのか楽しみです

次回も頑張ってください

「うきゅ（訳：自分が怖いと感じた者と戦わなければならない時、人はゾンビ化するらしいです。少し修正します）」

>ストラス様<

ここでツガルがキターwwこれでカツるww（このまま消えそうな気もするが…）

セシリアの強化は順調なようだが、いつの間にか第まで一緒に特訓してたんだ？（ここでの第はほぼ空気だからか？）

「うきゅああ（訳：消えます！でも、後々再登場します。いつ登場するかは内緒です）」

「うきゅ。きゅああああ！（訳：今回はコレで終わります。またまた返信が遅れました。次回から本気出す！）」

「うううきゅああああ（訳：？O.P.F|NETジャーナル？はOvest Pozzo Fabrica（オウエストポツツオファブリカ）とA/cute Dynamixアキュート・ダイナミックスの提供でおくりしました）」

O・P・F | NETジャーナル 第五回（後書き）

ねもい

うきゅあーの名前は、雪羅です。

稀にアドパに出現します。

バグで止まった人は居ないので大丈夫！

たぶんね……。

最近、最初から最後までクライマックスが多い様な気がする。

ちようど目の前で箒が一夏の頬を叩き、バランスが崩れた一夏が横向きに転んだ所だった。

敵と思わしきモノの前で何をやっているのか。

だが、目の前で漫才が繰り広げられているにも関わらず、女剣士みたいな見た目に変化したボーデヴィツヒだったモノが動く気配はない。

状況から察するに、アレは自らに敵対行動を取った者に対してのみ自動迎撃で反撃する何かの様だ。

オートカウソウター動きが機械的である事から、操縦者を守る何らかのシステムの暴走と考えられるが……。

なにかどこかで…。

こんな様な行動を取るシステムを聞いたことがあるような気がする。

「敵の前で漫才とは、見上げた根性ですっ」

「「!?!?」」

一夏、箒の二人は、周りをキョロキョロと見渡す。

高感度ハイパーセンサーを持ってしても見破られ難いマリーゼレスの擬態を通常のハイパーセンサーで見つける事はほぼ不可能。

幾ら探したところで見つけれられるワケがない。

だが、さすがにいつまでも探させているのは悪いので全身擬態を解く。

「とりあえずう、理由を説明するですう」

多少驚いたようだが、何事もなかったかのように対応された。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

「お前は……いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃ　　ぐふっ!？」

情けなくグダグダと喋る男は嫌いだ。

マスターならば、喋る前に考えて最善の行動を取る。
だからだろう。

私はほぼ無意識の内に、一夏を蹴飛ばしていた。

「!？　なにをする！」

「ちよつと黙るですう」

イング・ペイカーの銃口を箒の米神に当て黙らせる。

「一夏、良く聞けですう。私には昔、好きな人がいたですう。その人は一夏にソックリな人でした。如何なる困難が立ちふさがっても文句も言わず、泣き言も言わず、諦めずに困難を乗り越える人だったですう。ウジウジ、グダグダと情けない事を言っている一夏には似ても似つかないですねえ。でも、私は一夏にその人を見てたですう。だから、本当は自分でやりたいんじゃないですかあ？　ならどうすれば良いか考えるですう。口から文句垂れ流したり、アホみた

いに暴れたりすんのは後でもできんだよ！」

二人はキョトンとした表情をしていた。

一夏の表情だけは次第に変わり、マスターの面影を伺わせる顔となる。

「…………。そうだな。そうだ。ここで引いたら俺じゃない！ 織斑一夏じゃない！」

「だが、エネルギーは」

「無いなら他から持って来ればいい。でしょ？」

私の後ろに、電撃で吹き飛ばされたシャルルがやってくる。

どうやら持ち直したらしい。

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？ だったら頼む！ さっそくやってくれ！」

「けど！」

シャルルが一夏を指差し、普段の優しげな雰囲気とは異なる有無を言わせぬ強めの言葉で言う。

「けど。約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら一夏は明日から女子の制服で通ってね」

「うっ……。い、いいぜ！ なにせ負けないからな！」

どうせだから私も乗っておこう。

「ついでに、水泳の授業は女子用スクール水着で受けるですっ」

「え？ いや、それはちょっと……」

「負けないなら大丈夫ですっ」

「……。お、おう。負けないから大丈夫だ！」

普通に嫌そうな顔をする一夏。

だが、良い具合に緊張もほぐれ、一夏の表情に微笑みが戻る。

コレならば大丈夫だろう。

さて、私は私の役目を果たすとしよう。

「じゃあ、はじめよ。 リヴァイヴのコア・バイパスを開放。

エネルギー流出を許可。一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

シャルルが一夏の白式にエネルギーを送るのを確認した後。

私は、三人とボーデヴィツヒだったモノに背を向け、駆けつけてきた教師部隊に微笑んだ。

「というこでえ、ここは一夏に任せるですう」

「生徒にアレの対処を任せることは出来ない」

まあ、教師としては当たり前な回答だろう。
しかたない。

「誰に向かって口をきいてるですう?」

「?」

「私はマリーチ。マリーチ〃オヴェスト〃ポッツォ〃ファブリカ。
Ovest Pozzo Fabbri ca(オヴェスト ポッツ
オ ファブリカ) 社、総帥であるこの私に意見するとは、いい度
胸ですう」

擬態していたナヴァグラハを視認可能状態にする。

もちろん、すでに教師部隊を取り囲むように配置済みだ。

動揺する教師部隊を他所に、私は左腕に最近マスターアップが完了したばかりの新作、魔爪ヴァナルガンドを装備する。

見た目は邪悪な感じのグローブだ。

これは、装着した腕そのものを量子化する事で切り離しを可能としたもので、夢のロケットパンチが出来る武器でもある。

本当は両腕なのだが、まだ肉体系量子化の技術が未完成であり、出力が安定していないため、両腕に付けるともっていかれてしまうのだ。

だから今回は片腕のみ。

試験用人形の腕がもっていかれなかったので、このヴァナルガン
ドは恐らくは大丈夫だろう。

「何人たりとも一夏の邪魔はさせないですう」

ニッコリと天使の様な微笑みを教師部隊に向け、私は攻撃を開始した。

Side ドロテア＝リッケン

ラウラ隊長のISが暴走し、学年別トーナメントは中止となった。ただ、これまでの結果を見るため、後日トーナメント形式ではない試合が行われるかもしれないと避難の手伝いをしている時に山田先生から聞いている。

マリーチ様との戦いから逃れられたと思えたのに……。
どうせだから抽選もやり直しにならないかな？

そうそう、ラウラ隊長は無事に救助され保健室で寝ているとのことだ。

避難の手伝いが終わり、引き返している時に織斑先生に聞いたので確かだろう。

織斑先生も保健室に向かっていているようだし、目覚めた隊長も目の前に織斑先生が居れば取り乱す事もない。

私たち、セシリア様、鈴様に私の三人は、戻る理由も失い寮に戻ろうとしていた所で凄まじい内容を耳にしてしまう。

一夏様がラウラ隊長を止めるために戦っている間、ラウラ様を止めに来た教師部隊をマリーチ様がボコボコにしまったという内容だ。

予めナヴァグラハで囲み、出力の安定していない未完成武装の実験台するなんて…。

その話をしていた人の見た目から察するに、きっと教師部隊の一人だったのだろう。

今にも泣き出してしまいそうな声色だったし、瞳も少し充血して

いた。

そして、榊原先生が本気で慰めているあたり、よほど怖い思いをしたのだと思う。

どうやらマリーチ様は、Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）総帥という肩書きを使っていたらしい。

普段は一生徒として紛れ、総帥としての在り方は霞んで見え難いが、世界第三位の大企業トップに怪我を負わせようモノならば最後に学園をクビにされてしまう可能性もありうる。

いや、それで済めば良い。

一個人とOvest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）で裁判沙汰にもなりかねない。

Ovest Pozzo Fabbrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）内部でのマリーチ様支持率は脅威の100%だ。そんな人間しかいないのだから、マリーチ様の意思とは関係なしに裁判を起こしかねないし、裁判になつたら個人ではまず勝てない。

最悪、法すらも歪めてしまいかねない権力と財力を持っているから性質が悪い。

裁判沙汰にならなかつたとしても、マリーチ様に忠誠を誓いまくってしまっているマッドの称号を持つ研究部の方々は許してはおかないだろう。

「はあ。先行きが不安です」

「同感」

「同感ですわ」

溜息を吐きながら1年生寮の廊下をトボトボと歩く。

マリーチ様、一夏様、シャルル様の三名は、教師陣から事情聴取を受けているので、夕方過ぎくらいまでは寮には戻ってこないだろう。

「セシリア様、鈴様、非難した方々はみな食堂に居るようですし、私の寮部屋でノンビリしませんか？」

「あー、うん。いまは喧騒から離れた所に行きたい」

「鈴さんと同意見ですわ」

こうして、私たちは寮部屋で休む事にした。

寮部屋。

部屋のベッドが一つになっているのを見た二人は、なぜか哀れみの表情で私を見る。

「いえ、大丈夫です。抱き枕にされてるだけなので」

「それって大丈夫なの？」

「大丈夫そうには思えませんわ」

哀れみが同情に変わっただけだった。

その後、私たち三人は私側のベッドに腰掛様々な話をする。基本的にマリーチ様に対することだったが…。

ドロテアの場合。

「ドロテアってさ。結構前からマリーの所でメイドしてたの？」

「いえ、まだ1年も経っていません」

「あら、意外ですわ。他から見ても忠誠心の高さは伺えますもの」

「うーん。他の人には内緒ですよ？ 私、元々はドイツ軍に所属していたんです。ラウラ隊長と同じ所属でした。ただ、私って本当にダメダメで、出来損ないって言われていたんです。そんなある日、突然出来損ないって言われていた私を引き抜いてくれた方がいまして、それがマリー子様だったんです。最初はなんだか良く分からないうまにメイドのプロセスとかISの勉強なんかをさせられて、気がつけば専用機も与えられていました。あと、ISアーテイルの調整をしていた整備士の方から聞いたマリー子様の印象は最悪でしたね。アーテイルを使いこなせなければ、廃棄処分にされるって聞いていたので……。まあ、その整備士の方は「マリー子様は至高の方だとか「素晴らしい天才」だとか言っていた方が印象に残っていますけどね。狂信者的な意味合いで」

「……………」

「……………」

「でも、アーテイルの最終調整の時に「専用機を使いこなせなくても専属メイドとして側に置いてやる」って言われたんです。よくよく考えれば、最初にマリー子様に出会った時にも言われてるんですけど

どね。使えなくてもメイドとして側に置いてやるって…。はじめて、人に必要とされたんです。軍では出来損ない扱いだっただ私を必要としてくれる人に会えたんだって、うれしい気分になりました。あと、生まれて初めて褒めてくれたのがマリーチ様だったんです。だから、仕えている時間は短いですけど、私を必要としてくれて、褒めてくれたマリーチ様の為に頑張ろうと……。あれ？ お二人ともどうしたんですか？」

「ドローテア、あたしたち（わたくしたち）応援するからね（しますわ）！」

「え？ はあ？ ありがとうございます？」

鈴の場合。

「あたしが一番マリーとの接点が少ない？」

「そうですね。ドローテアさんがパートナーでしたものね」

「ただ、よく怒られていたのは鈴さんでしたよね」

「……。はあ、アレでしょ？」「狭いところ（満員のアリーナ）で双天牙月を投げるんじゃないですう」って言われて丸いビットみたいなのでフルボッコにされたヤツでしょ？」

「その間、わたくしへの攻撃の手が緩むので助かっていましたわ」

「満員状態のアリーナだと他の人に当たってしまいますからね」

「でもさ、ドロテアって基本中距離だし…。双天牙月で斬りかかるにも距離的にさ。龍咆だって避けるし」

「鈴様は、龍咆で撃つ場所を見る癖がありましたので、ハイパーセンサーで目の動きを追っていれば大まかな攻撃位置の予想が出来ましたので、予想される範囲から外れるように動いただけですよ？」

「普通そんな事できないから」

「はあ、それにしても鈴さんが羨ましいですね。マリーチさんの恐怖を体験したのがあの一件だけなんて」

セシリアの場合。

「セシリア様は、マリーチ様がパートナーでしたからね」

「あの時のマリーの事は思い出さないようにしてたのに…。ラウラが可愛く思える程だったし、目の前に助けに現れたのは、一夏でもなく、正義の味方でもなく、恐怖の魔王でしたみたいな感じ」

「わたくしはその魔王がパートナーでしたのよ？ 終始、地獄の様な日々でしたわ」

「……」

「……」

「訓練中は生かさず殺さずのギリギリラインを基本として、BT操作時の隙を狙って半殺しなんて当たり前でしたわ。BTは6基、マ

リーチさんのナヴァグラハは9基。BTを迎撃に回しても3基は確実に狙って来るあの恐怖は忘れられせんわ。おかげで、BTを操作しながら動けるようになりましたけど……」

「アリーナにマリーとセシリアがいる時は、セシリアの悲鳴を聞かない時がなかったしね。知ってる？ みんな出来るだけ訓練中のマリーとセシリアには近寄らないようにしてたの」

「……。知っていますわ」

「あの、一つ疑問に思っていたのですが、セシリア様はマリー子様のことをチーフとお呼びになっていましたよね？」

「それあたしも気になってた。なんでチーフ？」

「簡単ですわ。マリーチさんの教え方はムチだけじゃなくてアメもありましたの。上手く行動したり、攻撃を掻い潜ったりしたら褒めてくれましたわ。本当にマリーチさんは人を褒めるのが上手い方ですわ。ボロボロなのにやる気が出て来るような褒め方をするんですもの。だから尊敬の意を込めてチーフと呼ぶ様にしましたの」

「……。マリーチ様はその技能（飴と鞭）でO・P・F内での支持率は脅威の100%なんですよ」

「……。なにその究極女王……。ほんと、あたしのパートナーがドロテアでよかったわ」

「それに、チーフって呼べば……。わたくしは強くなる為に頑張ってるんだって思えましたの」

「うん。頑張ったのね。セシリア」

「セシリア様、頑張ったんですね」

こうして、私たちの話し合いは部屋にマリーチ様が戻ってくるまで続いた。

後に、話し合いの場所はラウラ&シャルロット部屋に移ることになったが、基本的な話題が変わることは無く、全員が思うマリーチ様に対する事を話し合う場所として一日も欠かされる事はなかった。

Ver. 24 (前書き)

外伝

Ver. 1の少し前のある文部でのお話

Side フランス支部 in 支部長

私の目の前には、日本支部で開発された第三世代型が2機ある。日本支部と言っているが、日本支部こそ本社と言っても良い扱いになっており、O・P・F総帥であるマリーチ様が拠点としている場所だ。

「くつ、日本支部に遅れを取るなど……。私たちフランス支部の第三世代型の完成はまだか！」

一番最初に第三世代型の開発に着手したのは、我々フランス支部のハズだった。

だが、先に完成したのは日本支部。

本来ならば、マリーチ様をお迎えし、第三世代型アークと第三世代型イーダをお見せするハズだったのに…。

「クトウグアお姉さま、落ち着いてください。今年の五月には完成いたしますわ」

何時からそこにいたのか、優雅に紅茶を飲む妹。

副支部長イクタアの姿がある。

「だが、このままではマリーチ様を呼ぶことが出来ないじゃないか
」！

「だ・か・ら、落ち着いてくださいまし、クトウグアお姉さま」

そう私に言うイクタア。

だが、イクタアの方が私の様に焦るべきなのだ。

イクタアはマリーチ様の家庭教師を務めていた過去がある。私以上にマリーチ様に会いたいハズ。

「全く、そんなのだから何時まで立つても結婚できないんですわ」

「な！ それは関係ないだろ！」

「はあ、エリーとジルにはこうなって欲しくありませんわ」

娘の写真が入ったロケットを開き、ウツトリとした表情をするイクタア。

ちなみにイクタアは18の時に籍をいれ、21の時に双子を出産している。

その後、22の時から23までの1年間、マリーチ様の家庭教師を務めたのだ。

そういえば、こんな事もあった。

以前、イクタアの娘を愛する心が爆発し、第三世代型エストリルと第三世代型ジルリバースというISの設計図を持ってきた時はさすがに焦った。

なにせISには絶対数が存在する。

フランス支部が保有するコアの数は3つ。

現在作成中の私専用ISAーク、イクタア専用ISイーダで2つ使っているのに、さらに二つの専用ISを作るとなると、他の支部からコアを譲渡してもらわなければならなくなる。

ドイツ支部のナラトウース（専用ISMルメルティア）、トゥーサ三姉妹（専用ISゼルノグラード）。

アメリカ支部のファロル（専用ISシャラタン）、ルサ（専用ISベイビークラス）。

ブラジル支部のウトウルス（専用ISオールベルン）、フルエフ
ル（専用ISジールベルン）。

ギリシャ支部のシユブ（専用ISヴェルヴィエッタ）、ニグラ
ト（専用ISリルビエート）。

彼女らに頼むのは非常に屈辱的だ。

特にギリシャ支部の二人には頼みたくない。

二人とも既婚者であり、大恋愛の末に結婚したとして他の支部でも中々に有名なのだ。

む、話がソレたが、この様にイクタアの方が私よりも感情的になり易いハズなのに……。

「焦った所で完成が早くなるワケではありませんわ。それにフランス支部はデュノア社を抑える為の要。マリーチ様もつとも訪れる可能性が高い支部ですわ」

ロケットを閉じ、また優雅に紅茶を飲み始めるイクタア。

確かに、フランス支部はデュノア社を抑える為の要として他の支部よりもO・P・F本社から様々な援助を受けている。

マリーチ様が視察しに来る回数も一番多い。

「ああああ!?! もう!! 私走って来る! 何かあったら電話してくれ」

「分かりましたわ。でも、またスピード違反で捕まらないでくださいましね? 迎えに行くわたくしの身にもなつて欲しいものです」

「っ!？ わ、わかってるわよ！ それじゃ、いつてくる」

「いつてらっしやいませ」

そう言つて、私は支部長室を後にした。

向かうは、愛用バイクのある倉庫。

そんなやり取りの数カ月後、マリーチ様からの命令によりデュノア社のシャルル・デュノアという人物を調べる事になる。

相も変わらずデュノア社のやる事は外道だ。

なんとしても、あの会社はフランス支部が沈めなければならない。私の正義のために！

そして、マリーチ様に褒めてもらう為に…！！

Side 開発コンピューター

第三世代型ハイスピードトライク「アーク

フランス支部支部長クトウグア「デュルフェ（27歳）の専用IS。

O・P・F社の中で最も早く製造に着手された第三世代型だが、完成は日本支部のエウ克蘭テとイーアネイラの方が先だった。

市街戦をコンセプトとした特殊なISであり、IS本来の在り方である宇宙開拓などは不向き。

宇宙空間での活動は想定外だが、惑星に降り立てばどのような地形であっても走ることが可能である。

また、トライクモード（パトロクロス）という状態では理論上

最大時速8000kmで走行可能。

地球上でこの速度を出す事は絶対に不可能。出せても摩擦で自滅する。

第三世代型ハイマニューバートライクIIイーダ

フランス支部副支部長イクタアIIカザノヴァ（旧姓デュルフェ / 26歳）の専用IS。

アークと同時に製造された姉妹機である。

市街戦をコンセプトとした特殊なISだが、アークとは異なりアームパーツによる宇宙開拓などにも確りと視点が置かれている。

アーク同様にトライクモード（ヴィシユヴァ・ルーパー）になる事が可能。

理論上の最大速度は時速1000kmとアークに比べるとかなり遅いが、それでも速い事に変わりはない。

第二世代型コンバットビークルIIムルメルティア

ドイツ支部支部長ナトウースIIシュローター（36歳）の専用IS。

徹底的なまでに軍事利用を考え抜いた末に完成した。

最初は量産型として売り出す予定だったが、あまりにもこたわってしまった為、常人では使いこなせないピーキーISと化してしまふ。

現在使いこなせるのは、ムルメルティアを専用機としているナトウース一人。

第二世代型シューティングアイアンIIゼルノグラード（三姉妹仕

様)

ドイツ支部副支部長フィネートウーサ(20歳)、テアットウーサ(18歳)、イルマットウーサ(16歳)、トウーサ三姉妹の専用IS。

デュノア社のラファール・リヴァイヴ・カスタムに張り合っ作り出された第二世代型ISである。

ただし、徹底的なまでに火器使用を考えたピーキーISであり、操縦者は様々な銃器・重火器を使いこなせる腕前、どのタイミングでどの銃火器を使用するかなどの判断能力を求められる。

量産型では在るが、ゼルノグラードを専用機としているのはトウーサ三姉妹だけだ。

三女イルマがゼルノグラードベリク、次女テアがフォートブラッグダスク、長女フィネがゼルノグラードヘビーとなっている。

第二世代型ガンバッテリーフォートブラッグ

テアットウーサがゼルノグラードを改造しまくった末に誕生したIS。

固定砲台である。

火力は現存するISの中でも最大であり、中距離、遠距離戦闘においては無敵の文字を与えられている。

しかし、固定砲台で在るが故に近づかれると脆く、三女と長女の守りにってこそそのISと言えよう。

第二世代型ストラディヴァリシヤラタン(紗羅檀)

アメリカ支部支部長ファロルアシュリー(28歳)の専用IS。

音に視点をおいて製造された異色のIS。

一応第二世代として登録されているが、実際は未完成であり何世代型とも言えない。

『Pluck thy my flower, My dear』

第二世代型エレクトリック「ベイビークラス」

アメリカ支部副支部長ルサ「ブラックマン（15歳）の専用IS。

シヤラタン同様に音に視点を置いて製造された異色のIS。

ルサ「ブラックマン及びアメリカ支部員数名で結成されたロックバンドにより製造された為、何時まで立っても未完成。

常に改造と理論組み換えが行われている。

第二世代型ソードクイーン「オールベルン、ソードマスター「ジールベルン

ブラジル支部支部長および副支部長ウトウルス「アレニウス（13歳）、フルエフル「アレニウス（13歳）の双子の専用IS。

アレニウスはスウェーデン出身であり、北欧神話に影響されて製造されたISである。

接近戦闘に特化されており、連続して瞬時加速を行う事が可能。オールベルンが白を基調とし、ジールベルンが黒を基調として

第三世代型ビックバイパー「ヴェルヴィエッタ」

ギリシヤ支部支部長シュブ「メティス（22歳）の専用IS。

まだ未完成でありその全貌は定かではない。
しかし、いままでのISとはコンセプトそのものが異なるIS
として製造されている。

第三世代型ビックバイパーⅡリルビエート

ギリシャ支部副支部長ニグラートⅡメティス（21歳）の専用
IS。

ヴェリヴィエッタ同様に全貌は定かではない。

姉妹機として作られている為、見た目は似たような感じの様だ
が……。

暴走事件の件から一日。

SHRにシャルルの姿はなかった。

一夏に理由を聞いても食堂で別れ、その理由は聞いていないとの事だ。

オマケにボーデヴィツヒもない。

ボーデヴィツヒ自身はそこまで重傷ではなかったと思うが、ISの方は半壊状態だろう。

今頃、ISの修理を行っているのかも知れない。

「み、みなさん、おはようございます……」

なぜか山田先生は元気がなかった。

テンションガタ下がりというよりは、何か衝撃的な事が在って気を失っている感じがする。

「織斑君、なにを考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしようとしているのはわかりますよ。先生、怒りますよ。はあ……」

一夏が何か山田先生を子ども扱いするような事を考えていたらしい。
しかし、怒りますよと言っているわりに覇気がない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

山田先生の説明は微妙なものだ。

私も含め、すでに4人もの転校生が来ているというのに、ここに来て5人目とはなんともし難い。

やはり、ブリュンヒルデが担任という事で1組に入りたい人間は多いのだろう。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞いた事のある声がした。

「シャルロット＝デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

女子制服を着たシャルルもといシャルロットが礼儀正しく一礼する。

クラス全員が啞然とした表情をしている。

表情にこそ表していないものの、私も少なからず啞然としていた。私が考えていた以上に、シャルロットという人物は積極的な女性のようにだ。

これでシャルロット引きこみ作戦は白紙に戻ってしまったが、なんとかしてシャルロットをデュノア社の社長にまで引き上げてやるう。

なに、3年間もあれば耄碌爺を一人落とす程度は容易い。

そんな事を考える私の瞳には、クラスの全員がシャルロットに釣られるように一礼している光景が映る。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということでは。ああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

なるほど、山田先生に覇気がなかった理由はその部屋割りをやり直すのがイヤだったからなのか。

しかし、その程度で落ち込む教師というのはどうなのだろうか？

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

そういえば……。

昨日は確か……。

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちよつと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！

」？

そうだ。

一夏とシャルロットが大浴場を……。

「マリーチ様？」

一夏がハーレムを作るのは許せる。

何人妾が居ようが問題はない。

これは、私が武装神姫マリーチとしての記憶を有しているからなのだろう。

マスターは私以外の武装神姫を買わなかったが、普通は数種類の武装神姫を持っているものだ。

だから、何人の相手がいようが構わないし、欲を言えば私が本妻であって欲しいが、別に妾でも構わない。

だが、お風呂は許せない。
裸で……。

「一夏あつ!!!」

何か聞えたような気がした。

でも、この胸の底から湧きあがってくる何かを……。

フツフツと湧き上がってくる何かを知る方が先決だ。

《ソ ハ、ワタ イバ ヨダ。ワ ノバ ヨダ》

Side ドロテア=リッケン

教室の扉が物凄い勢いでた。

「一夏あつ!!!」

そこには、鬼の様な形相をした鈴様がいる。

1組女子の声が2組にまで聞えてしまったらしく、鬼人ゲージが
一気に振り切れて常時鬼人強化状態になってしまったらしい。

「死ねっ!!!」

普段よりも早い速度でISを展開し、展開とほぼ同タイミングで
両肩の龍砲をフルパワーで一夏様に向けて解放した。

この速度では一夏様のIS展開は間に合わないだろう。

場所的に一夏様を助ける為に駆けつけることが出来ない。

それになんだかマリーチ様の様子もおかしい。

しかし、このままでは一夏様がご自身のトマトケチャップ塗れになっってしまう。

プレシジョン・バレルならば、龍砲を相殺できるが同時に相殺時の余波で一夏様が木っ端微塵になってしまう可能性もある。

それに、マリーチ様が行動を起こさないのはおかしい。

絶対に何かしら行動を起こすと思っていたのだけれど……。

なんか、私もおかしい。

考えが纏まらないし、自分でなに考えているのか分からなくなってきた。

ズドドドドオンツッ！

結局、混乱した私は、何もしいままその光景を見守ることしかできなかった。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

肩で息をしている鈴様の姿は、怒った猫の様にも見える。

元々鈴様はねこ科の様な感じがあったし、猫は好きなので、私には鈴様も可愛らしく見えていた。

なんの因果か、アーティルも山猫型らしいし……。

いつか鈴様には猫耳を付けてもらおう。

そして、写真を1枚撮って携帯の背景にするんだ。

そんな感じで現実逃避をしていたのだけど、逃避先の妄想から戻ってきた時、私の目に映ったのは信じられない光景だった。

あのラウラ隊長が、一夏様を守っている。

しだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

そう吹き込んだのは、おそらくクラリツサ副隊長だろう。クラリツサ副隊長は日本の少女漫画の熱狂的なファンで、そこから日本文化の知識を得ている。

そのためか内容はかなり偏っており、間違いだらけだ。

私もO・P・Fに来た当事は、クラリツサ副隊長が言っていた事を少し信じていた節はあったが、当の日本人から間違いだと指摘され、現実とアニメの絶対的な差を思い知る。恥かしい思い出だ。

「あ、あつ、あ………！」

どうやら鈴様が再起動したらしい。

それと同時に龍砲の方も再チャージが開始されている。

「アンタねえええつ……！！！」

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い……！！！」

一夏様は早々に説得を諦め、教室後ろ側出口から脱出を試みている。

だが、それはうまく行かないだろう。

「ああら、一夏さん？ どこかにおでかけですか？ わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。 ええ、突然ですが急を要しますの。 おほほほ………」

鈴様同様にゲージが振り切れてしまい、病んでいる状態になってしまったセシリア様がゆっくりと席を立つ。

その手にはスターライトmk.3が握られており、二度目の射撃に備えてトリガーに指がそえられている。

一夏様はドアからの脱出を諦め、窓の方へ向かう。

白式を展開し、脱出するつもりなのだろうが、窓側には箒様の席があり……。

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で おわあっ！

？」

問答無用で斬りかかる箒様。

法の外側に在るとはいえ、真剣を教室に持って来ても良いものなのだろうか？

窓からの脱出も不可能となった一夏様は、デタラメな逃走をはじめめる。

その先に笑顔を湛えたシャルロット様がいるとも知らずに……。

「にっっ」

「に、にっっ」

にこって自分の口で言う時点でかなり怒っている事が分かると思
うが、一夏様には分からなかったらしい。

それとも、シャルロット様のエンジェルスマイルは怒りすらも覆
い隠す効果があるのだろうか？

後日聞いた話だが、1組から絶える事なく聞えてきたのは、底冷える様なマリーチ様の高笑いだけだったらしい。

S i d e マリーセレス

システムメッセージ：ワンオフ・アビリティ・バツカルコーン+
E83が使用可能となりました

O・P・F | NETジャーナル 第六回

「初めまして、今回よりO・P・F | NETジャーナルを担当する事になった忍者型MMSフブキのアドウムブラリと申します」

「うきゅ（訳：一人だとはまらないので、次回に引き続き一緒にいるミニツクの雪羅です）」

「今後は二人でやって行きます。それでは、第六回を開始します」

「きゃきゃきゅ（訳：わーわー、パチパチパチ）」

「とりあえず、私アドウムブラリの説明をしましょう」

忍者型MMSフブキ/名前：アドウムブラリ。

武装紳士、武装淑女が一番最初に受け取る武装神姫。

元々ネット限定だったが、人気があったためホビー化した。

ちなみに作者もフブキはかなり気に入っており、マリーゼレスよりも先にLoveが30になった。

（現在、86とか断トツである。アーンヴァル？ ごめん、Love38で止まってるや……）

本作に登場する予定はない。

登場するとしたら式式装備になると思われるが、12年2月23日発売なんだよね。

おそらく、その頃には完結していると思われる。

補足説明、アドウムブラリ。

アドウムブラリは、どこかの次元で青みがかった霧に隠された深遠の奥底に棲息している？生ける影？と呼ばれる存在だ。

自分の意志で動く事は不可能だが、人間そっくりな使者を作って次元を超えて送り込む事ができる。

使者は、主人の為に人間（獲物／餌）を捕らえるらしい。

「では、感想の返信に移ります」

「うきゃー（訳：今回は比較的早めに返信できた。やったね）」

> 緒方 紅夜 様<

支部内忠誠度が異常ですなww

マスターの睨を自分なりにまねたのかな？

武道の師範とかそんな感じで厳しくかね。

ヤクザの手法、どん底から手を伸ばすではなくてよかったwww

そういえばマリーのセリフ途中で豹変するのはどんな感じになるのかな？

いきなり般若みたいになるのかそのままの顔で言ってるのか、気になる。

あと、量産型の方々を全部姫神で想像したら萌えた。

ぜひともアイドル型の登場がみたい。

武装はどんくらいだったっけな、アイドル。

てか姫神の武装のネタ武器を作るかどうかだな……

「ヤクザの手法は、下克上される可能性が微妙にありますからね」

「きゅうきゃ？（訳：自らに信頼を寄せさせる事で下克上の可能性すらも減らしてる？）」

「さて、アイドル型ですが……。一部、出せそうな箇所があるので試してみます。ネタ武器に関しては、号泣剣クレイモアもありますので、多少は出す予定です」

「きゃ（訳：豹変の描写をどこかで書いてみます）」

> kusari 様<

なんだかあっさりと終わってしまったって少し物足りない気分です
てつきり前回の最後から一夏そっちのけで教師陣との戦闘が描かれるのかと思いきやいきなり終わっていたのでおどろきです

今回はマリーチ様は出ておらず後で「私をのけ者にしたおしおきです」
とかいってドロテアが何かされないか心配です

「書こうとは思ったのですが、背後のスキル不足です。申し訳ありません」

「ううきゃ（訳：でも、福音との戦いはシッカリ描写します）」

> 骨皮 筋男 様<

ゼルノ三姉妹ですか！

つてことは、勿論死亡フラグ癖も・・・？

神姫の中で一番好きなのは、実はゼルノグライドだったりします（

フィギュア持ってないけど・・・）

ベリク欲しいなあ・・・

「無論です。死亡フラグのないゼルノグライドなんていません！」

「きゃう（訳：呼吸するように死亡フラグを乱立）」

> 緒方 紅夜 様<

まともなのがブラジルしかない現状……

そしてギリシャには頑張ってほしいっ！

あの形状には心躍る！

エストリルとジルリバーズはかつこいい。

こっちの方が市街地戦向きでは？

比較的すっきりした感じですし、平時はバイクですし。

三輪車え……

高重力の星では活躍しそうですが……限定的ですね。

PICが逆に邪魔ですし、でもない制御もままならない。

はっ！ 逆に考えるんだ！

キャノンボール専用機に違いない！

「アメリカ支部も比較的まともですよ。支部長がまったりなので」

「ううきやう（訳：ギリシャ支部は、とある事件の時に完成して駆けつける予定があったり）」

「O・P・F社は自由な思考を優先します。使える使えないは、二の次ですが、もちろん企業なのでお金稼ぎの事も考えて……」（以下略）」

>しんかー様<

ジルリバース型が一番好きですが、声が箒とかぶると……。でもISとして見ると実用性に疑問大ですね。残念です。走るより飛んだ方が、直線距離を移動できるので絶対速いですから。

「ご安心ください。ジルリバース型がモデルである人物はイーダ型がモデルである人物の娘なので、年齢的に幼く、登場したとしても子供時代の箒みたいな声になるかと」

「きゆう（訳：ヘリツシユクレイドルEXを空中で発動すると、飛んでる様な感じになったんできつと大丈夫）」

「または、浪漫であると……」

> 骨皮 筋男 様<

吹っ切れてワンオフ解除ですか!!

恐ろしやマリーチ様・・・

そういやゼルノはロシアでしたね。んでもってフォートはアメリカ、ムルメはドイツ・・・実はめっちゃ仲悪いんじゃない・・・

「一番年上がムルメルティア型がモデルの方なので、姉妹の方で喧嘩をする事は無いようです」

「ううきゃあ（訳：乱立する死亡フラグを押し折ったり、代わりに押し付けられたりするフォートブラック）」

「うきゅ。きゅああああ！（訳：今回はコレで終わります。 前回の宣言通り、本気だせた！）」

「それでは、O.P.F|NETジャーナル？はOvest Post
Zzo Fabrica（オヴェスト ポッツォ ファブリカ）
とA/cute Dynamixキュート・ダイナミックスの
提供でお送りいたしました。次回もコレくらいのペースでやりたい
ですね」

朝っぱらから騒がしい事だ。

遅刻しそうになりシャルロットが部位展開を行ったらしい。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けないがしかし」

出席簿の頭を引っ叩かれる一夏とシャルロット。

実に痛そうだ。

「敷地内でも許可されていないISの展開は禁止されている。意味はわかるな？」

「は、はい……。すみません……」

優等生が規律違反を犯したのが衝撃的だったのか、啞然としている生徒が多い。

ちなみに、一夏とシャルロットが怒られている間に箒とラウラはコッソリと自分の席に着いていた。

「デユノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりだな」

「はい……」

その後、二人が席に付くと共にチャイムが鳴る。

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

実に面倒な事だが、IS学園も一応は高校。

すでに大学を卒業している私としては、暇で仕方がない。

中間テストがないため、面倒なイベントが一つへって嬉しいけれど、期末テスト一回で成績が左右されるのは一部の生徒にとってはきつくないか？

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れる事になる。自由時間では羽目を外し過ぎないように」

七月頭に行われる校外実習、いわゆる臨海学校。

去年ならその時期はプライベートビーチでノンビリしているところだが、今回はお預けだ。

だが、海という事は一夏の水着が見れる。

「悪くないですう。いまから楽しみですう」

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかり勉強に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

委員長タイプの鷹月が織斑先生に質問をした。

朝から山田先生の姿が見えなかったから少しは気になっていたが……。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。」

なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？ いいな」

「ずるい！ 私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろっなー」

山田先生とて仕事で言っているわけだから泳いでいる可能性は低
いだろう。

それに、山田先生はかなりマジメな性格をしているし……。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行ってる
だ。遊びではない」

「「「「はい」」」」

実に鬱陶しそうに言う織斑先生。

その言葉に一齐に返事をする1組も中々度胸が付いてきたと思う。

そして臨海学校初日。

休日になにやら面白いイベントが合ったらしいが、一夏は鈍感なの
で大丈夫だろうと判断し、私は一日中ドロテアを抱き枕にして寝
ていた。

実に抱き心地が良い。

日に日に柔らかい部分が大きくなっている様な気がするあたりに

イラストとするが、まあ良いだろう。

「海っ！ 見えたあっ！」

はあ……。

いまも隣の席に座っているドロテアに抱き付きながら情眼を貪っていたのに……。

1組はみんな元気だ。

むしろ、元気すぎるくらいだろう。

ちなみに一夏の隣に座れたのはシャルロット、セシリアの隣にはラウラ、私の隣はドロテアという感じになっている。

さらに一夏とシャルロットの席の向かい側がセシリアとラウラの席だ。

箒はセシリアとラウラの席の後ろにいる。

私とドロテアの席はそのさらに後ろだ。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生が口を開くと、全員文句を言わずに従う。

私もあれほどの指導能力が欲しいものだ。

「マリーチ様、そろそろ到着するようです。起きてください」

そうやって私を揺さぶるドロテア。

おそらく私が起きている事には気がついてはいるが、一応形式的に行っているのだろう。

「むう……。わかったですう」

さもいま起きましたという感じに伸びをし、軽くあくびをしながら目を擦った。

ほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着する。なんかもう殆ど寝ていた様な気がするが、どのクラスにも私みたいなのは一人くらいいるだろう。

身体の方は少しだけ寝ぼけていたため、ドロテアに手を引かれ1年1組の列に整列する。

4台のバスから出てきたIS学園一年生の総数はかなりの物だ。

一般客が居たら間違いなく「邪魔」と思うことだろう。

なにせ、旅館の出入り口を占拠しているのだから……。

だが今回、というか……。IS学園での場合はそういう心配はない。

なにせ、旅館そのものを貸切状態に出来る財力を満ち合わせている。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」」」

織斑先生の言葉の後、一年生全員が元気良く挨拶をする。

それに答えたのは、三十代前後と思われる着物姿の女性だ。

旅館の女将さんなのだろう。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね
今年の一年生もか……。

IS学園の一年生は、毎度毎度元気が有り余っている女子ばかり

なのだろうか？

もう少し、私みたいな武装淑女を育成した方が良いと思う。

「あら？　こちらが噂の……？」

女将さんは一夏を見た後、織斑先生に質問をしていた。
しかしまあ、女将さんと織斑先生の世間話に興味はない。

「ドローテア。初日の予定はなんですか？」

「はい。初日は終日自由時間です。海に行かれますか？」

あー。

ジイヤが用意した水着があつたな。
確認はしていないが……。

「ま、水着はあるし、荷物置いたらすぐに行くですう」

「承知いたしました」

そんな話をしていると、ちょうど女将さんと織斑先生の世間話も
終わつたらしい。

「それじゃあみなさん、お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別
館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用な
さってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いて
くださいまし」

「「「はい」」」

みんな元気に返事をし、旅館の中へと向かって行く。

途中、一夏がドロテアの友達に捉まっているのが見えたが、少し話すと織斑先生に呼ばれて別の場所へと移動していった。

「部屋に行くですう」

「承知いたしました」

「私も行くこつ」

「わたくしも行きますわ」

「ほら、ラウラも行くこつ」

「……。あ、ああ」

鈴を除いた私、ドロテア、箒、セシリア、シャルロット、ラウラは割り振られた部屋へと急いだ。

やはり海は良い。

なにせ、海は私の領域だから……。

武装神姫マリーセレスって、装備品からしてクトウルフがモデルだと考えているのは、絶対に私だけではないと思う。

クトウルフは水を象徴する旧支配者の一柱とされているが、別に水の属性を持っているワケではないらしい。

その証拠に、クトウルフの精神崩壊テレパシーは大量の海水により遮られている。

眷属には右腕のムナガラ、父なるダゴン、母なるハイドラ、水棲種族「深きものども」(レッサー・オールド・ワン/ディープ・ワン)などがある。

住処であるルルイエが海底に沈み、自身もその場に封印されたので、周りの水棲生物を片っ端から支配下に置いて守りを固めたんじゃないかな？と勝手に妄想をしてみる。

ちなみに、最も信仰されている旧支配者だが、実力は中の中くらいであんまり強くないらしい。

中の上くらいから強さがインフレを起こす事を考えると、弱い部類に入るかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670x/>

武装せし神の姫

2011年10月28日18時17分発行